住民による住民意識の聞きとり調査とテキスト，イラスト・マップ化の試み

—野川をフィールドとして—

1985年

吉田喜八郎

井戸端議会・小金井代表

目　　次

はじめに …… 1
1. アンケート調査の目的と方法 …… 1
2. アンケート回答者の状況 …… 5
2－1　住所の分布状況 …… 5
2－2　年令構成の状況 …… 5
2－3　回答者の職業について …… 5
2－4　回答者の居住開始時期と前住者の状況 …… 5
3. アンケート集約と成文化の過程 …… 6
(1) 事前調査（１９８１年５月～１２月） …… 7
(2) アンケート作製（１９８２年１月～７月） …… 7
(3) アンケート集約（１９８２年８月～１９８３年６月） …… 7
(4) 成文化（１９８３年７月～９月） …… 8
(5) 印刷・製本（１９８３年１０月～１９８４年２月） …… 8
(6) イラスト・マップ作製（１９.８４年２月～４月） …… 9
4. テキスト，イラスト・マップの効果 …… 9
(1) 新聞報道 …… 9
(2) テレビ報道 …… 10
(3) 小金井市主催行事への参加 …… 14
(4) 野川シンポジウムの共催 …… 14
(5) 読者よりの感想 …… 14
(6) そ の 他 …… 16
おわりに …… 17

図１　調査区の状況 …… 4
別表１　調査状況 …… 5
別表２　回答者の住所分布状況 …… 5
別表３　回答者の年令構成状況 …… 6
別表４　回答者の職業の状況 …… 6
別表５　回答者の居住開始時期と前住地 …… 6
別表６　『私たちの野川』配布状況 …… 10

別紙１　質問用紙 …… 2
別紙２　回答用紙 …… 3
別紙３　「小金井新聞」（１９８４年６月１日付） …… 11
別紙４　「アサヒタウンズ」（１９８４年５月２６日付） …… 12
別紙５　「アサヒタウンズ」（１９８４年１２月８日付） …… 13
別紙６　和菓子店の宣伝例 …… 18
別紙７　東京都生活文化局「ゆりかもめ」（第１３号）より …… 19
別冊１　テキスト「私たちの野川」
別冊２　イラスト・マップ「私たちの野川」

はじめに

１９８０年秋，小金井市公民館本町分館主催で「わが町わが暮らし―町づくりを考える―」という市民講座が開かれました。新宿から中央線を西に約３０分余りの，東西も南北もほぼ４キロメートルしかないこの小さな小金井市をフィールドとした学習会が始まったのです。小金井市内には，法政大学工学部，東京農工大学工学部，東京学芸大学の３大学があります。私たちはこの３大学の研究者のみなさんから身近かな町を自分の目で見なおす視点を学びました。

私たちは市民講座が終わると「井戸端議会・小金井」という市民グループを作り，自主的に学習を続けていくことにしました。小金井市内をみんなで歩き，意見をかわしながら，手さぐりで「町のみなおし」を始めたのです。約一年後，私たちは小金井市の南側を流れる野川を共通のテーマとして学習を深めることにしました。身近に流れる野川を中心に近りん市もふくめて広く見わたし，直接野外での観察会を行う中で，汚れた水の流されている野川をなんとか浄化し，もう一度ふるさとの小川として子どもたちに親しんでもらうことはできないかと考えさせられました。

こうして，ともかくも野川の近くに住んでいらっしゃる住民の方に広く御意見をうかがい，その上で，手づくりで野川についての小冊子やイラスト・マップなどを作ってみようということになりました。

私たちのグループには，この種の研究の専門家はおりません。母親や，企業を退職された方，サラリーマンなど，ただの住民として気長にとりくむことになりました。この中で法政大学工学部教授河原一郎氏と，同研究室の研究者のみなさんから御指導と御協力をいただくことができました。またとうきゅう環境浄化財団より昭和５８年度研究助成をいただくことができたことは大きなはげましとなりました。ここに慎しんで感謝いたします。

1. アンケート調査の目的と方法

野川を住民意識の中で過去の想い出，現状への評価，あるべき未来像の各々にわたり直接聞きとり活動を行なうことを第一の目的としました。私たちの事前討議では，野川の水質分析や生物調査などの科学的・定量的な分析については，別に研究者の調査活動があるため，今回は住民意識の感性面を大切にしてできるだけ地域の話をひき出すことに重点をおくこととしました。このため，質問用紙（別紙１），回答用紙（別紙２）とも自由回答を中心に準備しました。質問項目のあいまいさは，各自が口頭で補足することにしました。

調査区は，小金井市内の野川を三等分し，「上流」を都道２４８号線以西の上流部分，「中流」を都道２４８号線から多磨霊園参道の丸山橋まで，「下流」を丸山橋以東の下流部分とし，南北おおむね歩いて野川より５分程度の地域を「流域」と想定しました。また，これ以外の地域の方を「流域外」とし，全体を４調査区としました。（図１参照）

調査日は１９８２年７月３日より２６日までの間とし，上流・中流・下流ごとに各４名の会員が分担することにしました。対象抽出については，各担当者に一任し，各調査区ごとに５０件を目標とし，そのう

別紙1

調査用紙

野川をわたしたちの身近なものにするためにお聞かせ下さい。

くらしと町づくりを考える市民の会（通称井戸端議会小金井）

一九八二年七月

はじめまして、井戸端議会小金井です。一九八〇年秋に、公民館主催で「わが町わが暮らし——町づくりを考える——」というテーマの市民講座が開かれました。私たちは小金井にある三つの大学の先生、研究者の方々と共に住みよい町づくりの学習をし、これがきっかけとなって生まれたのがこの会です。参加者は自分たちの住んでいる小金井の町を見つめなおし、自然・生活・歴史など様々な内容のものを自由に自発的に学び発表しあっています。

昨年からは、ハケ下を流れる「野川」にスポットをあて、かつては清流、今は汚水と化した野川を私たちの身近なものにするためにはどうすればよいか考えを出しあっています。つきましては、みなさま方からも野川とそれをとりまく環境についての御意見やお話を伺わせていただきたいと思います。

なお、まとめた結果は後日お知らせいたします。

1. ここにはいつ頃から住んでいますか。それまではどちらに住んでいましたか。
2. 「野川」という言葉を聞いて、あなたは何を思いうかべますか。
3. 野川に沿って散策したことがありますか。その時、どんな動植物に出あいましたか。
4. 野川のどのあたりが好きですか、嫌いですか。
5. 野川の水源がどこか知っていますか。野川の水源に行ったことがありますか。その時どう感じましたか。
6. 野川近くの湧水をいくつぐらい知っていますか。その湧水について何か感じたことがありますか。
7. 昔の野川の様子を知っていたら教えて下さい。
8. 野川の汚れ具合、臭いなどについてどう思われますか。
9. 野川の増水で被災したことがありますか。その時期と被害の様子をお聞かせ下さい。
10. 野川の護岸についてどういう形が望ましいと思いますか。
11. 野川に関することで行政に知ってもらいたいこと、やってもらいたいことがありますか。
12. 野川をとりまく自然環境を守っていくためによいアイデアがありますか。
13. 野川がどんな川だったらいいと思いますか。どんなことでもどうぞ。

御多忙中どうもありがとうございました。

別紙2

回答用紙

一九八二年七月

くらしと町づくりを考える市民の会

※　よろしければお答え下さい。

イ・年齢　①～一九才　②二〇～二九才　③三〇～三九才　④四〇～四九才　⑤五〇才～

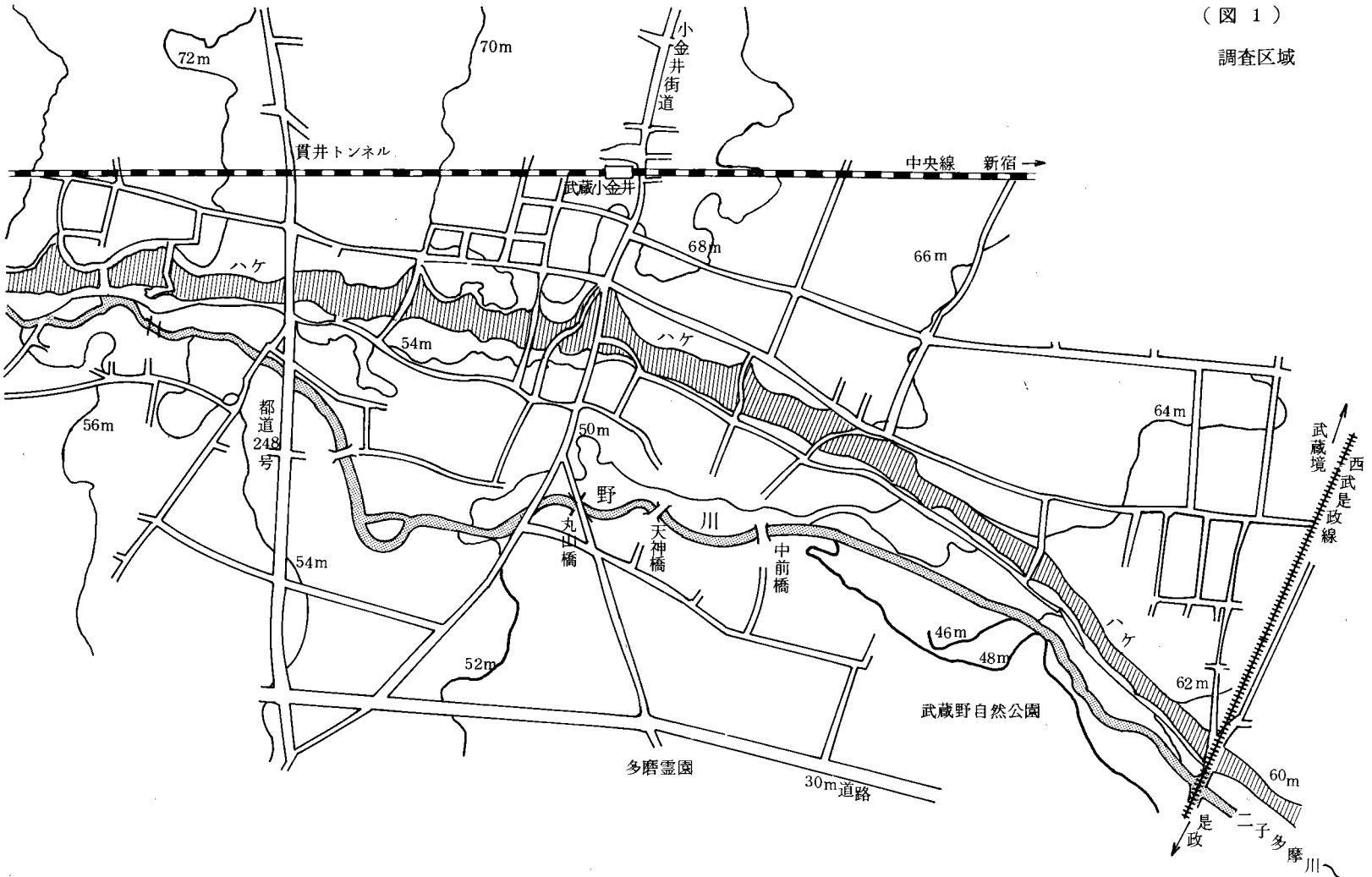
ロ・住所　ハ・氏名　ニ・職業

1.　2.　3.　4.　5.　6.　7.

8.　9.　10.　11.　12.　13.

（図 1）

調査区域


72m
70m
小金井街道
貫井トンネル
中央線　新宿→
武蔵小金井
68m
66m
ハケ
54m
ハケ
56m
都道248号
50m
64m
武蔵境
西武是政線
野
川
丸山橋
天神橋
中前橋
54m
46m
48m
ハケ
52m
62m
武蔵野自然公園
多磨霊園
30m道路
60m
是政
二子多摩川

ちから各自「流域外」に住む知人等からも任意に聞きとり調査を行なうこととしました。調査状況は別表1のとおりです。

2. アンケート回答者の状況

2－1　住所の分布状況

回答者の住所の分布は，市内の東町，緑町，中町，前原町，本町，貫井北町，貫井南町の7町にわたる一方，市内東北部の梶野町，桜町，関野町の3町からは回答者をえられませんでした。

流域別に回答者の多い町は，上流では貫井南町（２８人），中流では前原町（１５人），下流では前原町（１９人），中町（１５人）となっています。流域外では本町（１９人）が多くなっています。（別表２）

2－2　年令構成の状況

回答者の年令構成については，区分を①１９才以下，②２０代，③３０代，④４０代，⑤５０代以上の５段階に分けました。（いずれも１９８２年7月の調査日を現在とする。）

この結果は別表3に示してあります。２０代以下の回答数が少なかったのは，各世帯毎に世帯主（またはその妻）の方から直接聞きとりをした例が多かったためです。

（別表１）　調　査　状　況

		流域内外別		
		内	外	計
調査区別	上　流	３３	５	３８
	中　流	２３	２１	４４
	下　流	３４	２７	６１
	計	９０	５３	１４３

（別表２）　回答者の住所分布状況

町別		合　計	（％）
住所	東　町	９	6.3
	緑　町	５	3.5
	中　町	２１	１4.7
	前原町	４０	２8.0
	本　町	１９	１3.3
	貫井北町	３	2.1
	貫井南町	３９	２7.3
	市　外	４	2.7
	ＮＡ不明	３	2.1
計		１４３	１００.0

2－3　回答者の職業について

回答者の職業については，①自営業（農林漁業，商工業，サービス業，自由業），②被傭者（事務職，労務職，技術職，管理職），③主婦，④学生（児童・生徒をふくむ），⑤無職，の５分類としました。この結果は別表4に示しましたが，主婦・自営業など在宅の方の回答が過半数をしめました。

2－4　回答者の居住開始時期と前住地の状況

回答者の小金井市に居住を始めた時期については，時代区分を①昭和１９年以前，②昭和２０年代，③昭和３０年代，④昭和４０年代，⑤昭和５０年以降の５つにしました。また以前住んでいた住所については，①転居せず（小金井で生まれ育った），②市内，③２３区内，④三多摩，⑤他道府県の５分類としました。この結果については別表４に示しました。内訳をみると，小金井市の人口急増期である昭和３０～

（別表３）　回答者の年令構成

年代別		計	割合
年令	～１９才	１４人	9.8％
	２０～２９才	7	4.9
	３０～３９才	３４	２３.8
	４０～４９才	３６	２５.2
	５０才～	４９	３４.3
	N.A，不明	3	2.0
合計		１４３	１００.0

（別表４）　回答者の職業

		計	割合
職業	自営業	２６人	１８.2％
	被傭者	３４	２３.8
	主婦	４６	３２.2
	学生	１５	１０.5
	無職	１３	9.1
	N.A，不明	9	6.2
合計		１４３	１００.0

（別表５）　回答者の居住開始時期と前住地（年代別・流域別）

（構成比：％）

年代別	合計							合計					
調査区別	～19	20	30	40	50～	NA不明等	計	上	中	下	外	計	構成比
転居せず	１２	2	1	6			21	4	5	9	3	21	14.7
市内		1	6	8	１１		26	6	7	9	4	26	18.2
２３区内	2	1	7	１９	6		35	１１	6	9	9	35	24.5
三多摩	2	3	5	3	8		21	3	1	3	１４	21	14.7
他県		3	2	7	6		18	4	3	3	8	18	12.6
NA,不明その他	3	2	4	7	3		22	5	1	1	１５	22	15.3
計	１９	１２	２５	５０	３４	3	143	３３	２３	３４	５３	143	100.0
構成比	１３.3	8.4	１７.5	３５.0	２３.8	2.0	100.0	２３.1	１６.1	２３.8	３７.0	100.0	

４０年代に居住を始めた方が５２.５パーセントをしめ，このうち小金井市内から転居をした人をふくむ「小金井人」が約１５パーセント，他地区からの転入者が約３０パーセントをしめている点が注目されます。また全回答者数のうち市内から転居した人をふくむ「小金井人」は３２.９パーセント，他地区からの転入者は５１.８パーセントでした。

3. アンケート集約と成文化の過程

アンケートづくりを始めて一応のまとめを行ない，更にテキストとイラスト・マップを作るために，未経験者の私たちは，次に示す６つの過程を経てきました。

(1) 事前調査（１９８１年５月～１２月）

この時期に，まず広く「野川」をテーマとすることを全員で決めた上で，「野川を考える」と題する学習会をのべ６回行ないました。またフィールド・ワークを３回実施し，各自の自接体験を通して「何が見えてくるのか」を模索しました。後に必要となった基礎資料の収集や検討もこの時期に行ないました。

主なレポート名は以下に一例をあげておきます。「昭和１８～１９年頃私の釣った魚」「貫井の水車」「貫井村水利図考」「野川の水害について」「1／2,500 地図を囲んで考える」「野川の水源は？」等々です。またこの年の８月には野川ぞいの都立武蔵野公園で開かれた「わんぱく夏まつり」にも自主参加し，子どもたちとの一泊野外キャンプを楽しみました。

(2) アンケート作製（１９８２年１月～７月）

この時期には毎月一回の例会をもち，３月には，アンケート素案が出きました。この上で４月には野川沿いを歩き"お花見"を行うなど，会員の相互交流を深めることができました。４月にアンケートのテーマを５月にはアンケート実施方法と対象範囲について，各々確認がされ，６月にやっと案文をまとめることができ，あわせてアンケート実施要領もできました。こうして，最後まで「自由回答か」「択一回答か」をみんなで論議しつくすことができたのは，この時期の大きな成果でした。こうして７月３日から２６日までの間，会員各自の手で直接聞きとりを中心にアンケート調査が進められました。

(3) アンケート集約（１９８２年８月～１９８３年６月）

１９８２年８月，１４３通の貴重な回答用紙を前にして，私たちは８月下旬の「わんぱく夏まつり」の準備にも併行して参加しました。まず第一に回答の集計方法を全員で協議し，「できるだけみんなで回答全体をながめわたす」ために，各自で設問項目を複数うけもち，結果を例会で発表することにしました。こうして全員で回答の全体像をつかむ努力がされました。次に回答内容を設問項目ごとに原稿化することにしたのが１９８２年１２月のことでした。この時期にとうきゅう環境浄化財団より助成金の可能性も出てきたため，最大限努力をし，よりよいまとめをめざすことにしました。

第一次原稿集約が，当初予定していた１９８３年３月から大幅にずれこみ６月になりました。これは，最初は手書きファックス印刷を予定していたまとめが，タイプ・オフセットとなったため，各担当者毎に第一次原稿の発表・討論が質・量ともに増加してきたためです。中には，家事のあい間をぬって野川の自然観察を集中して行なう主婦の会員もあらわれ，第一次原稿は時間的にまにあわない部分もでてきました。このため，テーマをさらに小分類し，併行してテキスト（小冊子）用第二次原稿づくりにとりくむことになったのが，この年の６月下旬でした。

これに先だって5月8日には，会員以外にもよびかけ，「野川を歩く会」を主催しました。国分寺市日立中央研究所源流から，小金井市の武蔵野公園まで，おおむねポイント地点の時刻を想定し，途中参加や途中解散も自由としました。小金井自然観察会の御協力もえられ，日立中研内池でのカイツブリの確認や，貫井南町の通称「ナンジャモンジャノキ」の確認，植物採集ができ，この結果はのちにテキスト『私たちの野川』の中に，「動植物とのであい」としてまとめられました。

(4) 成文化（１９８３年7月～９月）

この時期には，会員は夏休みを返上し，ほぼ毎週，中には連日の打ち合わせをおこなうなかで，第二次原稿づくりが進められました。まず最初に「野川とはこんな川です」という文章をおこし，全員で文章表現上の統一性を保つためのモデルとして推敲をしました。（この文は，最終的にテキスト『私たちの野川』のうち「はじめに」の一部と，「地図２」の説明文の全文となりました。）

１９８３年8月6日，世田谷区民会館で開かれた「水辺環境シンポジウム」には会として参加しました。全国の水辺を中心によりよい環境づくりをめざす住民団体の方と交流することができました。本会より事務局が5分間スピーチに参加し，住民意識アンケートを実施し，取りまとめ中であることを報告しました。

8月下旬には，武蔵野公園で開かれた「わんぱく夏まつり」に有志で参加をし，キャンプをはじめ，早朝の自然観察オリエンテーリングのリーダーなどボランティア活動を行ないました。

こうして，フィールドとしての「野川」を立体的に考えることを通じて，テキストに対するイメージもふくらみ，対象を小学校中学年とし，「子どもたちがいかせるテキストはおとなにとっても必要になる」ことを話し合いました。こうして，９月に入り，原稿はほとんどタイプ浄書化することができました。

(5) 印刷・製本（１９８３年１０月～１９８４年2月）

この間，多摩川の自然を守る会「多摩川の自然」，同会「緑と清流を」，東京学芸大学第５回環境教育研究会「水辺の環境調査にもとづく教材化に関する研究―野川を例に―」，「こんにちは小金井」編「絵地図」，日本野鳥の会「山野の鳥」，同「水辺の鳥」，小金井市教育委員会「小金井市の文化財(1)～(3)」，同「ふるさとの民具」，日本観光文化研究所「あるく，みる，きく―特集・東京（Ⅰ）・（Ⅱ）―」，東京都観光連盟「東京おまつりマップ１２カ月」等，広く資料の収集につとめました。

こうして，１０月には印刷所を決定し，いよいよ版下原稿の作製に入りました。頁毎の基本レイアウト，章別の扉構成，コラム記事の配置，イラストや写真の位置決定，写植文字の配置等，編集上の事務を世話人・事務局で４回それも連日深夜まで行ない，３回の例会で会員の了解をえながら，印刷所に第１回の編集済原稿を入稿したのが１２月１６日，第２回が１２月２１日でした。さらに１９８４年1月には３回にわけ印刷原稿の校正を行ない，２月１日には校了としました。雪の中を，連日深夜・早朝にわたり，担当会員の方には御努力いただきました。

この中でも，ややもすると実務にながれがちな会の運営をかえるべく，１９８３年１０月２２日には

「野川を歩く会」を，１９８４年1月２９日には児童生徒を対象に「わんぱく野川自然観察会」を各々主催・共催しました。

こうしたテキスト『私たちの野川』は予定を遅れながら，１９８４年2月１８日に出版することができました。（巻末別冊綴込参照）

(6) イラスト・マップ作製（１９８４年2月～４月）

私たちはテキスト『私たちの野川』に続いて，イラスト・マップ『私たちの野川』作製に入りました。テキストの読み合わせをした上で，イラスト版のとりまとめを法政大学工学部河原一郎研究室にお願いすることとしました。そして，４月中の休日を利用し，会員のみなさんに法政大学まで集まってもらい，版下原稿づくりの細かいトレース作業やわりつけ作業をしていただきました。

また紙質も耐水性があり野外での使用にもある程度耐えられるものを指定することができました。

こうして校正終了後印刷所との打ち合わせもでき，イラスト・マップ『私たちの野川』を発行することができました。（巻末別冊綴込参照）

このイラスト・マップ作製にあたっては市内在住の画家彦坂和夫さんの御協力を得て，「こうしたいな野川ー野川スゴロクサミットー」というイラストレーションをよせていただきました。また地図中には手描き風景画を法政大学工学部計画研究室永瀬克己さんにお願いして入れていただきました。市販の地図と異なり，手描きのよさが出せたと思います。会員のみなさんの連日深夜にわたる御協力なしに，イラストマップの完成はなかったといえます。

4. テキスト，イラスト・マップの効果

私たちの活動は，「はじめに」でも述べたように，本来は社会教育活動の一環として出発したものです。その上でフィールドを決め，誰でも参加できるアンケート形式で広く住民によびかけ，さらにそのまとめをテキストとイラスト・マップの２つに集約することができました。

テキストとイラスト・マップの現在までの配布状況は別表５に示しておきました。現在までテキストの配布率は６７.９パーセント，イラスト・マップの配布率は１６１.６パーセントです。（イラスト・マップはとうきゅう環境浄化財団の助成対象は1,０００部でしたが，後日本会独自に増刷を行ない，現在も普及活動を行なっています。）

この結果現在まで次のとおりの反響・効果がでてきています。

(1) 新聞報道

三大新聞三多摩版でとりあげられた他，地元の「小金井新聞」（１９８４年6月１日号）で大きくとりあげられ，小金井市民の中で話題をよびました。（別紙３参照）

また「アサヒタウンズ」（１９８４年5月２６日付）では「野川」の特集がされ，本会の活動が取りあ

（別表６）『私たちの野川』配布状況

	テキスト	イラストマップ
(1) アンケート回答者等	１５３	１４４
(2) 会員他	２５	８
(3) 行政関係	１４８	２０４
(4) 報道関係	１０	１２
(5) 一般普及	３４３	1,２４８
計	６７９	1,６１６

（１９８５年７月３１日現在）

げられました。（別紙４参照）この「アサヒタウンズ」では１９８４年１２月８日付のコラム「窓」で，「心豊かに広がる輪」ということで本会を取りあげていただきました。（別紙５参照）

(2) テレビ報道

１９８４年８月４日付フジテレビで「現在の武蔵野婦人」というタイトルで，本会の主婦会員への取材をもとにした放映がされました。企画は東京都広報室ですが，イラスト・マップを手にハケの湧水保護や，野川の浄化にとりくむ会員の姿が大きな反響をよびました。

（別紙３）　「小金井新聞」（１９８４年６月１日付）

野川散策の絵地図

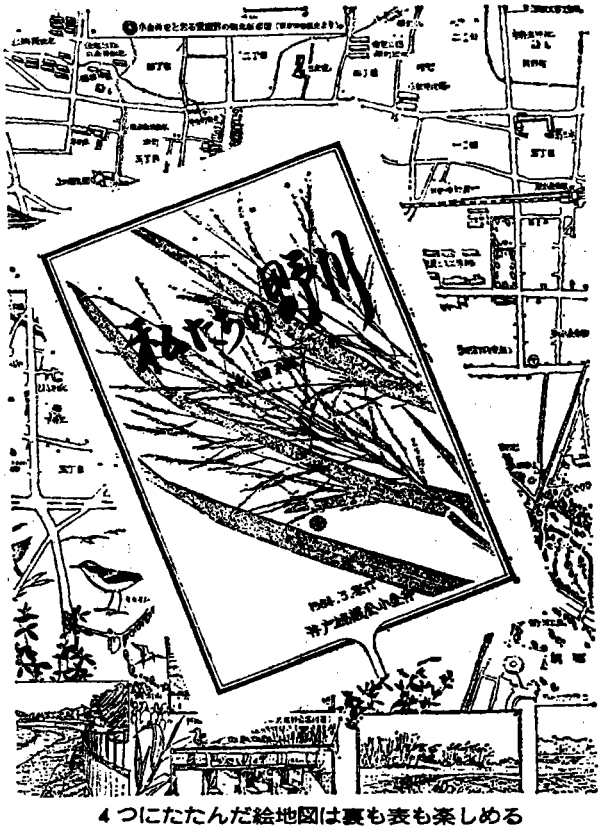
「井戸端議会・小金井」が刊行

四年前、市民講座に参加した人たちが中心になって結成した学習グループがこのほど、「私たちの野川―地図編」を発行、一般に配布を始めた。

このグループは「井戸端議会・小金井」（吉田喜八郎代表、会員十七人）で、「わが町わが暮らし―町づくりを考える」講座からスタートし、野川を題材に町のみなおし作業を続けてきた。今回の絵地図は、野川流域住民のアンケートを主体にまとめて今年三月に刊行した小冊子『私たちの野川』（B5判、百十四ページ）の姉妹編に当たるもので、野川を実地検分した際に、住民側から見た要点をイラスト入りで紹介している。

表は淡い緑と黒の二色で野川周辺の野鳥や野草が図解してあるほか、野川をきれいで楽しめる水辺にするための方法を〝スゴロク〟の形でわかりやすく説いている。裏面は黄、青、黒を使って、野川の源流である国分寺市から調布市までが描かれ、周辺の史跡なども表示されているイラストマップだ。また、フィールドワーク用でもあるため雨でぬれても破れない新合成紙を使用している。これらの刊行物の財源は、「財団法人とうきゅう環境浄化財団」（五島昇会長）からの助成金がもとになっているが、一市民団体に助成されるのは珍しい。

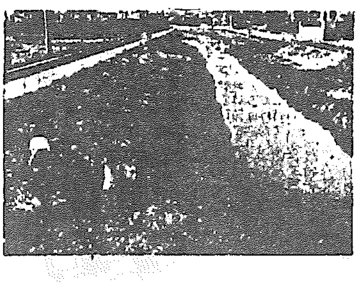
この〝野川地図〟は三千枚印刷され、公民館などを通じて一般に無料配布したいとしている。問い合わせは前原町三の四〇の一の三〇七、高橋克彦会員（電話八五局二〇三三番＝夜間）へ。



４つにたたんだ絵地図は裏も表も楽しめる

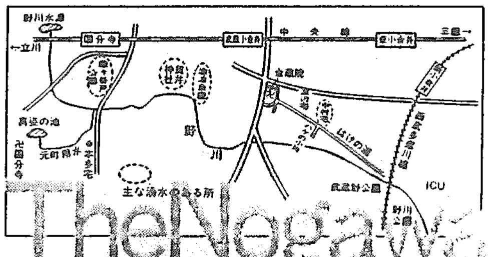
（別紙４）　「アサヒタウンズ」（１９８４年5月２６日付）

（15）　第580号　（第三種郵便物認可）　アサヒタウンズ　昭和59年5月26日　土曜日



湧水よよみがえれ　武蔵野を潤す野川（…武蔵野公園で）

国分寺市に源を発し、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を経て、世田谷区で仙川と合流し、二子玉川で多摩川へとそそぐ野川。延長20・23キロ、多摩川の中流下流部では最大の支流だ。野川に沿った国分寺崖線（ハケ）は湧水が多く、野川の重要な水源となっている。流域には古くから人が住みつき、川は人々の生活と深く関わってきた。野川の汚染が目立ち始めたのは、昭和30年代から。清流はやがてドブ川となり、見かねた住民達が立ちあがり、40年代末、各地に環境浄化を訴える団体ができ、現在も活動を続けている。野川の流域を歩くと、野川を愛し、守ろうという人々が多いのに驚かされる。　（山田優子記者）



The Nogawa

湧水を守る人々

水源地

水源地。しゅんせつ用のモーターボートが浮かぶ（国分寺市恋ケ窪で）

国分寺市恋ケ窪にある某電気会社の敷地内にある。数年前からの"野川ブーム"で、見学申し込みが多いが、私有地であることと、社内の人手がないことなどの理由で、一般公開していない。21万平方メートルの敷地内に主な湧水池は3カ所、1日千数百トンの水が湧き出ていたというが、年々減って、今は多い日でも数百トンあるかどうか。特にこの時期は少なく、湧水はほとんど出ていなかった。「こんなことは初めてです」と案内してくれた社員。同社では、湧水をためた大池の水を、冷却などに利用している。

キウイと「はけの道」

渡辺勇さん（39＝小金井市中町1―9―8・農業）「はけの道」沿いにある「はけの道果樹園」の経営者。53年、需要の伸びそうなキウイフルーツに目をつけた。600平方メートルに約200本植え、56年から畑先で即売を開始。珍しい上、味がよいとあって、小金井の新しい名物になりつつある。

同園は300年以上の歴史を持つ旧家。「はけの道」の名称は、勇さんの父、勇吉さん（76）が48年に命名したもの。

渡辺勇さん

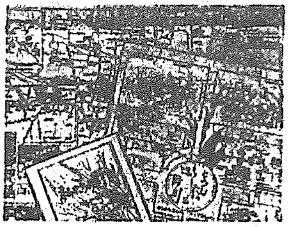
○○○武蔵野夫人○○○

中村富子さん

中村富子さん（76＝小金井市中町1―11―16）小金井市のハケの周辺には、大岡昇平「武蔵野夫人」の舞台のモデルといわれる家が数軒あるが、中村家もそのひとつ。ヒロインの家のモデルとの説もある。「大岡さんは、近所に住んでらして、遊びにいらしたこともありますの」。湧水はうっそうとした竹林の中にあった。湧き出るような水がチョロチョロ流れている。水は庭から流れ出し、小金井市が55年に造った遊歩道つきの水路「ハケの小路」を通って野川にそそぐ。

「空襲で焼け出され、親類縁者が越してきたときは、ゴウゴウと音を立てて湧水が流れていました。前に住んでいた方は、お風呂に使ってらっしゃいましたね」。一昨年あたりから水量の減りが目立ってきたが、今年のように少ないことは初めてとか。「水を守っていると、雨降りがうれしいんですのよ。せっかく水路を造っていただいたのに、涸れては申し訳なくて」。喜寿を迎えるとは思えぬほどの若々しさ、上品さ。「一日中森林浴をしているようなものですから」

シンポジウム開きたい…



一目で野川のことが何でもわかるイラストマップ

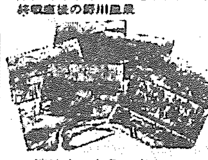
林茂英さん（52＝小金井市中町3―24―21＝日吉技術図研究所）「井戸端会議小金井」（吉田喜八郎代表）のメンバー。同会は会社員、主婦、建築家、大学講師ら17人で53年に結成。57年には、流域に住む市民143人に、野川のイメージ、どうしたいかなどをアンケート調査。「とうきゅう環境浄化財団」の助成を受けて、この3月にアンケートをまとめた環境浄化のためのテキスト「わたしたちの野川」を刊行。続いてこのほどイラストマップ3000部を作成した。

イラストマップは、片面は、野川周辺の詳細な地図と景観スケッチ、もう一方には、野川の浄化プランをイラストで説明。野鳥や植物も紹介している。「このイラストマップを使って、啓蒙運動を進めるつもり。他の野川の市民運動グループにも呼びかけてシンポジウムも開きたいですね」と林さん。

小学1年生の時、野川の近くに越してきた。釣りも泳ぎも野川で覚えた。「きれいな水で、冷たかった。泳ぐと体が冷えるので、隣の田んぼにつかって体を温めたりしてね。これ以上破壊してはいけない。何とか昔の姿に戻したいですね」

イラストマップご希望の方は0423―85―2033高橋京子さんへ（夜のみ）

本多克己さんの描いた昭和初期、終戦直後の野川風景



清流よ、もう一度

本多克己さん（53＝国分寺市西元町3―4―19＝造園業）「国分寺市環境浄化実行委員会（略称・国浄会）」の代表で、国分寺市を流れる野川（2キロ）の清掃を続けている。「多摩川をきれいにするには、支流からやらなければ」と、49年秋からゴミさらいを始めた。会員は男性ばかり20代から60代の二十数人。会員手造りの小舟を出し、クレーンとトラックでゴミを運ぶ。「初めは30トン出たゴミが最近は年間5～6トンほどに。今年から、国浄会の清掃も2回減らし3回にした。ゴミが減ったって国分寺市は下水が完備してなくて雑排水が流れ込んでるから、水はちっともきれいにならないね」

「管理者の都は、野川を"川"としてでなく、"排水路"としてしかみてない。やれ洪水対策だ、ユスリカ発生防止だと、コンクリートで川底まで固めようとしてるけど、ああなったら"生きてる川"じゃない。もしそうなったら、オレ達ゃ手を引くよ」。同会では、いつか水がきれいになったら放流しようと、国立市内でコイやフナを飼っていて、昨年清掃10周年を記念して3000匹を放流した。次はいつ放流できるかわからない。

生っ粋の土地っ子。野川のすぐ近くに住む。子どもの頃から遊び場といえば野川だった。昨年描いたという、昭和初期、戦争直後の野川周辺のスケッチ画十数枚がある。一面の田んぼの間を流れる清流、雨ごいのために川に入ったみこし…野川のこととなると記憶は昨日のようによみがえってくる。

（別紙５）　「アサヒタウンズ」（１９８４年１２月８日付）

窓

「はけの道」の出会い

〃〃〃 万葉集ゆかりの地

八王子市めじろ台4－33－4の佐藤冨仁子さんから、次のようなお礼状を頂いた。

「その節はいろいろとハイキングコースの資料を頂戴いたしまして、誠に有難うございました。おかげさまで11月6日に、9名のグループで西国分寺駅から武蔵小金井駅間の道中を見学したり、散策して有意義な一日を過ごすことができました」という書き出しで、和紙の便箋に、お習字の見本のような達筆で書かれてある。

佐藤さんは、めじろ台周辺に住む主婦たちで作っている万葉集を学ぶ会「あすか」の創立メンバーで、世話役をしておられる。同会は「地元でも強勉できる場を」と、埼玉・坂戸市立中央図書館の女性館長である飯高節子さんを講師に招いて、月1回、万葉集を詠み始めて7年目を迎えた。万葉集を詠みながら、当時の人の考え方や生活と現代に生きる自分達を対比させて、社会勉強もしている。

佐藤さんらは、年に1回、郊外授業と称して、万葉集にゆかりのある土地を訪ね歩いており、今年の6月には、国分寺市にある「万葉植物園」とアサヒタウンズ5月26日付けで紹介した「野川の湧水」も訪ねてみようと出かけた。

その時は下見もせずに出掛けたので、十分思いを果せなかったらしい。佐藤さんから「再び国分寺周辺を散策したいが、いいコースがあったら教えて欲しい」と10月中旬に連絡があった。

山田優子記者が取材した時に手に入れた「井戸端会議小金井」発行の地図や資料をコピーして差し上げたところ、大変参考になったようで、佐藤さんからの報告では「前日に頂戴した資料をもとに、野川公園まで下検分できたおかげで、万葉植物園、殿ケ谷戸公園、貫井神社、滄浪泉園、三光院と廻りました」

〃〃〃 心豊かに広がる輪

さらに佐藤さんは、11月9日にご主人と国分寺崖線に沿って走る「はけの道」を歩いたそうですが、「井戸端会議小金井」の代表者である高橋克彦さんとも、今回の散策を通じて文通するようになったとか。

このように、人と人がアサヒタウンズを通して出会い、その輪が広がって行くことは、編集に携っている私達の最も喜びとするところです。しかも佐藤さんからは、次のような過分のおほめを頂きました。「思えばアサヒタウンズの力は大きく、私共の日常の生活にかかわっていると、改めて思った次第です。心豊かな人達との輪が広がって行くことは、何かときびしい思いをする昨今の世の中だから、なおのこと嬉しく貴重なことに思われます」

(3) 小金井市主催行事への参加

１９８４年１０月１９日から２１日までの間，「小金井市民まつり」文化部門に参加し，パネル展示，イラストマップとテキストの申し込み受けつけを行ないました。

１９８４年，１９８５年と連続して小金井市主催の「小金井市環境週間」展示に参加。パネルとともにテキストの発表と希望者へのイラストマップの配布を行ない，市の公害行政担当者との交流を深めました。

また１９８５年4月２１日に小金井市職員組合の主催した「小金井市クリーン作戦」に参加。会員有志で野川に入り，市の職員ともども空きカンや空きビンなどのごみを拾い，環境浄化のためのボランティア活動を行ないました。

(4) 野川シンポジウムの共催

１９８４年１１月１８日（日）に，武蔵野市御殿山コミュニティセンターにおいて，三多摩問題調査研究会，東京オアシスづくり研究会（世田谷）と本会の三者共催で「野川シンポジウム」を行ないました。野川沿線の各区・市の住民団体が始めて顔あわせを行ない，今後とも交流を深めていくことが話しあわれました。

(5) 読者よりの感想

１９８５年8月末日時点で，テキストならびにイラストマップ「私たちの野川」に対して，文書にて感想等（受領書をふくむ）をよせられた方は５２人，電話で感想をよせられた方は１５人でした。ただしこの数は本会事務局によせられたものを集約したものですから，会員の個々によせられたものはふくんでおりません。この中から，今後の本会の参考になるものを抄録いたします。

「先日は野川の地図をお送り頂きありがとうございました。みなさまの御苦心のほどがしのばれる，美しくわかりやすい地図で，やはり欅と草と川の好きな友人と，近いうちに歩いてみようと話し合ったところです。

その友といつも話すことは，この地球から自然が加速度的に失なわれてゆく恐しさで，それもこれも私たち人間が，地球の中の一生物にすぎないという太古の時代からの自然への〝うやまい〟と〝おそれ〟を忘れてしまったからではないかと，嘆いております。

この先は殖え過ぎた生物の常として，動物や植物を巻きぞえに亡びるしかないのではないかと暗澹とした想いに黙ってしまいますが，ひるがえって今私がそれを防ぐために何ひとつ努力していないという恥しさから，友人以外とは口に出すこともあまりありません。

そういう私ですので，みなさまのような会の方々が様々な形で自然保護の運動をしていらっしゃることを，とても尊いものに感じております。

ご苦労もたくさんおありでしょうが，どうぞがんばって下さい。

私など子供の頃から転々としてきましたので，「私の川」「私の山」といったふるさとを持たない者ですが，そのかわりに樹や草のある緑の深い所は，どこでもふるさとのような感じがいたします。先日，たまたまバスで通りかかった調布から小金井までの道がなつかしいような思いで地図をながめておりましたところに，「野川イラストマップ」の記事が目につき，不思議な，ありがたい偶然だったと思ったのでした。

是非この地図をたよりに何度かおたずねしたいと思っております。

本当にありがとうございました。」　（秋元　京子）

「野川のほとりもすっかり初夏の装いになり，ひるがお・つゆくさがしっとりした中にも人目をひきつけます。早速お送りいただきましたご本興味深く拝見しております。鳥のことには全く知識がなく，毎日耳にするカッコーの声位がきき分けられる唯一のものですが，花の所は特に興味があり，新しい名前との出会いに花の時期に是非可憐な姿と出会いたいと楽しみにしております。

感想といえるまで進んでおりませんが，一般市民の方々が郷土を愛し，心をひとつにしてこんなすばらしい本ができあがったことに，心から拍手を送ります。私も仕事の関係上，お便りのようなものを出しておりますが，自分の心を人に伝える難しさをいつも感じております。増して意見を求めながら……と言うのは大変だったことと敬服致します。」　（上田　紀子）

「私が調布に移り住んで二十年になります。私の家から野川まで徒歩で約６分くらいで，よく犬を散歩につれて野川辺りに行きました。当時はまだ川辺りのフェンスもなく，ゴミや汚水がひどくドブ川的なイメージが強く愛着も余りありませんでしたが，ただ今のように川辺りの風景には大自然とまでゆかないまでも豊かな武蔵野の自然があり詩がありました。

二十年の月日が流れた現在の野川と，野川周辺の自然は大きく変化しています。野川は以前より水もきれいになり，河川改修工事も進み，氾濫もなくなりましたが，コンクリート護岸のイメージが自然の緑の中の川からドブ川的な作られた川のように感じられます。

しかし，野川公園や武蔵野公園あたりまで足をのばすと，川辺周辺のイメージがまだ昔のおもかげが残り，東京にもまだ自然が生き残っていたのだなあと感じました。

我々はいつまでも川には魚が住めるような環境，川辺やその周辺には草花や緑豊かな木々を大切に守るため努力してゆきたいと思います。」　（小谷　満信）

「私は小金井市の住民となりましてより二年有余，全く何も知りませんでした。この頃では何気なく通っておりました丸山橋より，立ち止まってしばらく野川を眺めるようになりました。

野川の戦前より戦後への歩みは小金井市全体の推移に通じると思いました。湧水を源とする清らかな流れ，かんがい用水としても使われた野川からは，宅地化しない自然の青田の広がる田園風景を想像できま

す。一つの野川の歩みは都市開発の負う宿命的なもので，全国共通のものといえるのではないでしょうか。

私の郷里も同じ歩みを致しました。開発の名のもと自然はあっけなくこわされ，河川も同じ運命をたどりました。時代の流れはくい止められなかったのだと思います。でも，ここまで落ちこんで，これではいけないと目覚めて郷里でも官民力を合せて立ち上がっています。野川もこれからが市民の抱える大きな課題だと思います。（中略）わが町を愛する市民と，行政側の一体の努力によりまして，市内を流れる野川が自然の恵みとして私どものくらしにうるおいをあたえてくれる場によみがえり，憩いの場となる日がくれば最高に幸せな事と思います。」　（鷲見　美代子）

「私が野川に始めて接したのは終戦直後から世田谷の岡本にあった農園で野菜作りをするようになり，休日毎に玉川の砧の方からこの川を渡って台地の上の畠に通うようになった時からでした。

昭和二十三年から小金井の前原に住むようになって，毎日渡る前橋の下を流れる川が同じ野川であることを知ったのは大部月日がたってからだったと思います。当時の野川はまだハヤや小鮒が釣れたりして，いつか大雨で増水した後の前橋の下で四十センチもある鯉が獲れたのを見たりしました。

今の野川は周辺の開発と共に大きく変わって水はすっかり汚れてしまったが，広くて立派な護岸工事ができ上がり昨年は広い調整池も完成して大雨が降っても出水の被害は殆んど防がれる事でしょう。

この三月末には小金井新橋と二枚橋の中間に新しいデザインの箭真舳（やまべ）橋ができ上がりましたが，これは以前に丸木橋があったあたりで，十年余り前までは北側の「たんぼ」からの径がこの橋を渡って，武蔵野公園側に通じていました。この風景を公園側から油絵にしたのが十五年ぐらい前のことで，それ以来この辺の地帯で油絵やスケッチを四季折々に何十枚も描いています。絵を描くほかにも時々は朝の散歩に多磨霊園から武蔵野・野川の公園をふくめた野川沿いの地帯にでかけるのは，私の生活に欠かせない大切なことです。

同じようにこの地域の住民にとって子供から若者・老人まで，いこいの場所・自然と親しむ場所として，この上ない環境であるこの野川地帯をよりよく保つため，汚さないよう，きれいにしようと心がけたいものです。」　（大川　相房）

(6)　その他

この他にも国立国会図書館，日本野鳥の会，同東京支部，東京都立川社会教育会館，狛江市図書館，小金井市図書館など公共施設へテキスト，マップを寄贈しました。小金井市図書館では第一回寄贈分が，利用者に無断で持ち去られてしまったため，後日追加寄贈を行うほど「反響」がありました。

また，本会事務局に対して環境庁１９８４年度「緑の国勢調査」のうち「冬鳥調査」の依頼があり，１９８４年１２月から１９８５年１月にかけて数次にわたり有志の調査を行ない報告することができました。

これとは別に，小金井市内の和菓子屋さんで「くじら山」，「野川」とあいついで和菓子がつくられ，

お店よりの申し入れで，本会イラストマップ原図を利用してお店の宣伝材料もつくられるなど，町のなかで本会の活動はゆるやかに広がっています。（別紙6参照）

また，東京都の広報誌「ゆりかもめ」（第１３号）において「街の素顔見えるかな・ＴＯＫＹＯのタウン誌ミニコミ誌」でもとりあげていただきました。（別紙7参照）

おわりに

私たちがゆっくりと始めた町づくりについての学習活動も「野川」をフィールドとすることに決めてから4年余を経過しました。これまでに記述したことの他にも，新しく小金井に転入された方に小金井のガイドとしてイラストマップを手わたすことでコミュニケーションづくりがはかられたり，野川南岸にある小金井市立南小学校では児童生徒に野川を描かせることを通して野川の浄化に関心を持たせる指導を始める教師があらわれたりしていること等も忘れるわけにはいきません。

私たち会員のほとんどは，人生の各々の時期にこの小金井を第二，第三の「ふるさと」と決め住み移ってきた者達です。各人の中には原風景としての水と緑と生活があります。しかし，私たちの子どもたちにとってはこの小金井だけが唯一の「ふるさと」なのです。私たちは一人の"おとな"として自分の原風景の中のエッセンスを各々自分の子どもたちに手わたすことを考えるべきです。

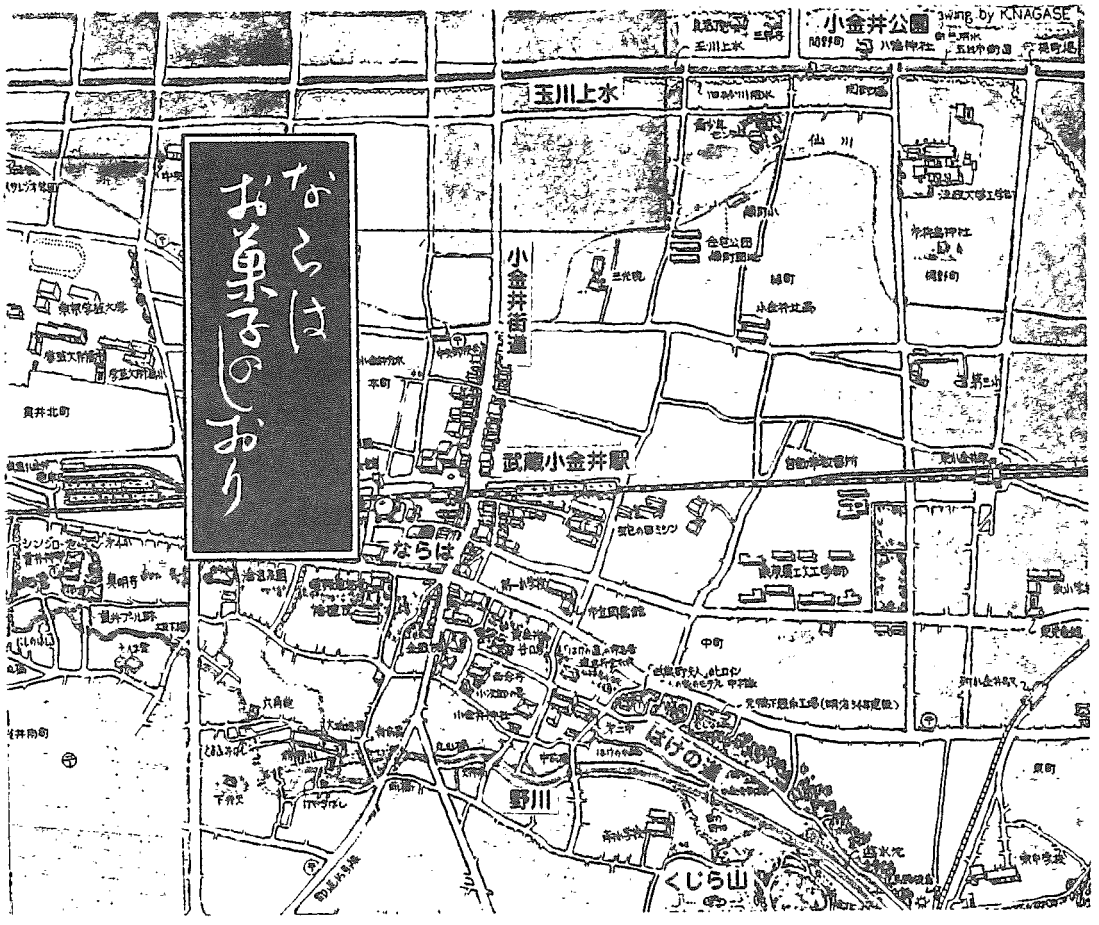
環境保全と一口にいっても，これほど都市化した町をかつての武蔵野の雑木林にもどすことは不可能です。植物の世界一つとってみても在来のオミナエシを外来のオオブタクサが駆逐しているのです。こうした環境そのものの変遷を正しくうけとめた上で，何を残すべきかをもう一度住民自身が考えてみることが大切になってきています。

数日間ホタルを放すことで安易なノスタルジアにひたるべきか，数年がかりでホタルの自生しうる環境づくりをすべきかということはその一例です。小金井市では，私たちの他にも自然観察会のユニークな集いがあり，南縁の多磨霊園では毎月一回日本野鳥の会東京支部主催の探鳥会があります。また玉川上水とその分水を生かす会や史談会などの活動があります。私たちは，これからも一住民の立場から，多くの他の人々とも交流を深め，一つでも確実な町づくりをめざしていきたいと考えています。

幸いにも今年（１９８５年）はここ数年になく湧水が豊富です。野川で遊ぶ子どもたちの数も目立ってふえてきました。さらに豊かな町づくりを求めて，野川を大切にしていくことが私たちのこれからの大きな課題といえます。（尚，本文中でアンケートの内容集約については省略しましたが，全文はテキスト『私たちの野川』に掲載してあります。）

（了）

（別紙６）　和菓子店の宣伝例



（別紙７）　東京都生活文化局「ゆりかもめ」（第１３号）より

街の素顔見えるかな　TOKYOのタウン誌ミニコミ誌

タウンマップ

地図は、時代によってかきこまれている内容、表現が違ってきます。日本の公的地図である国土地理院の地図は、正確さが信条ですから、場所の相対的距離関係は、正しく、誰もこまれるものも均質に入っています。かえって均質でないがわかりやすいのが、観光用地図です。細部を省略し、図式的に道をかき、主な施設だけを入れただけの簡単なアムステルダムの地図がありますが、それだけで容易に目的地につくことができます。

外国に行かれた方は、よくご承知のことと思いますが、国はともあれ何より必要なのが地図で、それなしでは、歩き回れず、その仕組みが身に染みてわかります。

ニューヨーク・ローマ――大鳥瞰

ニューヨークやローマでは、地図を見慣れない人、子供にも解るよう建物の形を鳥瞰的絵図にしたものが街角で売っています。それは素晴らしいもので、パネル化すると、インテリアを飾る絵にもなります。ローマほど細かくありませんが、遠くに鳥瞰的手法を配し日本的遠近画法による「湘南鎌倉鳥瞰図」（タウン誌「鎌倉のかまくら」付録）は、自然と名所・旧跡、街路の関係が一目瞭然であり、山の風情さまで漂い、人を魅きつけます。観光都市ならではの美しい地図です。

最近、銀座でもニューヨークに負けない鳥瞰絵図ができ、銀座を楽しむ"外国の銀座"になっています。

楽しく遊びながら時空的空間的構造が頭に入ってしまうものに「大東京名所めぐり」（時事新報社・昭和七年十月号の付録を中央区観光協会がPR用に復刻したもの）があります。これは、地図でなく、江戸時代以前より続く双六です。「行楽の素晴らしいアイデアの地図ではないでしょうか。

たのしい街のゾーン

いずれのタウン誌も、必ずといってよいほど、載せているのがスポンサーの店や事務所の入ったマップです。それも街毎に個性があり楽しいものです。angleの「銀座・渋谷情報マップ」は、セピア色のゾーンにこだわりをもたせという形に個性化して埋めつくしています。同じ渋谷でも、「渋谷おたのしみガイド」（パルコ発行）は、街のシンボルとなっている公園を強調し、木作道路のよく目立つ説明を加え、渋谷の雰囲気が立ちのぼってくるようです。また、周りを効果的に生かしているのが「池袋ショッピングパーク」「新宿東口西口タウンガイド」で、実線町一二別に区分けしたもの。

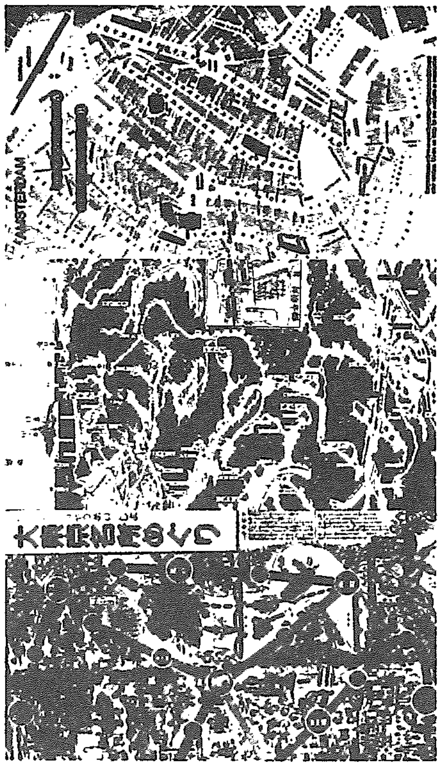
街のイメージや風俗をイラストやマンガにして、街の雰囲気を醸し出しているものに「絵地図」（こんにちは下谷）があります。

領域の再考と復権

わが町の地図、場所を見つめ、その意味を新たに問い直そうとしている意欲のある試みが、世田谷の「三世代遊び場マップ」（世田谷まちづくりセンター）、「私たちの野川―地図帳」（野川を清流にする会編）に見られます。前者は、昭和初期、30年代、現代と、それぞれの時代を生きた子供たちの、自由な遊びである遊び場、遊び方が再現できるように時代毎に一枚の地図にしたものです。それを見ると、現代の遊びと遊び場のありかたが問われてくるようです。

後者は公式前の標語「わが町わが流れ」を終えた市民が「あなた

（38Pにつづく）



P23からつづく

の町はぐ」と問われて、答えられればという呼びかけから出発し、その最初の対象が流れた野川でした。

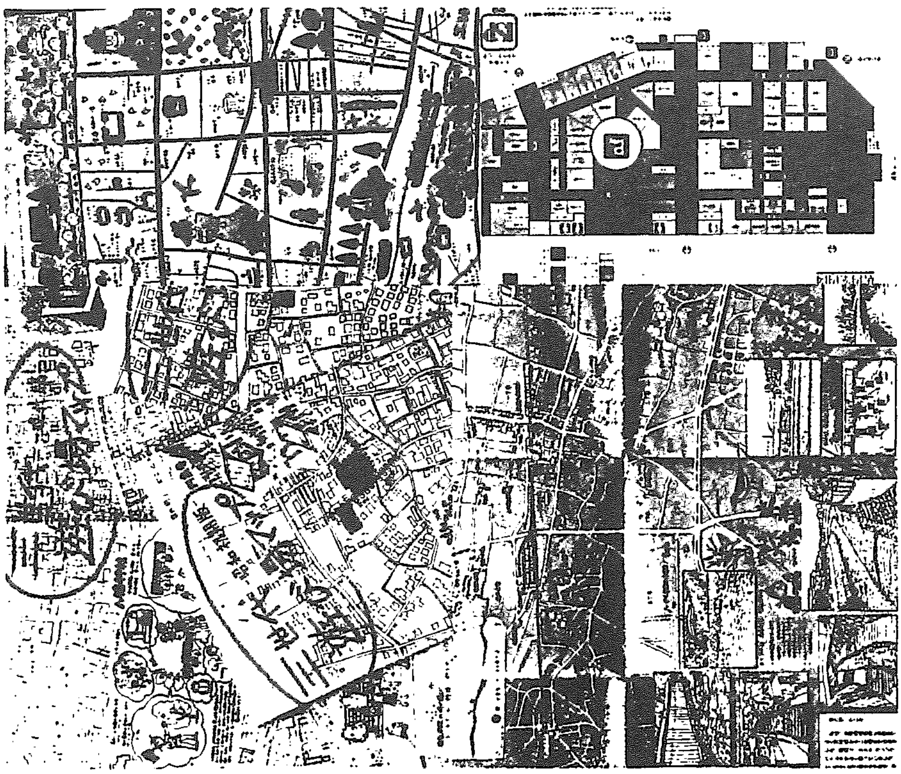
源流に戻ることを願い、野川のプロフィール、昔の野川、浄化の方法、周辺の緑化のための提案、野草・野鳥の現状、親しめる水辺になどアイデアの詰まった流域散策マップを創り出しています。

●

このように様々な地図が街の中に生まれています。地図を読むことは、街を読むことに繋がり、街把握の大切なメディアになっています。地図を読みながら想いを広げ、体験し、感じたことを記入、自分の地図を創り出していく日誌としての地図、様々なイベントのための地図、おいしい店の食べ歩き地図、香りを求めた花の地図などもできそうです。

今日から地図で街の世界を探ってみたらいかがでしょうか。

永瀬克己（法政大学講師）



※資料提供　街角カンパニー

ため、前原町の友だちとわかれなければならなかった子どもたち。湧水の奥に何があるのか、水に顔をつけんばかりにしながら、何かを探そうとしていた中町の子どもたち。

府中の子どもも、調布の子どもも、国分寺の子どもも、世田谷の子どもたちも、私たちに多くのことを教え気づかせてくれました。

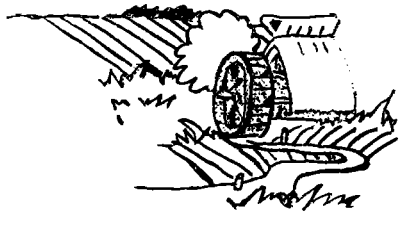
橋の上から空かんや石を投げっこして遊んでいる子どもたちは、フェンスの破れめからそっと野川の岸辺におり、「トンボ」をおいかけている同じ子どもなのです。くじら山で大声をあげている子どもたちは、野川公園の池に釣り糸を垂れて、息をひそめている同じ子どもなのです。

私たちは、子どもたちも含め、みんなで野川について考えるために、一つの素材としてこの小冊子を作りました。

原稿はすべて、会員が分担してまとめました。「野川読本」となれば幸いです。

一九八三年秋

井戸端議会・小金井　会員一同



「身近に川のあることを忘れ、住んでいる町もよくみないでいたのです。自分にとって何を大事にすべきか、今考え直すときだと思っています。」

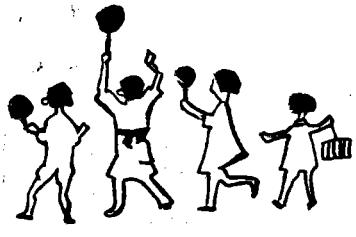
学ぶということのなかにある、情緒的な側面、つまり、ものごとをすなおに見つめ、驚き、学ぶという体験による学習を、私たちはたゆまずに続けてまいりました。専門家のみなさんは、はがゆい思いをされたことでしょうが、そのつど私たちビギナーに対して適切な助言をして下さいました。

そして、何よりも、一四三名の市民のみなさんからは、本当に貴重なお話をきかせていただきました。

ここにみなさんに感謝を申し上げます。

私たちは議論に疲れると、さそい合わせて、野川を歩きました。野外には、野外なりの学習の方法があることを学びました。何よりも子どもたちの表情から、私たち大人は多くのことを考えさせられました。

雪の降ったばかりの野川がうれしくて、ざぶざぶと中に入って魚を探していた東町の子どもたち。貫井神社の池の亀を、橋の上にしゃがみこんで、あかずにながめていた貫井南町の子どもたち。野川の拡幅工事の



おわりに

この小冊子は、私たち「井戸端議会・小金井」の会員が、昨年七月に「野川」について実施した、小金井市民への聞きとり調査をとりまとめたものです。

私たちの考えはこうです。

「今、野川について親と子でどんな会話ができるでしょうか。」

「今、子どもたちは、野川でどんな遊びをしているでしょうか。どんな遊びが出来る野川にできるでしょうか。」

「あなたは野川の水にふれたことがありますか。」

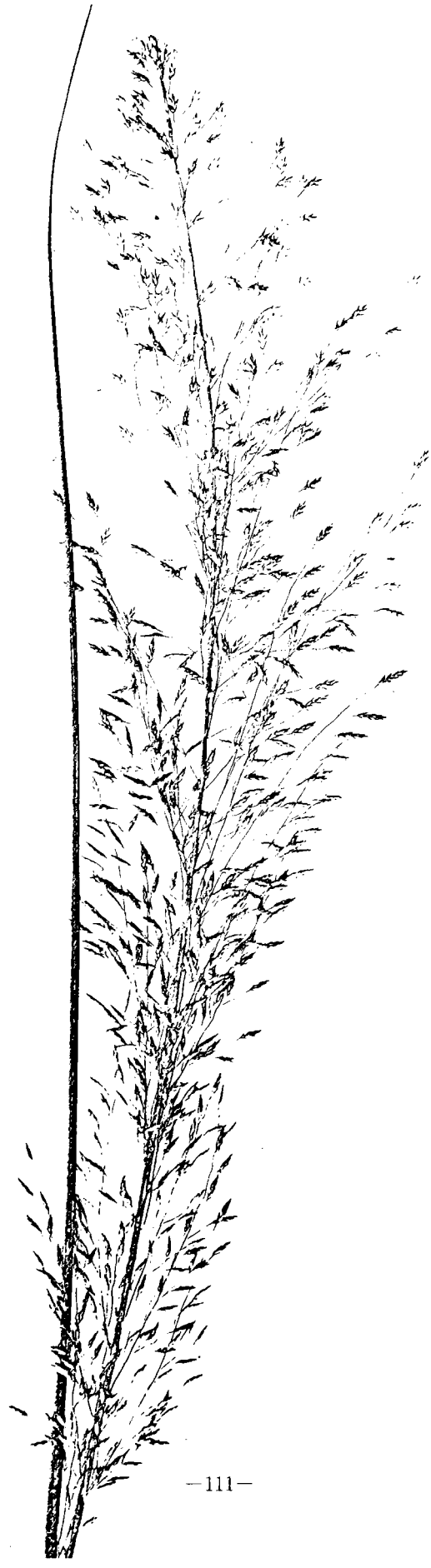
こんなことをみんなで考えてみたかったのです。

「ひとつくらい野川のよいところをみつけてみよう。」

「せめてこれより汚なくはしないで、野川を子どもたちの世代に残したいね。」

チカラシバ

おわりに



資料 4

野川周辺の野鳥について

野川周辺の野鳥については，1968年からずうっと小金井自然観察会のリーダーをなさっていて，日本野鳥の会の会員の清水徹男氏に御指導と御協力をいただくことができました。ここに慎んで御礼申し上げます。表記は記入してあったままです。

① アンケートに出たもの

1.	モズ	1人	★
2.	ウグイス	2人	
3.	ホオジロ	1人	★
4.	ジョウビタキ	1人	
5.	シジュウガラ	1人	★
6.	ツバメ	3人	★
7.	サンコウチョウ	1人	
8.	カッコウ	3人	★
9.	スズメ	4人	★
10.	ハト	2人	
11.	カラス	1人	
12.	オナガ	2人	★
13.	ツグミ	1人	
14.	ムクドリ	3人	★
15.	ハクセキレイ	1人	
16.	セグロセキレイ	4人	
17.	キセキレイ	2人	
18.	コサギ	5人	
19.	セキレイ	4人	
20.	ヤチョウ	17人	
21.	ニゲタインコ	1人	
22.	アヒル	3人	
23.	マガモ	1人	
24.	カモ	8人	
25.	シロイミズトリ	1人	

② 自然観察会で見たもの

1982年2月　1983年2月

26.	カルガモ	
27.	コガモ	
28.	コジュケイ	★
29.	キジバト	★
30.	コゲラ	
31.	ビンズイ	
32.	タヒバリ	
33.	ヒヨドリ	★
34.	カワラヒワ	★
35.	イカル	★
36.	シメ	
37.	カケス	
38.	ハシボソガラス	
39.	ハシブトガラス	★
40.	カワセミ	
41.	カシラダカ	
42.	オオヨシキリ	

★ 小金井で繁殖している鳥種

③ 前記＋清水氏の確認されたもの

43. ゴイサギ
44. ササゴイ
45. トビ
46. ハヤブサ
47. チョウゲンボウ
48. クサシギ
49. イソシギ
50. アオバズク ★
51. アマツバメ
52. ヒバリ ★
53. コシアカツバメ
54. イワツバメ
55. サンショウクイ
56. ミソサザイ
57. アカハラ
58. シロハラ
59. センダイムシクイ
60. エゾムシクイ
61. セッカ ★
62. エゾビタキ
63. コサメビタキ
64. ヤマガラ
65. メジロ
66. アオジ
67. タカブシギ
68. ツルシギ
69. キアシシギ
70. コチドリ
71. ユリカモメ
72. アオゲラ
73. ショウドウツバメ

野生化した外国産鳥種

74. ブンチョウ
75. セキセイインコ
76. ボタンインコ
77. ワカケホンセイインコ

資料 5

アンケートに出た他の生物

昆虫

1.	テントウムシ	1人
2.	ホタル	5人
3.	バッタ	4人
4.	カマキリ	3人
5.	イナゴ	1人
6.	セミ	2人
7.	アカトンボ	1人
8.	トンボ	4人
9.	モンキチョウ	1人
10.	モンシロチョウ	1人
11.	ムラサキシジミチョウ	1人
12.	アゲハチョウ	1人
13.	チョウ	5人
14.	ムシ	2人

爬虫類

1.	トカゲ	1人
2.	アオダイショウ	1人
3.	ヤマカガシ	1人
4.	ヘビ	7人

両棲類

1.	オタマジャクシ	2人
2.	カエル	6人
3.	ショクヨウガエル	1人

水棲動物

1. ヒル
2. アメリカザリガニ
3. サワガニ

魚類

1.	フナ	4人
2.	コイ	4人
3.	ヤツメウナギ	1人
4.	ハヤ	3人
5.	アユ	1人
6.	ナマズ	3人
7.	タナゴ	3人
8.	ウグイ	1人
9.	ドジョウ	5人
10.	ウナギ	4人
11.	サカナ	2人

貝類

1.	シジミ	1人
2.	タニシ	2人

獣類

1.	イヌ	6人
2.	ネコ	1人
3.	イタチ	2人
4.	リス	1人
5.	モグラ	1人
6.	ノウサギ	1人
7.	ウサギ	2人
8.	捨テネコ	1人

番外

1.	ヒト	1人

資料 3

野川周辺の植物

野川周辺の植物につきましては，小金井自然観察会で植物の指導をして下さっている，大熊五郎氏と，自然観察会の常連でいらっしゃる大石征男氏に御多忙中にも拘らず，御指導と御協力を得ることができました。ここに慎んで御礼申し上げます。表記は記入してあったままです。

① アンケートに出たもの

1～52 草本　53～63 樹木

1.	セイヨウタンポポ	18人
2.	ヨモギ	14人
3.	ハルジョオン	1人
4.	ヒメジョオン	6人
5.	カラスウリ	1人
6.	オオバコ	1人
7.	オオイヌノフグリ	2人
8.	ムラサキサギゴケ	1人
9.	ワルナスビ	1人
10.	ヒルガオ	2人
11.	セリ	4人
12.	スミレ	2人
13.	ノブドウ	1人
14.	クズ	1人
15.	レンゲソウ	7人
16.	シロツメクサ	10人
17.	カラスノエンドウ	2人
18.	ナズナ	4人
19.	シロザ（アカザ）	1人
20.	イヌタデ	1人
21.	ギシギシ	2人
22.	ネジバナ	1人
23.	ノビル	3人
24.	エノコログサ	2人
25.	ジュズダマ	1人
26.	ススキ	10人
27.	ヒマワリ	2人
28.	ムサシノキスゲ	1人
29.	ノカンゾウ	1人
30.	ヤブカンゾウ	1人
31.	カンゾウ	4人
32.	アサツキ	1人
33.	アシ	1人
34.	ヨシガヤ	1人
35.	カヤ	2人
36.	ツキミソウ(アレチマツヨイグサ？)	2人
37.	スイカヅラ	2人
38.	オミナエシ	1人
39.	ジネンジョ	1人
40.	チョウセンアサガオ	1人
41.	ダイコン(ムラサキハナダイコンでは)	6人
42.	ムラサキイロの花(上に同じでは)	1人
43.	ツクシ	8人
44.	ノイチゴ(ナワシロイチゴ？ ヘビイチゴ)	1人
45.	ヤマゴボウ(ヨウシュヤマゴボウ？)	1人
46.	ミズクサ	1人
47.	コオホネ	1人
48.	キハナショウブ	1人
49.	カモジグサ	1人
50.	キクイモ	1人
51.	ザッソウ	12人
52.	しょうがの根のような大きな草	1人
53.	ヌルデ	
54.	クリ	
55.	クヌギ	
56.	サクラ	
57.	エゴノキ	
58.	クロモジ	
59.	イチョウ	
60.	ハギ	
61.	クワ	
62.	ノボケ	
63.	タラノキ	

② 1983年5月8日調査のもの

64～156 草本　157～174 樹木

64. オオジシバリ
65. オニタビラコ
66. コオニタビラコ
67. ハルノノゲシ
68. アキノノゲシ
69. オニノゲシ
70. キツネアザミ
71. コウゾリナ
72. アメリカセンダングサ
73. フキ
74. ハハコグサ
75. タカサブロウ
76. オオアレチノギク
77. ヒメムカシヨモギ
78. ヨメナ
79. ユウガギク
80. セイタカアワダチソウ
81. ブタクサ
82. オオブタクサ
83. イヌキクイモ
84. ハキダメギク
85. ミゾカクシ
86. スズメウリ
87. アレチウリ
88. ヘクソカヅラ
89. ヤエムグラ
90. タチイヌノフグリ
91. カキドオシ
92. ホトケノザ
93. ヒメオドリコソウ
94. コヒルガオ
95. ガガイモ
96. アレチマツヨイグサ
97. ツボスミレ
98. タチツボスミレ
99. ノジスミレ
100. ヤブカラシ
101. エビヅル
102. アカカタバミ
103. ゲンノショウコ
104. アメリカフウロ
105. メドハギ
106. アカツメクサ
107. スズメノエンドウ
108. オヘビイチゴ
109. ヘビイチゴ
110. キジムシロ
111. ミツバツチグリ
112. イヌガラシ
113. ムラサキケマン
114. タケニグサ
115. ケキツネノボタン
116. ウシハコベ
117. スベリヒユ
118. ヨウシュヤマゴボウ
119. サナエタデ
120. ママコノシリヌグイ
121. イシミカワ
122. オオケタデ
123. スイバ
124. イタドリ
125. ヤブマオ
126. クワクサ
127. カナムグラ
128. ニワゼキショウ
129. ツユクサ
130. カラスビシャク
131. カヤツリグサ
132. メヒシバ
133. オヒシバ
134. スズメノカタビラ
135. スズメノテッポウ
136. チカラシバ
137. クサソテツ
138. コモチマンネングサ
139. タチアオイ
140. ヘラオオバコ
141. イヌムギ
142. ネズミムギ
143. オギ
144. カモガヤ
145. チガヤ
146. ナガハグサ
147. ツメクサ
148. ハナイバナ
149. ニョイスミレ
150. オカトラノオ
151. カゼクサ
152. アリタソウ
153. オシロイバナ
154. イノコヅチ
155. アイリス
156. コンフリー
157. アカメガシワ
158. ケヤキ
159. クコ
160. ニセアカシヤ
161. ノイバラ
162. ナワシロイチゴ
163. フジ
164. ニシキウツギ
165. エノキ
166. ツルウメモドキ
167. ツタ
168. ヌルデ
169. ヒトツバタゴ
170. ミズキ
171. センダン
172. ウワミズザクラ
173. イヌザクラ
174. ネムノキ

175～206 大熊五郎氏が5月8日調査＋以後独自に調べられたもの

175. ヤクシソウ
176. ヤブタバコ
177. ホウキギク
178. オナモミ
179. メナモミ
180. テリミノイヌホオズキ
181. イヌゴマ
182. コナスビ
183. チドメグサ
184. ヤブジラミ
185. マツヨイグサ
186. オオマツヨイグサ
187. ヒメスミレ
188. コスミレ
189. カタバミ
190. ウスアカカタバミ
191. ツルマメ
192. ヤハズソウ
193. カスマグサ
194. キンミズヒキ
195. マメグンバイナズナ
196. ミミナグサ
197. ヒナタイノコズチ
198. ホソアオゲイトウ
199. コアカザ
200. ケアリタソウ
201. ハナタデ
202. オオイヌタデ
203. ハルタデ
204. ミゾソバ
205. ヤマユリ
206. イヌビエ

ノコンギク

居住開始時期と前住地（年代別・流域別）

（構成比：%）

年代別	合計							合計					
調査区別	～19	20	30	40	50～	NA不明等	計	上	中	下	外	計	構成比
転居せず	12	2	1	6			21	4	5	9	3	21	14.7
市内		1	6	8	11		26	6	7	9	4	26	18.2
23区内	2	1	7	19	6		35	11	6	9	9	35	24.5
三多摩	2	3	5	3	8		21	3	1	3	14	21	14.7
他県		3	2	7	6		18	4	3	3	8	18	12.6
NA,不明その他	3	2	4	7	3		22	5	1	1	15	22	15.3
計	19	12	25	50	34	3	143	33	23	34	53	143	100.0
構成比	13.3	8.4	17.5	35.0	23.8	2.0	100.0	23.1	16.1	23.8	37.0	100.0	

カナムグラ

これは流域外の回答収集方法に問題があったものと考えられます。ちなみにN・A等二二人のうち、流域外の回答者は一五人と高い割合を占めています。

居住開始年代別前住地の状況

居住開始年代別に前住地をみてみますと、昭和十九年以前からの居住者では、もともと小金井に住んでいた者が一九人中一二人（六三・一％）と多数を占めています。昭和二十年代よりの居住者では、三多摩と他県を前住地とする者が一二人中それぞれ三人（一二・五％）ずつを占めています。昭和三十年代よりの居住者になりますと、高度経済成長の影響を受けて、都内23区内からの転入が多くなり、その状況が本調査にも表われています。昭和三十年代からの居住開始二五人中七人（二八％）、昭和四十年代からの居住開始者は五〇人中一九人（三八％）とそれぞれ最多数を占めています。昭和五十年以降の居住開始者では市内からの転居者が圧倒的に多く、三四人中一一人（三二・三％）で、二三区内と他県からはそれぞれ六人（一七・六％）ずつとなっています。

流域別前住地の状況

この結果を流域別にみてみますと、上流域では、東京都二三区内からの移住者が最も多く、上流域の回答者三三名中三分の一の一一人を占めています。中流域では市内からの移住者が二三人中七人とこれもほぼ三分の一を占め、下流域では転居せずと市内・二三区内を前住地とする回答者がそれぞれ九人ずつとなっています。流域外では、N・Aや不明等を除けば前住地を三多摩とする者が一四名（二六・四％）という結果になっています。

全体では東京都二三区内を前住地とする人が三五人（二五・四％）、生まれたときから小金井という人と、三多摩を前住地とする人がそれぞれ二一人（一四・七％）、他県よりの人が一八人（一二・六％）、N・A、不明等が二二人（一五・三％）となっています。

回答者の居住開始の時期

回答者が小金井に居住を始めた時期については、分類・整理の都合上、昭和十九年以前からの居住者、昭和五十年以降の居住者を両極端に位置付け、この間を昭和二十年代、同三十年代、同四十年代の三つに区分し、答えない者（N・A）、不明、その他の者は別項を設け、そこに集約しました。

回答者（標本）総数は一四三人ですが、昭和十九年以前から住んでいる者は全部で一九人（一三・三％）でした。以下二十年代からの居住者が一二人（八・四％）、三十年代が二五人（一七・五％）、四十年代が五〇人（三五・〇％）、五十年以降が三四人（二三・八％）で、N・A等は三人（二％）という結果になっています。

流域別居住開始の状況

流域別に居住開始時期をみてみると、昭和十九年以前からの居住者では、一九人のうち下流部分が一〇人を占め、戦前・戦中からの居住者では下流域が最も多い結果となっています。

昭和二十年代からの居住者では、流域外の回答者が一二人中八人を占めています。昭和三十年代から居住をした回答者は上流七人、中流六人、下流六人、流域外六人と、各調査区ごとにほぼ均等に分布しています。昭和四十年代に居住を始めた回答者五〇人のうち上流域が一八人で、最多数を占めています。この時期には、野川流域に家々がビッシリと建ち始めたことをうかがわせる興味ある結果を示しています。また昭和五十年以降に居住を始めた回答者三四人中、流域外が一七人と半数を占めています。

回答者の前住地の状況

現住所に居住を開始するまではどこに住んでいたのか、というのが設問の趣旨ですが、出生以来小金井に居住している者が二一人で全体の一四・七％、前住地も小金井市内であった者が二六人（一八・二％）、二三区内に居住していた者三五人（二四・五％）が最も多く、三多摩内に前住した者は二一人（一四・七％）、都外（他県）に前住した者は一八人（一二・六％）、N・A、不明、その他は二二人（一五・三％）となっています。N・A等が意外に多い結果となりましたが、

たとおりですが、二〇才代は七名（四・九％）、三〇才代は三四名（二三・八％）、四〇才代は三六名（二五・二％）、五〇才以上は四九名（三四・三％）と最も多くなっています。なお、このほか、N・A（回答なし）・不明が三名（二・〇％）ほどいました。

年令分布の状況は次のとおりです。

年代別		計	割合
年令	～ 19才	14人	9.8％
	20～29才	7	4.9
	30～39才	34	23.8
	40～49才	36	25.2
	50才 ～	49	34.3
	N.A，不明	3	2.0
合計		143	100.0

回答者の職業別分類

調査にあたっては、当然のことながら回答者の職業別分布が比較的に均等にわたるように配慮しました。

基本的には、

自営業（農林漁業、商工業、サービス業、自由業）

被傭者（事務職、労務職、技術職、管理職）

主婦

学生（児童・生徒をふくむ）

無職

の五職業に分けて分類することとしました。

この結果、最も多かったのは主婦で、四六名（三二・二％）、二番目は被傭者で三四名（二三・八％）、ついで三番目が自営業で二六名（一八・二％）、以下学生一五名（一〇・五％）、無職一三名（九・一％）となっており、N・A、不明が九名（六・二％）となっています。中流を除くと、各調査区とも主婦の回答者が最も多くなっています。

職業別分類の状況は次のとおりです。

職業		計	割合
	自営業	26人	18.2％
	被傭者	34	23.8
	主婦	46	32.2
	学生生	15	10.5
	無職	13	9.1
	NA不明	9	6.2
合計		143	100.0

回答者の住所分布状況

回答者の住所の分布は、東町、緑町、中町、前原町、本町、貫井北町、貫井南町の七町にわたっており、残る梶野町、桜町、関野町の三町には回答者はいませんでした。野川が小金井市内の南部を流れているという、地理的分布を考えれば、この三町に回答者を得られなかったこともうなずけます。

流域別に回答者の多い町をみてみますと、上流では貫井南町が二八人と最も多く、中流では前原町が一五人、下流では前原町が一九人、中町が一五人となっており、流域外では本町が一九人で最も多くなっています。

全調査区を合計すると、回答者の多い順に前原町（四〇人）、貫井南町（三九人）、中町（二一人）、本町（一九人）、東町（九人）などとなっています。

住所分布の状況は次のとおりです。

町別		合計	(%)
住所	東町	9	6.3
	緑町	5	3.5
	中町	21	14.7
	前原町	40	280
	本町	19	13.3
	貫井北町	3	2.1
	貫井南町	39	27.3
	市外	4	2.7
	N.A,不明	3	2.1
計		143	100.0

回答者の年令別分布状況

回答者の年令区分は、一九才まで、二〇才代、三〇代、四〇代、五〇才以上の五段階に分けて集約しました。この結果、上流では四〇才以上が三三名中二二名、中流では同じく四〇才以上が二三人中一五人、下流では同じく四〇才以上が三四人中二三人、流域外では四〇才以上が五三人中二五人と、それぞれの調査区において回答者の主流をなしています。一九才未満の回答者も、全体では一四人（九・八%）を占めていました。

全流域を合計してみますと、一九才以下はいま述べ

資料2　調査の方法と回答者の状況について

調査区別の総括

調査区は、小金井市内を流れる野川を、上流・中流・下流の三つに分け、さらにこのほかに、流域外を一調査区として全体を四調査区に分けて調査を行ないました。

上流　都道二四八号線から上流
中流　都道二四八号線から丸山橋まで
下流　丸山橋より下流
流域外　流域以外の小金井市内在住者（一部在勤者を含む）

調査の方法

上流・中流・下流を各四名ずつの会員が分担し、調査を行ないました。各調査区ごとに五〇程度のサンプル数を抽出することとし、抽出の方法は、調査区担当者に一任しました。ただしサンプル数のうち半数程度を、流域内の野川沿線居住者とは関係なく流域外に求めることとし、直接聞きとり調査を原則としました。

調査状況の集約

調査区別に調査状況を集約すると次のとおりです。

		流域内外別		
		内	外	計
調査区別	上流	33	5	38
	中流	23	21	44
	下流	34	27	61
	計	90	53	143

たか。

6. 野川近くの湧水をいくつぐらい知っていますか。その湧水について何か感じたことがありますか。

7. 昔の野川の様子を知っていたら教えて下さい。

8. 野川の汚れ具合、臭いなどについてどう思われますか。

9. 野川の増水で被災したことがありますか。その時期と被害の様子をお聞かせ下さい。

10. 野川の護岸についてどういう形が望ましいと思いますか。

11. 野川に関することで行政に知ってもらいたいこと、やってもらいたいことがありますか。

12. 野川をとりまく自然環境を守っていくためによいアイデアがありますか。

13. 野川がどんな川だったらいいと思いますか。どんなことでもどうぞ。

御多忙中どうもありがとうございました。

回答用紙

一九八二年七月
くらしと町づくりを考える市民の会

※ よろしければお答え下さい。

イ. 年齢 ①S～一九才 ②二〇～二九才 ③三〇～三九才 ④四〇～四九才 ⑤五〇才～

ロ. 住所 ハ. 氏名 ニ. 職業

1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13.

資料1　調査用紙・回答用紙

野川をわたしたちの身近なものにするためにお聞かせ下さい。

くらしと町づくりを考える市民の会（通称井戸端議会小金井）
一九八二年七月

はじめまして、井戸端議会小金井です。一九八〇年秋に、公民館主催で「わが町わが暮らし―町づくりを考える―」というテーマの市民講座が開かれました。私たちは小金井にある三つの大学の先生、研究者の方々と共に住みよい町づくりの学習をし、これがきっかけとなって生まれたのがこの会です。参加者は自分たちの住んでいる小金井の町を見つめなおし、自然・生活・歴史など様々な内容のものを自由に自発的に学び発表しあっています。

昨年からは、ハケ下を流れる「野川」にスポットをあて、かつては清流、今は汚水と化した野川を私たちの身近なものにするためにはどうすればよいか考えを出しあっています。つきましては、みなさま方からも野川とそれをとりまく環境についての御意見やお話を伺わせていただきたいと思います。

なお、まとめた結果は後日お知らせいたします。

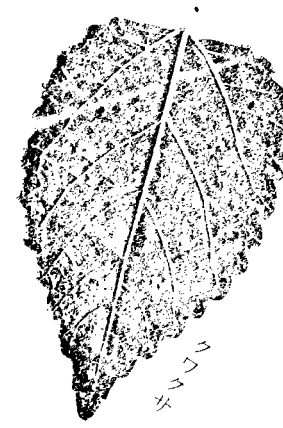
1. ここにはいつ頃から住んでいますか。それまではどちらに住んでいましたか。
2. 「野川」という言葉を聞いて、あなたは何を思いうかべますか。
3. 野川に沿って散策したことがありますか。その時、どんな動植物に出あいましたか。
4. 野川のどのあたりが好きですか、嫌いですか。
5. 野川の水源がどこか知っていますか。野川の水源に行ったことがありますか。その時どう感じまし

資料

資料1　調査用紙・回答用紙
2　調査の方法と回答者の状況
3　野川周辺の植物
4　野川周辺の野鳥について
5　アンケートに出た他の生物

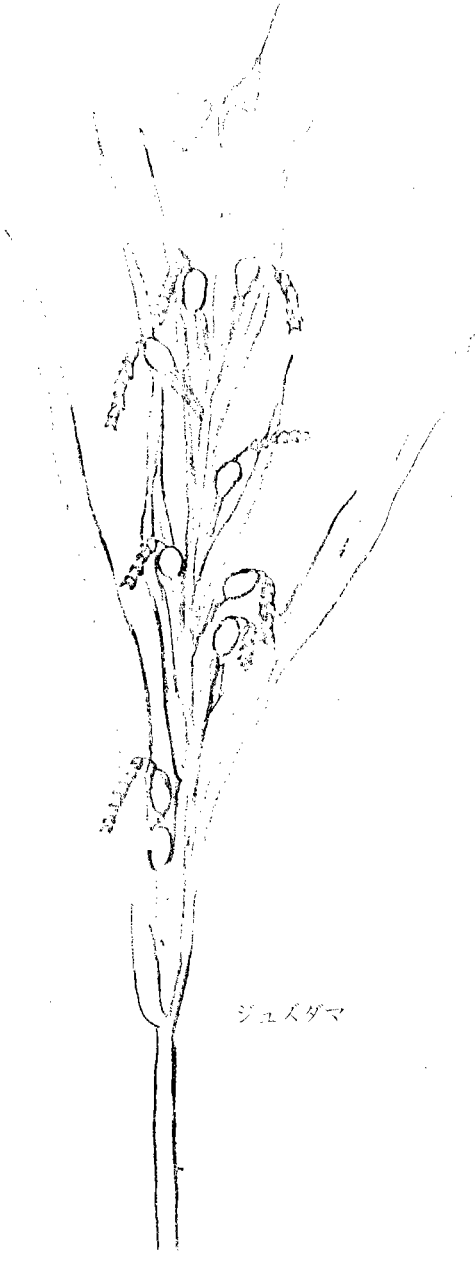
コラム　高橋源一郎編「武蔵野歴史地理」第二冊より
班目・川合「東京の地理」より
麻畑東坪「武蔵野有情」より

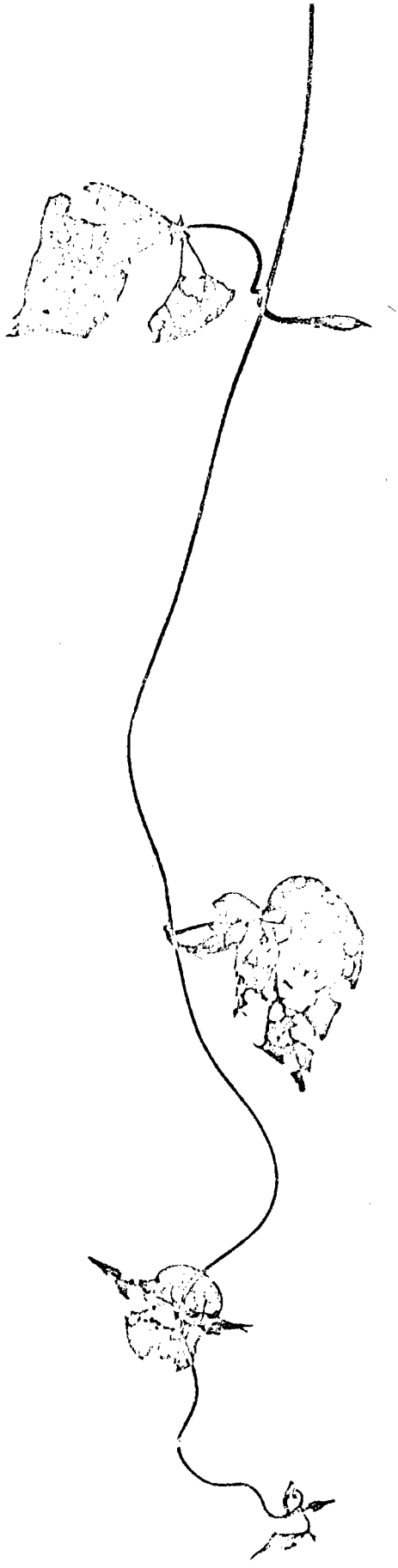
ヤマトシジミ



ルのように聞こえてくる声は、現状から発想すれば、野川公園のように、広々、晴々とした空間を残し・五、そこを流れる親しみの川、美しく、心安まる野川、生活の中に生きる川、人の心を育てる川であって欲しい、と七名が続きます。

坂の上の人も来やすいように、坂道をゆるやかに直すことも必要だ、川は上から浄化すべきだ、拡幅だけが能じゃない、改修を急げ、護岸を統一すべきだ、仙川対策と同じに急げ、という記入もありました。





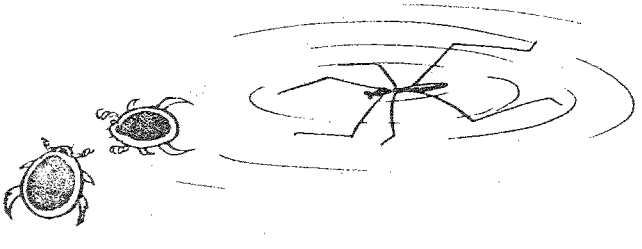
住民は、もっと野川のことを考えて生活する必要がある・七、気をつけて生活しなければならない・七、野川を愛して行かなければ・七、等々は、計二一ですが、野川とともに住む人たちへの声がけです。そして、野川をみどりの小金井の自慢にしたい・五、自然環境の維持という、トータルな見地から、大切にしたい・五、これ以上、野川周辺に家をふやさないで・四、となると、市民と行政の継続的な協力が、当然の下地でなければなりません。行政はもっと緑に金を、もっと本気で考えてという声は、もう失望／という声・一を含み五名分です。

ため息まじりの調子の中から、野川へのラヴ・コー

野川の流域すべてを含む一帯として考えなければならないことと、流域の各所に点在する公園の施設として実現できそうなことが混っています。

小金井中の人が、というより野川流域の他市の人も含めて、日常生活の心づかいから、行政の具体策まで細やかに多角的に取り組まなければ、というのは、どんな小さなねがいの実現についても求められますが、そのようなことも含めた表現で、野川をどうすべきか、どうありたいか、を述べて下さったものは、六四件ありました。表現は多様で、ちょっと抽象的であったりもしますが、どの方からも、野川のある小金井を大切に思い、息長い学習や運動をして来られたとか、昔から、野川と共に生活してこられたと推察される言いまわしで、比較的沢山の発言をして下さったものが、ここに集まりました。ニュアンスなんですが、こうして欲しい、という調子ではなく〜しましょうという感じが多いのも特長です。

とにかく今より少しでもきれいに（できる部分から誰かが何かを）しなければ、しましょう、という声が一四件ありました。都市生活の問題の多さを承知しながらも、野川を見捨てない生き方が、文章の前後から伝わってきます。



中前橋より上流をのぞむ

昔の野川のこと（13）

私が中学のころ（昭和三十年頃）は、手づかみでフナがとれました。限りなく清らかな流れで、泳いで寒くなると、となりの「田んぼ」であたたまり、また泳いだものです。

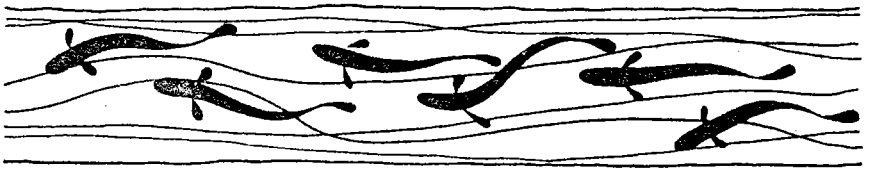
（貫井南町四丁目　田中豊弘さん）

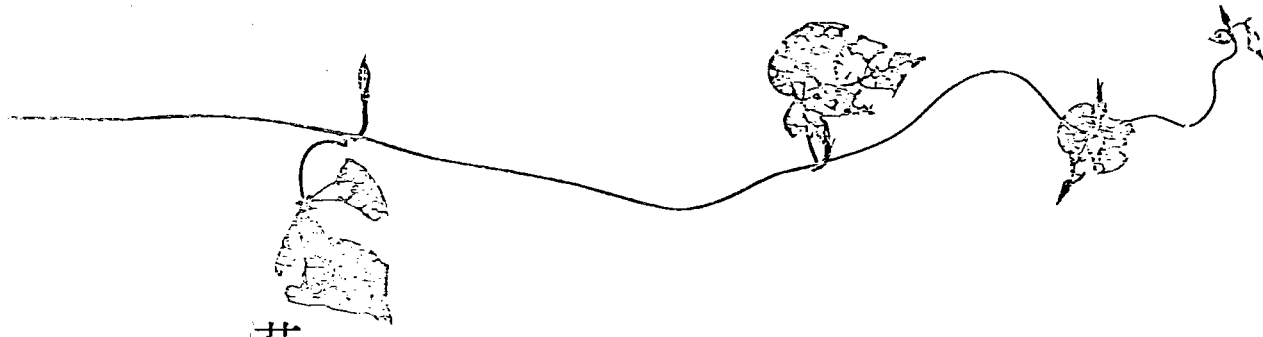
まず、散策できる野川一帯を六人があげ、遊歩道があり、お年寄りも憩えるようにと、一人ずつ、また、そんな野川沿いには、花や木のあることがのぞましいという意見が七件あり、このうち二件は桜並木と指定しています。サイクリングも良いナ、という声も二件ありました。蚊がいないように、は一件です。

名実ともに、野の中の川であって欲しい、という言い方が七件ありましたが、人工的でない情景を指しての意味でしたら、現代では、より高度な人工を要するのかもしれません。ここは、合計二七件ありました。

市民も力を出し合って

川に近い生活圏までを視界に入れた意見は二〇件です。中味は九種類で、憩い、安らぎの野川一帯であって欲しいとする意見が五件ありました。防災グリーンベルトとして位置づけるように、との意見は、情緒的な言い方を一歩超えた見地です。臭いがしないように、トリが住む野川一帯を、という方がそれぞれ三名おいでです。湧水をためて池を作るよう提案して下さった方が二名、それから、各一名ずつですが、小さな水田を作る、林がある、緑の多い野川一帯、キャンプができるような、というねがいも寄せられています。





花や木のある川沿いを

川あそびのできる野川なら良いな、という声がトップで二九件、川辺に出たい・三、土手にねころびたい人・一も、同じ位の気持でしょうか。次に多かった声は、魚つりのできる野川で一一件、続いてホタルが飛び交い、ホタル狩りのできる野川が良いというもので八件、単に虫のいる野川とした方が一人加わります。

クレソンの生えているような・二、草の茂った土手、岸辺をショウブ園にしたら、という声が各一件ありました。

このあたりの願いをかなえるとしたら、いま、どの位まで、希望を持てるのでしょうか。雨水や湧水を無駄なく野川に導くことでは、また、上流や他市の下水が流れ込まないようにすることはどこまで可能なのでしょうか。護岸のデザインに、治水の上にもう一ランク、親水のための工夫が必要のようです。それより、フェンスはどこまで除けるのでしょうか。フェンスの向こうで遊ぶ子どもたちに、大人の目も声も届く、時には相手になれる大人もいる、そういう地域の暮らしが求められます。ここは五七件でした。

もう少し広い範囲まで考えて下さった意見に移ります。川、川辺、川沿いの道あたりまでです。

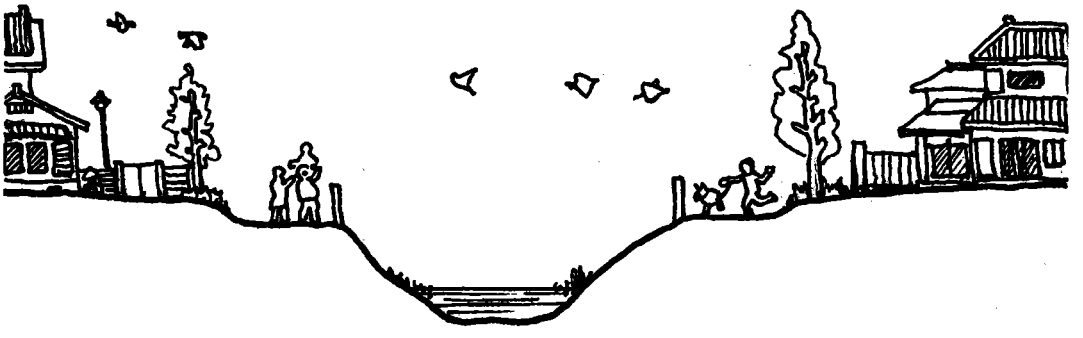
清らかな流れを

野川が、まず第一に「清らかな流れ」であって欲しいという声が一〇四件でトップです。意見数では半分より少ないのですが、回答者の八割近い人の気持です。

どのような清流をのぞんでいるか、特に条件なしで短かく答えた人は三九人、魚の泳ぐような、アユとか、ザリガニとかいう条件つきの回答が三〇件です。フナ、ドジョウもありました。アユの住める清流と、ザリガニの住める清流では、水の質にも、流れの姿にも開きはありますが……。続いて昔のような清流という声が一六件、泳げるような、とした声が九件、手や顔が洗えるような・四件、豊かな水量の・三件、足を入れられるような・二件という順です。川藻がゆれる、と書いた人が一人ありました。いま、充たされているのは、どの条件でしょうか。どれか、あてはめるとすれば、市内流域のどのあたりでしょうか。見た目では、曜日や時間帯によっても、違うようです。

川あそびがしたい

岸辺を含めた野川への思いは、答えた人が野川で何をしたいのか、という気持がより親しく伝わります。



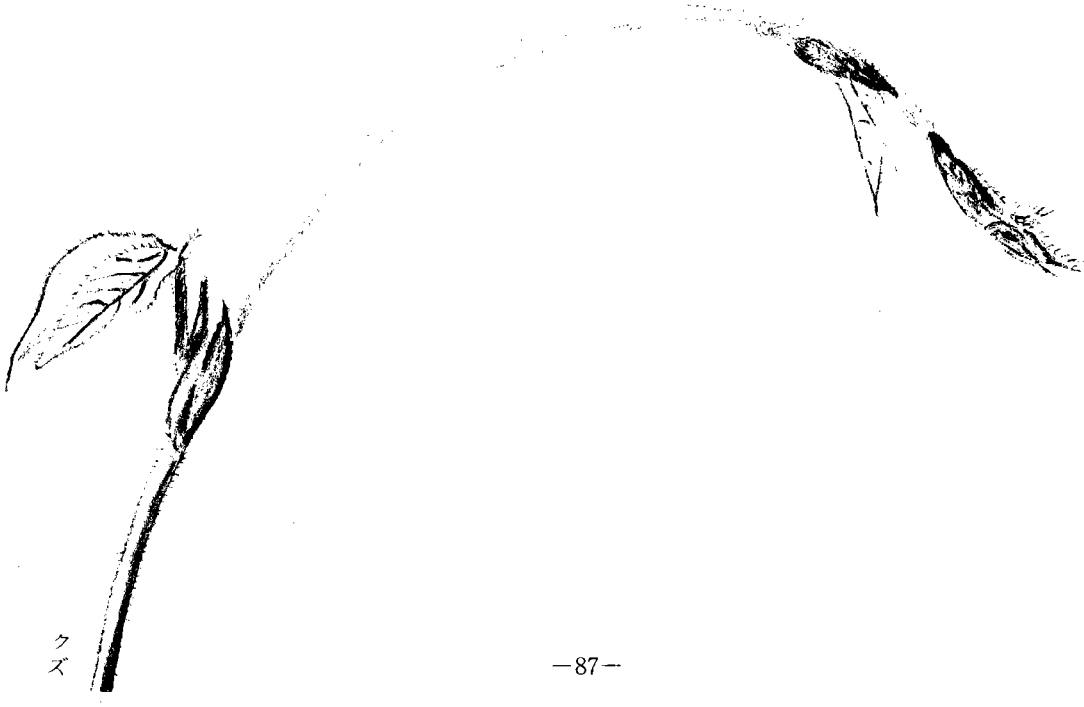
こうしたいな野川

ここには、自由に記入して（又は話して）いただいたことと、最後の設問であったことから、さまざまな思いが溢れ出ています。全回答者一四三名のうち、無回答は八名でしたので、一三五人分の集計から報告します。一人が一つの意見とは限りませんので、意見数で整理してみました。総数は二七五意見で、中味はほぼ六六種類でした。表現のほとんどは、その人が親しく思う川のイメージ、水辺への願望で、きわめて具体的な言い方から、抽象的な感じまでいろいろで、ちょっと無理もありましたが、次のように分けてみました。

- 川の水、流れそのものについて言っている
- 川の水から岸辺までを含めて言っている
- 川沿いの道あたりまで考えて言っている
- 川に近い地域一帯について言っている
- 川のあるまち、小金井という見地で言っている
- その他

野川がどんな川だったらいいと思いますか。どんなことでもどうぞ。

こうしたいな野川



クズ

コラム

麻畑 東坪

「武蔵野有情」

（昭和五二年・三彩社）より

野川

武蔵野の川は、野なかに育つ。諸所の水を束ねて流に差し、枝を分け、野を渡る。地中に瀑布のあることを教えられていても、野づらに奔流や激湍をみない。

なかでも「野川」は、もっとも武蔵野の川らしい流れの一つだ。そのもとを国分寺恋ケ窪の泉に発し、その末を女堀につなぐ。「野川」は歴とした川の名、先取権は古い野の住民にある。たとえ他に名なしの野水があろうとも、この名を襲うわけにはゆかない。野辺の川というほどの直截な命名の仕方が、かえって武蔵野の川らしいのである。

（中略）

……こうした野の清水は樹林に養われたものだ。この野の原生林が滅び、やがて草原が放馬の便となる一方、耕民に除草の労を強いた。また、原始林を持たない野は水を飼う手段をなくし、流水は行方も知れず地の闇に吸われた。もとは水に恵まれた筈の武蔵野が、「逃げ水」の伝説をのこして乏水地となった。濶葉林喪失このかたのことだと学者は説く。そののち天水が気息を休めるひまもなく表土を滑る様を考えてみれば、今日これに近い。野川や仙川の氾濫を知る沿岸の家々にとり、昔時逆転の記憶は拭えまい。

この野に見出す泉は森林時代の遺跡だといえる。そこに樹林を持つかぎり、清水は絶えない。野川も清らに、弁天池もまた。

浄化施設を生かした流域の環境作り

湧水を保全するための緑地

遊歩道や池のある公園

水源

支流

湧水

堰

遊水池

支流

湧水

水源を保護するための緑地

土砂や砂礫や生物による
ろ過装置

スプリンクラーによる
表面浸透

広い植物園や農園を作る。

ろ過した水を川にもどすところにくじらのような丘と、滝が作れる。

この装置を地下に設けて、地上をスポーツ施設のある公園にする。

礫間接触酸化法による浄化装置

河川の中で意図的につくる浄化作用

流速や流速を変えることにより、沈殿物や浮遊物を掃流し早く海に運ぶ。

清流を導入することによって、汚濁物質をうすめる。

ダム

支流

湧水

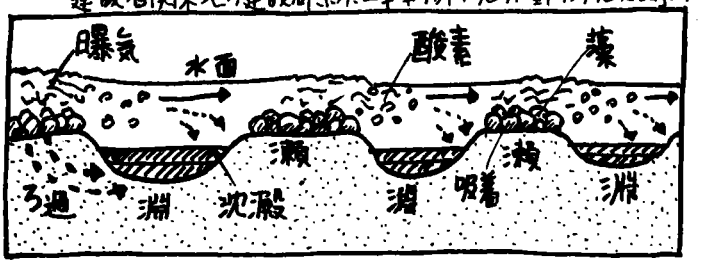
堰

上流部では、流速の低下により、汚濁物質の沈殿分離がおこる。

下流部では、水の落下により流れに曝気がおこり、酸素が供給されて分解がすすむ。

河川の自浄作用の概念図

建設省関東地方建設局京浜工事事務所発行『川浄化施設』より



河川は、自然の状態で流水を浄化する自浄作用を持っています。自浄作用は、①希釈、②沈殿 ③吸着 ④ろ過 ⑤生物の取り込み酸化分解、⑥掃流効果による体系外への搬出の原理に大別されます。

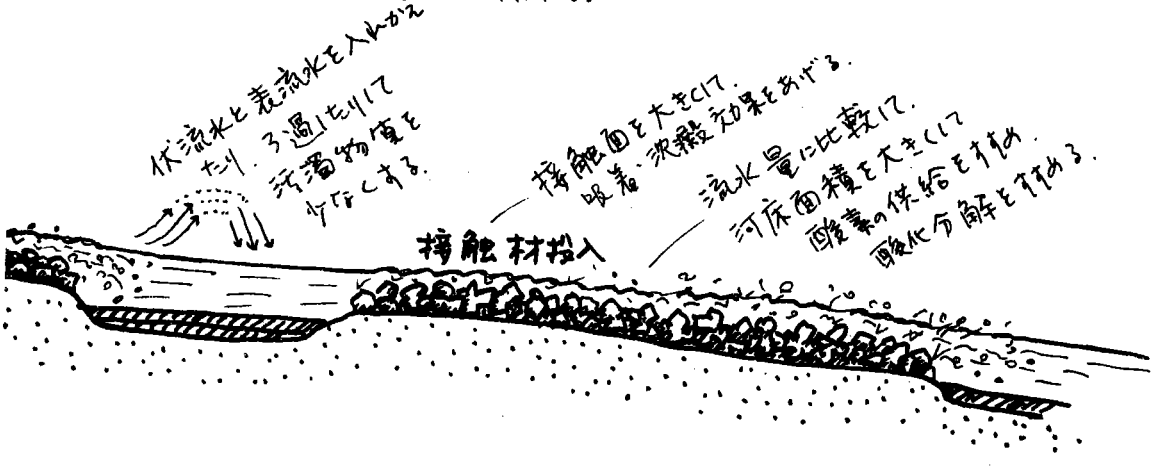
● 瀬の所では、川底の礫で水が泡立ち、空気中の酸素が水中に多く溶け込む。この曝気によって、川底に棲息するバクテリアやミミズなどの生物活動がさかんになって、生物酸化がすすみ、汚濁物質が分解される。

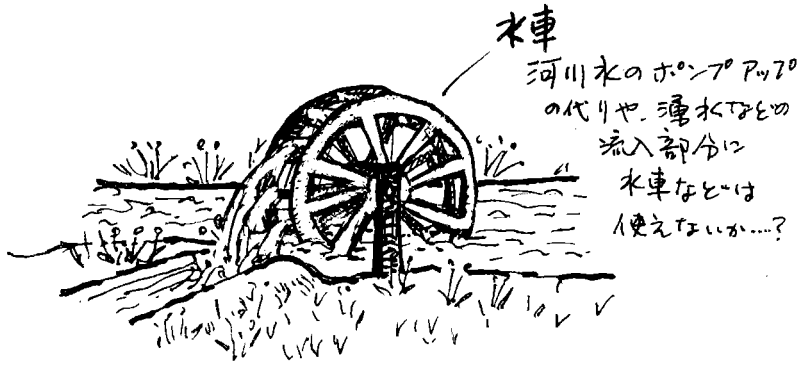
● 瀬の礫間では、汚濁物質の沈殿や吸着により、酸化がすすむ。

● 瀬の川底には汚濁物質をろ過する力がある。

● 流速が下がる淵のところでは、汚濁物質が沈殿し分解される。

● 雨水・湧水・伏流水の流入により、汚濁物質の希釈が行われる。





下水道完備は本当に水を浄化できるでしょうか

野川の水をきれいにするには、家庭の雑排水を流し込まないように、下水道を完備させる、というアイデアがあります。

野川に流入しなかった汚水は、下水道を通って、やがて汚水処理場に行き、処理された水は、多摩川を経て東京湾へと流れて行きます。汚水処理場では処理しきれない汚水も多く、長く海に漂っていても分解されずに堆積するものもあります。合成洗剤や、薬品類、水洗トイレなど、自分の生活の中だけをみても、海にそのまま汚れを流し込んでいるようなものです。すっかり現代人の身についてしまった、簡単で便利な生活は、汚い物はすべて水に流せば、目の前はきれいになるという、使い捨ての生活に現れています。でも海の水の汚染もまた、巡り巡って、自分の口にもどってくることになります。先述のように、下流の人も使う水という思いやりが、例えば、いつまでも泳げる川を造り出していく、ことになると思います。

ここに、専門家が考えた水を浄化するためのアイデアがありますので、紹介します。

昔の野川のこと（12）

昭和三十年頃文京区駒込より引っ越してきた頃は、大川といっており、こどもが小魚をすくって来ては、夕食の酒のつまみにしたものです。

現在、野川となってからは、川のイメージがなくドブ川といっても過言ではないようです。

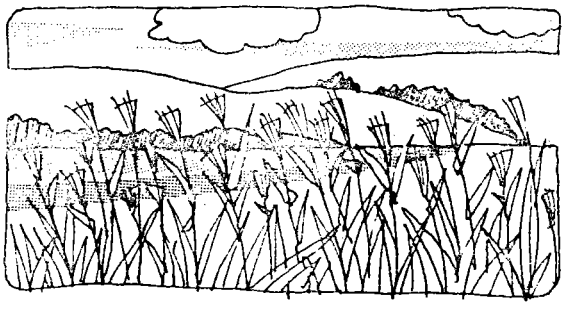
昭和三十年当時は、田んぼの稲の間で、カエルやヘビのけんかをよく見かけたものです。

（本町一丁目　宮本金五郎さん）

●開発しない。車を走らせない。●散歩道、緑地帯にする。●トイレやベンチを作る。などのアイデアに加えて、最も特徴的なことは、●野川をもっと知ってもらうために、スケッチ大会や祭りなどのイベントを組立てる。●くじら山周辺でキャンプができるように。●地域の人に知らせる。●子どもに汚さない教育をする。●行政と一体になって自然保護をすすめていく。などの広報活動や運動がアイデアとして出ていることです。

野川は廃水路か川かが別れ道

以上、流域別に、アイデアを挙げてみましたが、ここには、野川の水そのものを必要としている暮らしは、もはやありません。二十五年もさかのぼれば、まだ野川は、水田のかんがい用水として立派な役目がありました。また、野菜を洗ったり、子どもが泳いだりと、生活の中になくてはならないものでした。上流の者は、下流で使う者を思って、水を汚さない努力をしていました。今、現代の暮らしの中で、川の水を必要とした生活が組みたてられるかどうかが、自然保護を大きく左右するものとなってきているのです。



もっと野川の水とかかわりをもちたい

このあたりの野川は、家並みから少し離れて、しばらくフェンスを廻らせた道に沿って流れ、やがて河川敷の残ったハケ下の開けた景色の中を、武蔵野公園、野川公園へと流れて行きます。人々も、川沿いの散歩や、公園の草原での遊びを楽しんでいます。

アイデアにも、その生活を反映したものが多く、水の使い方も具体的に挙っています。

●開発しない、家の増加をとめる。●緑を残して、水や空気をきれいにする。●水に親しめるように。●魚を放流する。●ミニ水田を作る。など。また、川と川べりに限らず、●子どもに汚さない教育をする。というのも、日常、子どもの遊び場として、野川が存続して欲しい願望を示しています。

野川はくつろぎの場

流域外に住んでいる人々は、野川公園や武蔵野公園の構成要素として野川をとらえているようです。離れた所から見る野川に、小金井市の中での大切な緑地、遊び場、くつろぎの場を重ねて描いていることがわかります。

昔の野川のこと（11）

二〇年前、川があって、田んぼがあって、子どもを育てる場所と思い移住しました。野を流れる川の面影がありました。

ドジョウ、ザリガニにも子どもを育ててもらいました。

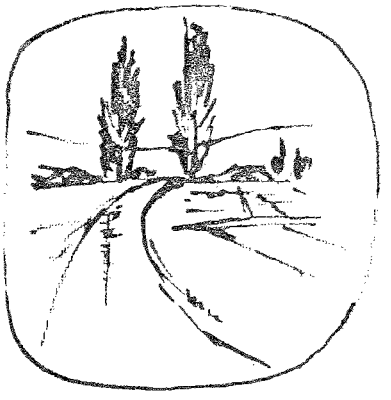
（中町一丁目　倉橋良子さん）

そんな訳で、●下水を流し込まない。●汚さないように気をつける。●ゴミを捨てない。など、自分たちが生活の場で努力をすることで、少しでも環境をきれいにしようという美化的なアイデアが目立ちます。●野川を暗きょにして、その上を遊歩道にする。というアイデアには、家の立ち退きをしてまで、拡幅、緑化、水と親しむなどは考えられない、野川と家並みの関係を示しています。

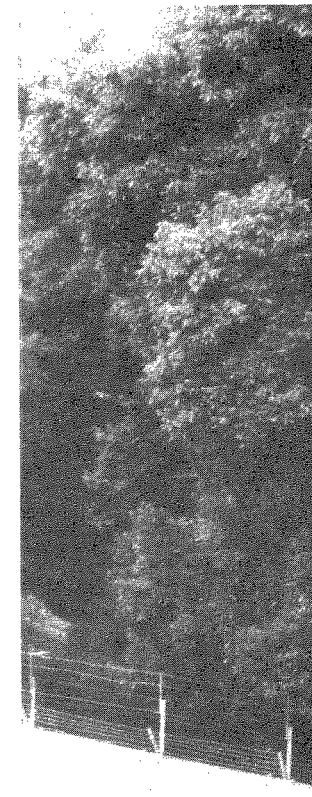
野川はみんなのもの

上流に近い様子の所と、川沿いに木が繁り、木造の橋がかかっていたり、流れを見ながら歩ける道があったりと、様子を変えている所が共存しています。また、下流の方へ遊びに行ったりしている人もあり、野川公園周辺の様子を知っている人も多くなります。

●コンクリート護岸でなく自然な感じを残す。●お金をかけずに公園を増やす。●湧水を野川に流す。●水に親しむ形態にする。●土手に花などを植える。●掃除をする。●自然環境保護対策を設ける。これらのアイデアは、野川を下水用のドブ川と見るよりは、散策や憩いの場としても生活に必要な川としてとらえていることを示しています。



こんな川なら・わたしのアイデア



国分寺日立中央研究所南側
（内部は林間の清水だが……）

まずはじめに、この設問は、今、残されている野川周辺の自然環境を、これ以上悪化させたくないということを一致点として確認したうえで、アイデアにあたるものをまとめます。

回答のうちの四〇人（三〇％）がノー・コメントであったことは、現状の自然環境を維持していければ可ということかどうか、不明なのが残念です。

ここでは家並みと背中合わせにコンクリートでガッチリと護岸された野川が流れています。護岸の壁面には、大小さまざまな丸い穴が開いていて、そこから、ジャージャー、チョロチョロと家庭からの雑排水が流れ落ち、野川が汚れる場面が、はっきり見えます。

野川に関することで行政に知ってもらいたいこと、
やってもらいたいことがありますか。
野川をとりまく自然環境を守っていくために
よいアイデアがありますか。

こんな川なら・わたしのアイデア

コラム

班目 文雄・川合 元彦他

「東京都の地理」より

（昭和四〇年・光文館）

野川　国分寺の西の所に水源を発し、段丘の崖の所から出る湧水、そして、深大寺付近の水をも集めて流れ、多摩川に合流している。深大寺付近の水などよい例であるが、冷水（水温16°C）である関係から「わさび」の栽培に利用されていた。最近では深大寺付近の崖から流れ出る水をとめて池をつくり、虹マスの養殖が行われている。これらの水は野川にそそいでいる。

湧水池　谷頭、谷の側壁などに湧水池がある。湧水池の所は公園になっていることが多く、ほとんど人為的加工がなされている。井之頭池・妙正寺池・仙川池・深大寺の池などがあるが、これらの池は、北東から南西にほぼ一直線に並び、その標高は50mの等高線の近くにある。

入って遊べるような形にしてほしい」といった素直な想いで語ったものが印象的でした。将来、野川の水質が良くなるとの確信のもとに、親水機能をもつ川として計画しなおすことも必要だと思います。

また、上・中流の改修計画にしても、計画した当時と、現在の状況がすべて違っていることを考えると、安易に工事を進めることが果たして良いのだろうかと思ってしまいます。生命と生活を守るために行われる治水工事が、結果的に多くの人の犠牲の上に成り立つことを考えると、現状の中で、無理のないやり方を考え出していくことが、最も大切ではないかと思います。上・中流の味けないコンクリート護岸でも、それに沿って並木や花があり、場所によっては下に降りられるようにうまく計画することも可能でしょう。そうすれば、今の形が嫌だから暗渠に、という意見は、ぐっと少なくなると思います。要は、みんなが野川を好きになれるような、そこに行くと心が休まるというような、そんな護岸であってほしいですね。

昔の野川のこと（10）

私は、少年時代魚釣りが好きで、よく天神橋から二枚橋まで歩きました。両側は、ススキ、カンゾウ、ハトムギがよく繁っていました。ところどころに桑の木があり、実のうれる頃などよく取って食べました。

川の中には、コウホネなどが自生していて、コイ、フナ、ウナギ、ハヤ、タナゴ、ヤツメウナギなどがいました。

その頃は、「大川」で通っており、野川というようになったのは、改修工事が行なわれ、住宅が多く建てられてからだと思いました。

（前原町二丁目　本木泰茂さん）

安全な川

全体で一二件の回答がありました。「増水に対して有効、住民に被害のない護岸」が六件、「自然を生かした形が望ましいが、防災上少しの自然破壊はしかたない」が一件、「危険防止柵必要」が二件、また、「護岸工事に薬品を使用することの不安」「子どもの安全のための見はり場が必要」とする回答もありました。

いまのままでよい――？

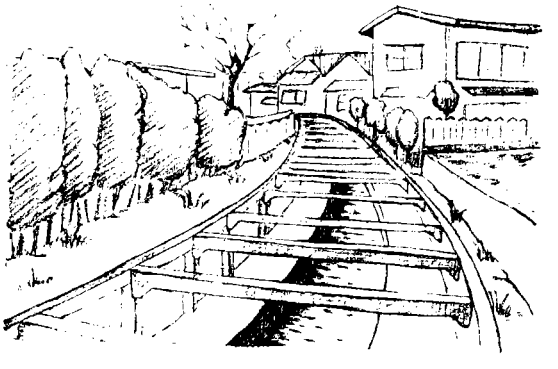
八件の回答がありました。「今のままで心配ない」が二件、「拡幅による立ちのきは無理なのでこのまま」「拡幅を望むが、現実的には無理」というのが二件、「行政や自然保護団体の話を何度も聞いたが進展なし。いつも同じ話で失望している」が一件。

「今のままで心配ない」のは下流域の人だけで、他の人は、かなりあきらめの境地で答えています。

心のやすまるような護岸を

野川の護岸について、アンケート結果をまとめてみましたが、一口に護岸といっても、回答者と野川とのかかわり方によって、さまざまな答えが返ってきました。

中でも、「野川が〝大川〟とよばれた時代は、川に入って水遊びや魚釣りができた。係にはぜひあのような経験をさせたい。」「子どものためにも、水の中に



前原町三丁目付近の野川

野川の改修はどうなる？

丸山橋から上流に川を広げる計画がありますが、そのことに関して二五件の回答がよせられました。「改修をし、川幅を広げる」「曲流部分を少なく」「改修の時、真直でなくしぜんに河川敷をとる」という拡幅改修を求めるものが九件、「深く掘り下げるだけで、川幅を広げない。立ちのきを避ける」「深く掘り下げて、暗渠に」など拡幅改修を望まないものが四件、「斜面のある断面」「段堀」といった護岸の形が四件、「シートパイル方式」が一件、「場所によっては暗渠に」するが三件、「川幅、立地条件により、やり方は異なる」とするもの二件などとなっていますが、グラフを見るとよくおわかりのように、下流・流域外よりも上・中流のほうが改修問題に関心を持っていることがはっきりします。

改修が行われれば川幅が広がるので、大雨が降っても道路に水はあふれないでしょう。けれども、これには立ちのきという生活にかかわる大きな問題が伴っています。回答された方の一つ一つの言葉の中に、立ちのきは無理だけど、もっと良い方法を見つけていきたいという姿勢が感じとれました。

昔の野川のこと（9）

野川からの用水に、タニシ、ヘビ、ドジョウ、カエルなどがいました。イタチが樫の実を食べに来たりもしました。

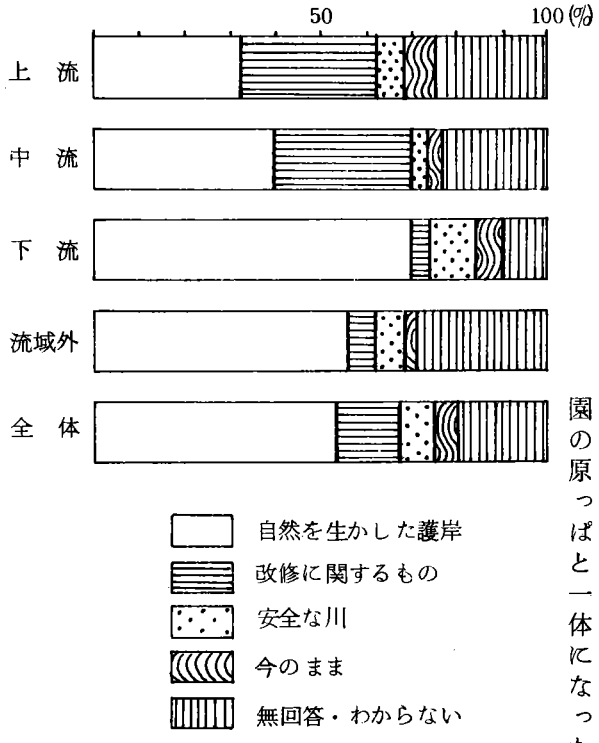
木は樹令五〇年の杉が三百本ぐらいありましたが、下弁天の湧水が涸れてから、木も枯れてしまい、切ったのです。

目通り二尺（約六〜七〇センチ）の杉・ケヤキなどが多くありました。しかし、みんな戦時中に供出しました。

都営住宅のところで野川が曲がっているのは、昔あの辺にあった松平女学校の都合で川を曲げたのです。その後毛利農園になったが、川は曲げたままでした。こんなに住宅が建てこむ前に、まっすぐにしておけばよかったのかもしれませんね。

（貫井南町二丁目　大沢一雄さん）

グラフ I



などの水に親しめる形を望むものが一七件、その他、「自然な形に見えて、しかも、補強のためコンクリートを使用」するものが一件、に分けられました。

次にグラフIを見てください。「自然を生かした護岸」が良いという答えが下流では下流回答者数の七〇パーセントをしめています。これは、自然の草花におおわれたこの地域の野川の形に、下流住民がある程度満足しているからではないかと思われます。また、ここには、野川流域の最大のオープンスペースである武蔵野公園・野川公園があることから、はけの樹木や公園の原っぱと一体になった〝野川〟というとらえ方をしている人も多いようです。

上・中流でこれに答えた方は思ったより多く、現実にはコンクリートの放水路となっているけれど、理想としては下流のようであってほしいという気持がうかがいしれます。

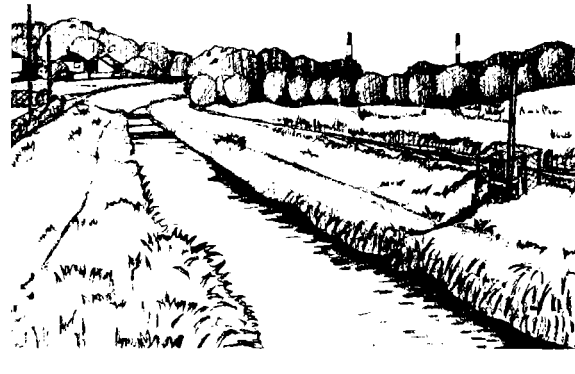
るのでしょうか。私たちはこれについて知りたいと思い、この設問をアンケートに加えました。

自然を生かした護岸を

一四三人中、三七人の方が無回答、およびわからないと答えています。残り一〇六人の方が護岸について考えてくださったのですが、一人で二つ以上の回答もあり、全部で一三七件にまとめられました。

この中で特に多かったのは、「自然を生かした護岸であってほしい」というもので九二件にものぼりました。

この中をもっと細かくみてみると、「自然のままの形」「自然を壊さない護岸」「水の流れと緑を意識させてくれるもの」などのイメージを中心としたものが一七件、「武蔵野公園あたりの形」「野川公園のような形」「中町あたりの広々した感じ」といった具体的な場所を出しているものが一七件、「コンクリート護岸でなく草木を生かした土手」「コンクリート護岸は望ましくない」とするものが三三件、「岸辺に桜などの樹木がある」「散策ができる。そのために軽舗装」「たんぼ」といった川岸の状態についてが七件、「川に降りて、水のそばまで行ける。川で遊べる」「おたまじゃくし・魚が住める形」「柵がないほうがいい」



武蔵野公園の横を流れる野川

どんな護岸の形が好きですか

水の勢いから川岸を守るために、野川の護岸も場所によりいろいろ工夫されています。

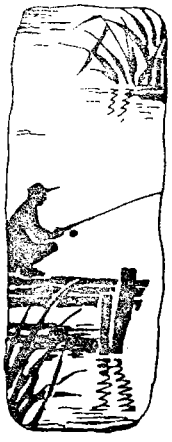
丸山橋の下流は三〇ミリの雨が降っても大丈夫なように広げられ、一部を除き二段式になっています。いつもは、水は低いところを流れ、大雨が降れば野草の生える上の部分まであふれるようになっています。部分的にコンクリートで補強してあるところもありますが、自然とうまく調和がとれています。

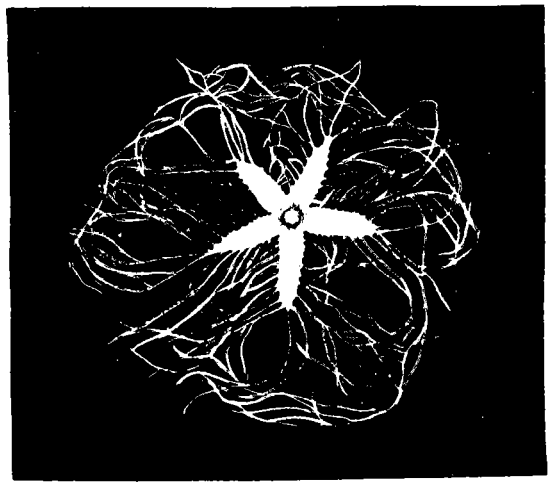
丸山橋から上流は、野川は住宅密集地の間を蛇行して流れています。川というよりもコンクリートの放水路のようであり、かつては、大雨のたびに水が溢れて周囲を水びたしにしました。現在、ここは川幅を広げる計画があり、前原小学校までは具体的な計画に基いて工事が行われようとしています。

改修前の野川の様子は、その名にふさわしく、田畑や原っぱの間を流れる土と緑に囲まれた自然のままの川でした。川幅は狭く、水の深い所では、子どもたちが水遊びや魚釣りをして大いに自然を楽しみました。

このように、野川の護岸は時と共に変わり、また、場所によって異っています。

では、いったい野川流域の方々は野川の護岸についてどのように考え、また、どのような護岸を望んでい





カラスウリの花

野川の特質を生かした水害対策

かつて、野川の流域には田んぼや畑があり、洪水の時はその上に水があふれました。その後、昭和三十年代、四十年代と進むにつれて宅地化が進み、家屋への被害や道路の冠水が多くなってきました。昔から野川は水の出る川だったので、古くから住んでいる人はそれなりの対応はしていたようですが、新しく小金井にはいってきた、農地とかかわりのない住民にとっては、やっかいな川だったようです。丸山橋から上流の野川のすぐわきに続く密集した住宅を見ていると、水が出ることを承知で土地を売った人・買った人、何も知らないで買わされた人の人間模様が目に浮かんでくるようです。

今では下流は拡幅改修のため溢水しなくなり、また、上・中流では下水道の完成によってほとんど水が出なくなりました。大雨のたびに被災していた人にとっては喜ばしいことですが、人の手によって川が管理されればされるほど、どこかに無理が生じるのではないかと思ってしまいます。野川の持つ特質を十分生かした水害対策が果たしてなされているのでしょうか。ある時代の価値基準のまま、川に手を加えようとしてはいないでしょうか。このところは行政と私たちが一緒になって考えていきたいですね。

●下流―五人うち、昭和十九年以前の被災が一人、三十年代の被災が一人、年代をこえてたびたび被災した人が二人、水害にあった年代がはっきりしない人が一人となっています。昭和十九年以前に被害にあった人からは、

「昭和十六年の大水害で田んぼが流された」「野川の川幅が二〇〇メートルくらいになった」

という歴史的、記録的な水害の被災体験が寄せられ、三十年代の被災者からは、

「水の退きが悪く庭木が枯れた」「井戸水に汚水が流入して困った」

などの回答があり、年代をはっきり覚えていない人は

「水があふれて通行できなくなった」

と言っています。

●流域外―二人のうち市内の体験者は一人で、

「下水道普及以前に道路が冠水、外出できなかった」

と答えています。

カラスウリ

店内に侵入」

などがあります。年代をこえて、〃たびたび被災した〃とする回答には、

「大雨が降るたびに床下浸水」「家の床を一メートルくらい上げた」「ボートで助けてもらうようなことがあった」「夕立でも溢れた」「数えられないくらい浸水した」「下水道完成までに数回被災」「引越し直後に氾濫し驚いた」「あと始末のための水道水の料金に減免の考慮がなくて困った」

などがありました。

●中流―七人の、うち三十年代に水害にあった人は二人、四十年代では三人、年代をこえてたびたび被災した人は二人となっています。このうち十九年以前から住んでいる人に、

「田んぼが冠水した」「床下浸水した」

などの被害があり、四十年代では、

「下水道工事が終るまで被災」「大雨の時に野川から逆流」「学童が消防署員につきそわれて下校」「子どものころ野川がこわかった」

などの回答があります。

昔の野川のこと（8）

昔はお洗濯を野川でしました。少し下に下り口があり、大きいものは川で洗いました。

お勝手むきは井戸でしました。

キュウリの種は野川で洗いました。井戸より便利だったからです。水浴びや、どじょう取りもしました。

（前原町三丁目　鴨下不二さん）

われるまでの間に何度も被災していることがわかります。

流域別の被災体験

これを流域全体でみてみると、上流が一二人（被災体験者の48パーセント）で約半数に近く、野川の未改修の地域に水害が集中していることがよくわかります。以下、中流では七人（28パーセント）、下流では五人（20パーセント）、流域外では二人（うち一人は市外での体験なので、これを除くと4パーセント）と、下流にいくほど被災体験が少なくなっていくことがわかります。

次にこれを流域別に細かくみてみましょう。

●上流―一二人のうち四十年代に水害にあった人が五人、五十年代には二人、年代をこえてたびたび被災している人は五人となっていて、年代が進むにしたがって（野川の改修が進むにつれて）水害が少なくなっている様子がうかがえます。

被害の様子としては、四十年代には、

「台風でひざうえまで増水」

などの回答が寄せられています。昭和五十年以降では、

「子どもが下校時にボートで帰ってきた」「水が

イヌビエ

野川の水害と護岸

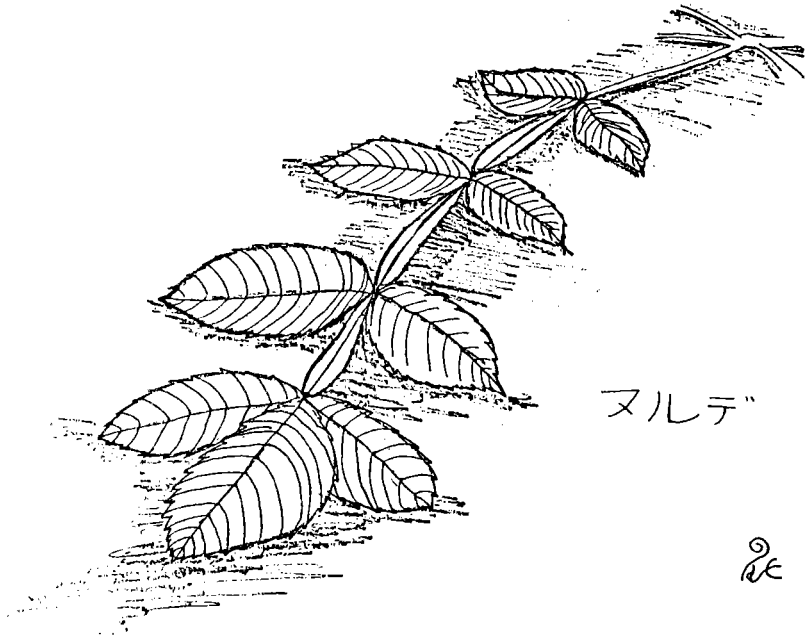
大雨が降ると野川はよく氾濫し、流域住民はそのたびに何らかの被害を受けてきました。この項ではアンケート回答者一四三人中、被災経験のある人二六人に被災時期とその様子をうかがいました。このうち小金井市外で被災した一人を除くと二五人になり、これは、全回答者数の一七パーセントとなっています。

水害にあった時期を年代別にみてみると、昭和十九年以前が一人、三十年代が三人、四十年代が八人、五十年代が三人、年代をこえてたびたび被災した人は九人と最も多く、年代がはっきりしない人が一人となっています。

「たびたび」と答えた人九人の居住開始の時期をみてみると、昭和十九年以前から住んでいる人が一人、三十年代から住んでいる人が四人、四十年代からが三人、五十年代からが一人となっています。昭和三十年代、四十年代に住み始めた人たちが、野川の改修が行

野川の増水で被災したことがありますか。
その時期と被害の様子をお聞かせ下さい。
野川の護岸についてどういう形が望ましいと思いますか。

野川の水害と護岸

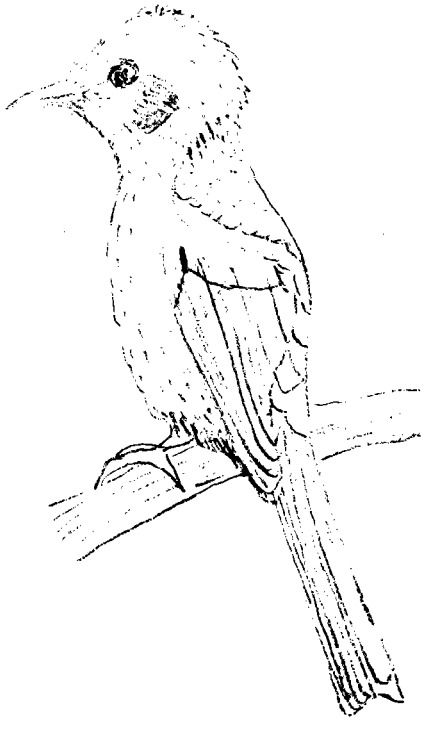


自然のなかから多くを学ぶということを忘れてしまっている、今の私たちにとって、くさい・汚ない、きれい・いいにおいとは一体何なのでしょうか。アンケートの○×式でない回答は、私たちに考える素材を提供してくれました。

野川にそってたんぼがあった頃、肥だめも近くにありました。畑には人糞がまかれ、検便の時など、都内から引越して来た子どもは陰性で、私たちは虫くだしの薬を飲んでいました。農家には、豚が飼われ、その臭いも相当なものでした。

生活の向上の名のもとに、大切なものを一緒に捨ててきたのではないかと、今、思います。

ヒヨドリ



くさくなくなった

臭いについて、良くなった、感じなくなったという回答は二一件でした。「臭いは気にならない」、「拡幅により臭いはよくなった」、「庭があるので、臭気を感じない」などがあります。

その他に、「臭いのしない、きれいな川に」が一件、「川が道のような役目をして、南側の家とへだてられている点はよい」が一件ありました。

どんな川がよいのか

設問した、汚れぐあい・臭いについての回答をみると、ニュアンスの差こそあれ、ほとんどの人々が、汚れている、くさい、という感じをもっていることがわかります。

川が水を治めるという観点から論じられる必然性が歴史的にあることは当然としても、川に対する感傷の部分が切り捨てられていることに、大きな問題があると思われてなりません。コンクリートの桝もあらわに、澄んだ水道水が流れ、錦鯉が群なす川も、川なのでしょうか。

昔の野川のこと（7）

昔はせきが二ケ所あって、よく泳ぎました。台風で野川があふれた後は、たんぼでコイがとれました。野川の横の小川では、フナをはじめいろんな魚がとれました。水不足で乾ききった川底で大きなナマズの干あがったのも見たことがあります。

ウナギ取りの仕掛けも今はなつかしい思い出です。

（前原町三丁目　平野正幸さん）

知らない、わからない、現状は知らないとの回答は三件ありました。無回答は六件でした。

くさいと思う

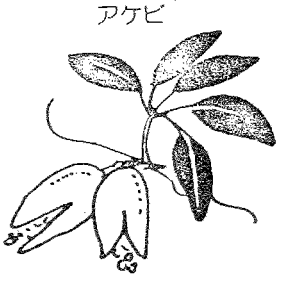
くさい、くさいと思う時の方が多い、くさいと感じたことがあるとの回答は、二〇件でした。

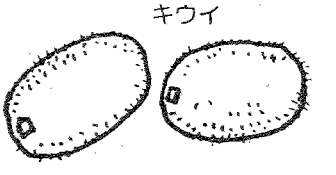
いつくさいか

臭気について、季節的・時間的変化についてのべた回答は、二二件でした。「夏、暑くなると特に臭う」、「湿気の多い時、くさい」、「雨が降らないと、臭いが強くなる」、「昼近くになると、雑排水が入って水量が増え、くさくなる」などです。

どこがくさいか

臭気について場所を特定した回答は三件でした。「野川公園の近くが、とてもくさかった」、「くじら山近辺は、かなりくさい。前原二丁目あたりは、かなりくさいのに、ジョウビタキがいる。もっときれいだったら…」などです。





ひどくなった人も

相かわらず汚れている、ひどくなったとする回答は四件ありました。「関心を持つ人は多くなっているのに、汚れ・においもひどくなっている」などです。

気にしない人も

気にしないなどの回答は四件ありました。「最近は気にしなくなった」、「慣れてしまってわからない」、「昔を知らないので、別に感じない」、「特に汚ないとも思わないが、きれいでもない。こんなもんだと思っている」などです。

もっときれいに

改善を示した回答は一九件でした。「汚れの原因は国分寺。下水道化を早急に」、「小平・国分寺の下水道化を」、「生活雑排水のシャットアウト」、「国分寺で小平の下水を野川に入れたのが、よくなかった」、「合成洗剤を追放したらどうか」、「自分のものを大切にし、共同のものを雑に扱う日本人の特質」、「国分寺の市民団体『野川をきれいにする会』が、定期的にゴミさらいをしている」、「湧水を効果的に集めては・・・」、「都の方へ連絡したが、何もしてくれなかった」、「あまりに無関心の人が多く、きれいにしようとする人がいないので残念」などとなっています。

日立中研南側（汚水とのブレンドとなる）

汚れるときは

汚れぐあいの「時間や天候による変化」について述べた回答は一二件ありました。「七時～九時頃がきたない」、「夕方の水はよごれている」、「時々きれい」「朝はきれい」、「大雨がふるときれいになる」、「休日の朝晩はきれい」などです。

虫がふえた

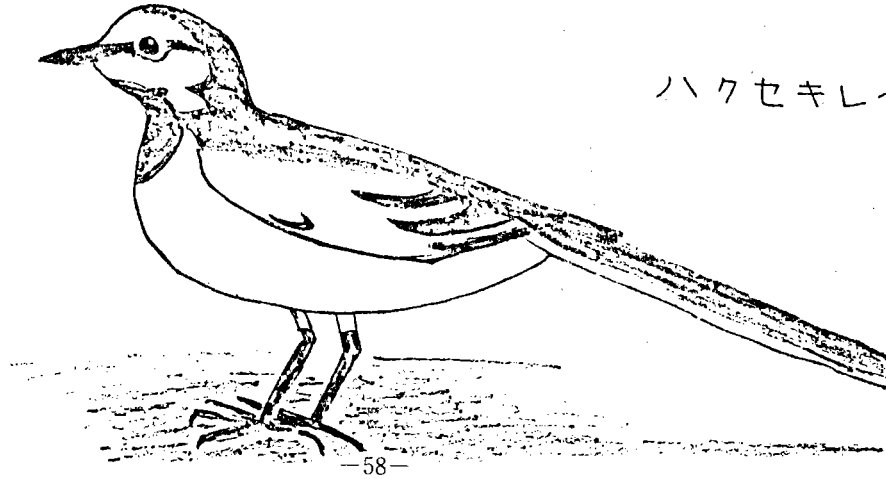
カ・ユスリカ・小バエなどの虫が増えたとの回答は六件ありました。

汚れたところ

汚れについて場所を特定した回答は二件ありました。「中前橋あたりがきたない」、「下流の水の方がきれい。上流はきたない」。

よくなった人も

よくなった、よい方ではないか、という回答は二二件ありました。「今はよくなった」、「見た目には、今の方がきれい」、「昭和二十五～三十年ごろはひどかった」、「下水道完備前はひどかった」、「いくらかきれいになった」、「護岸してからきれいになった。においもなくなった」、「都内のふたをしている川よりは、きれいだと思う」などです。



野川の水を考える

野川の水の汚れぐあい、臭いについて市民のみなさんにお聞きしました。一人で複数の回答をしている人もあり、回答件数は二一八件でした。次にその内容を御紹介します。

野川の汚れ

汚れについての「感覚的」回答は三八件ありました。「汚れている」、「きたない」、「きらい」、「ひどい」、「悲しい」、「非常に残念に思う」、「困る」、「空や緑に対して、ひどいと思う」、「今や川ではない」、「いやだと思う」、「川は澄みわたった水が流れている場所だと思っていた。愛着心なし。顔をそむけている」、「ドブ川としか表現しえない川」などです。

汚れる原因

汚れの原因について述べた回答は二五件ありました。「不燃物・粗大ゴミなどをすててあるのを時々見かける。たとえば、マットレス、ふとん、自転車など」、「ゴミをすてる人がいる」、「下水を流すからきたない」、「洗剤が流れている」、「人が多くなった（都市化）ので、よごれる」などです。

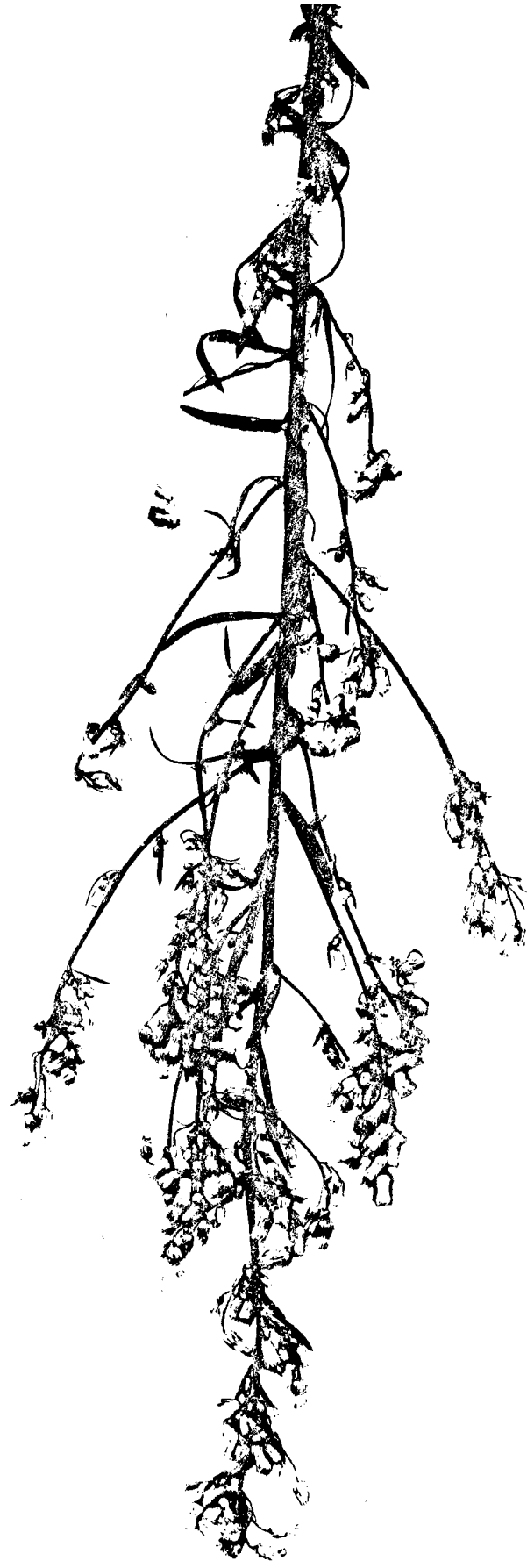
昔の野川のこと（6）

昔は家が少なく、昭和四十一年の断水の時は、貫井弁天でもらい水をさせてもらったことがあります。

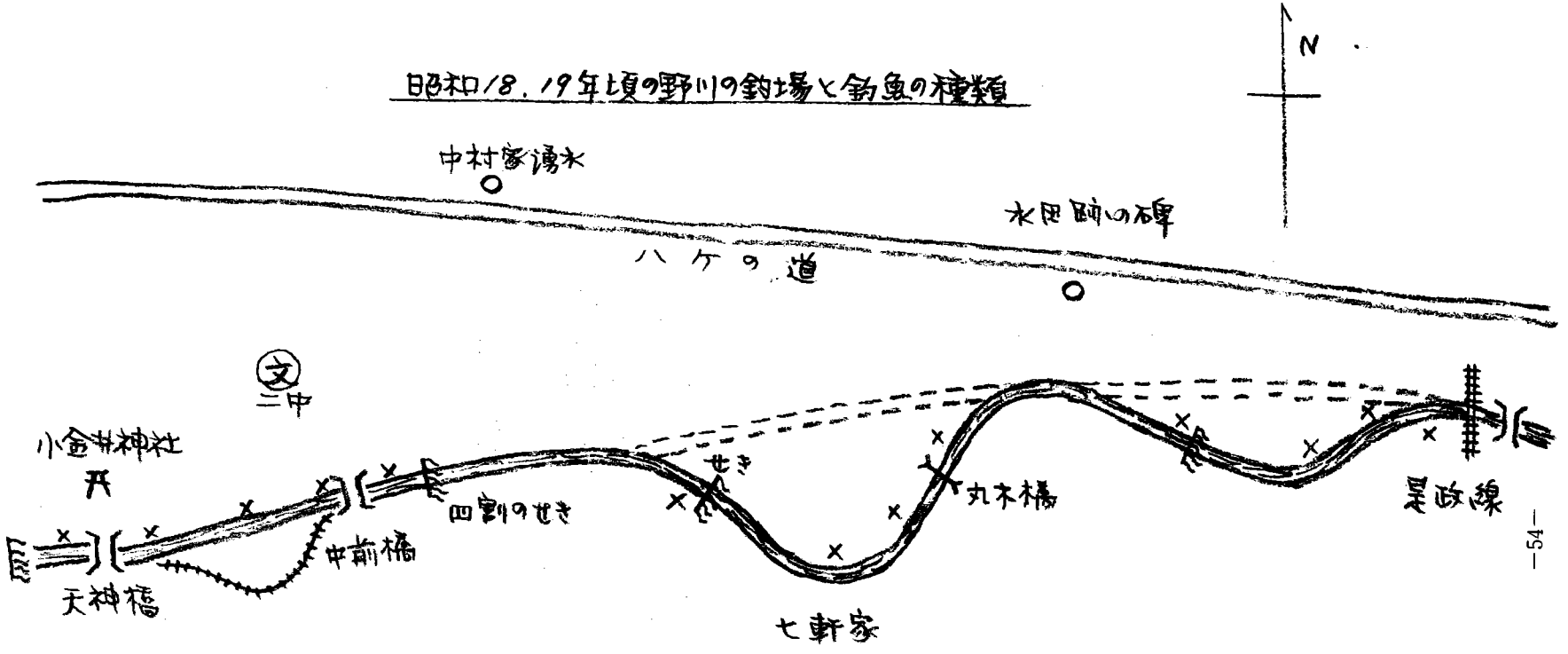
（貫井南町四丁目　高田絹子さん）

野川の汚れ具合、臭いなどについてどう思われますか。

野川の水を考える



昭和18、19年頃の野川の釣場と釣魚の種類



現在の形状
当時の形状
当時の2〜3年前の形状
× 釣り場（ポイント）
せき

釣った魚

コイ	エビガニ
フナ	イモリ
ハヤ	タナゴ
ナマズ	ヤマベ
ゲバチ	
ウナギ	
ドジョー	

掬った魚

ヤツメウナギ
オハバ
ゴマメ
ガジカ
モクズーカニ
川エビ

その他

カメ
シジミ
カタガイ
カニ
タニシ

水害にあった時期

野川が氾らんしたことは何度かありますが、中でも昭和十六年の水害はたいへんなものでした。中前橋付近と新橋周辺では野川をはさんで二〇〇メートルぐらいの幅で田んぼが冠水し、干上った田んぼで大きな鯉や鮒が手づかみでいくらでもとれました。

野川は至るところ好釣り場の連続でした。昭和十八、十九年当時の野川の釣り場（ポイント）や魚種などは、別図のとおりです。戦時中も艦載機が飛来するまでは、空襲警報下でもB二九を見上げながら釣りをする人もありました。のんきなものでした。小金井新聞に「小金井の年輪」を連載された星野進一さんの「子供のころ、釣り人が裏の野川で尺余のヤマメを釣りあげたのをこの目で見た。」という話が、いまでも強く印象に残っています。戦後食糧難の時代、野川からエビガニをたくさんとってきて、シッポの部分をゆであげてよく喰べたものです。貴重な蛋白源でした。

子どもたちは、季節にはセリやヨモギ摘みをし、自然を満喫しながらフナやエビガニやレンゲの花やホタルたちに育ててもらいました。野川は子どもたちにとってまさに「母なる野川」、そういう川だったのです。

カニもいた

昔の野川のこと（5）

はけの下は、野川をはさみ、北も南も田んぼでした。岸にはマダケもはえていました。貫井から前原にかけては竹林でした。

戦前、昭和十五、六年頃は野川はとてもきれいでしたが、戦後はがらっと変わりました。米がくさくなり、田がだめになり、埋めたててしまいました。

今はそれでもきれいになってきましたが、昭和二十五～三十年頃はひどいものでした。一時はドブ川で悪臭がひどかったんです。

（貫井南町三丁目　小山濱吉さん）

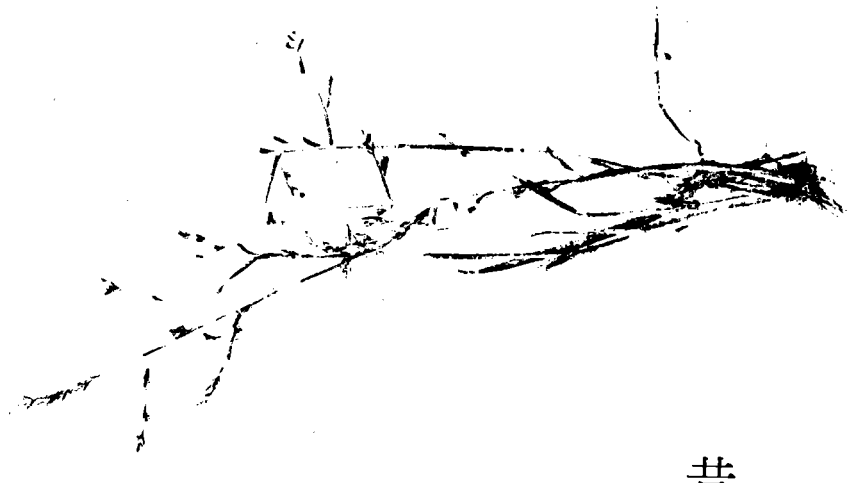
野川とくらし

野川周辺を散さくする家族がたくさんいました。

中前橋の上下は格好の水泳場でした。中前橋の下流三〇メートルほどのところに四割りのせきがあり、子どもたちはこのせきの上をとびこえ、とびこえ向こう岸にわたるのが男の子としての証明でもありました。泳ぐときは男の子も女の子もほとんどがスッポンポンで、褌や水着をつけた子はほとんどいませんでした。子どもたちがワイワイ泳いでいるそのそばで、小ブナがいくらでも釣れました。今から考えてみると夢のようです。水源が湧水なので水は冷く、からだが冷えるとそばの田んぼの暖まった水につかって、からだを暖めました。

自然の岸辺

泳いでいる岸辺で、青大将が蛙を呑みかけているのを何度もみました。自然界の生存競争のきびしさを、子どもたちは遊びながらに学ぶことができたのです。近所の農家の女たちはときには野川で洗濯をし、男たちは牛や馬を洗い、キューリやそのほかの野菜類の種洗いをしました。



昔の野川

昭和十五年頃までの野川（当時は誰もが「大川」と呼んでいました。）は、天神橋と中前橋の間で、いまよりはずっと南側を蛇行していました。中前橋の下流も現在の野川よりも南に寄っていました。川の幅も勢いをつけてとべばとびこすことができそうに狭いところもありましたし、一〇メートルぐらいあるところもあって、水量も豊富で、天神前の精進場（天乞の場）などは大人の背がたたないくらい深いところがありました。流れは文字どおり清流でした。橋の上や岸辺からみますと、小さな魚の群れを手にとるように見ることができました。

ハケ下は野川をはさんで南側も北側も田んぼでした。野川のこのあたりは、小金井の水田地帯の中心でした。岸にはよしやあしが生え、ところによっては真竹が生えていました。流れの中にはハスやクワイによく似た植物や、各種の水草が群生していました。水を引く前の田んぼは、れんげの花がみわたすかぎり一面をおおい、まさに田園風景そのものでした。夏は野川や用水のあるところ、ホタルが飛び交い、夜はホタル狩りに

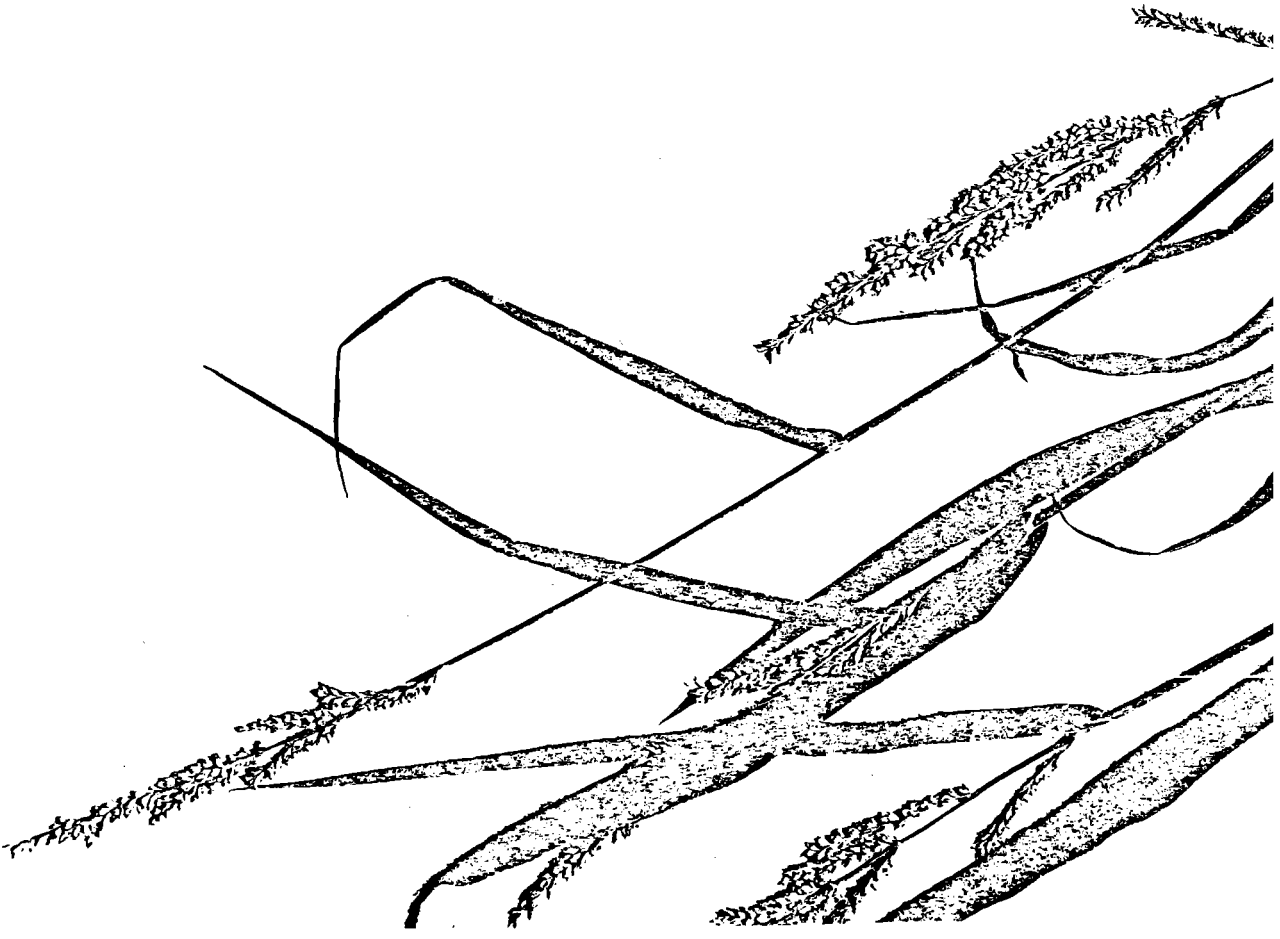
昔の野川のこと（4）

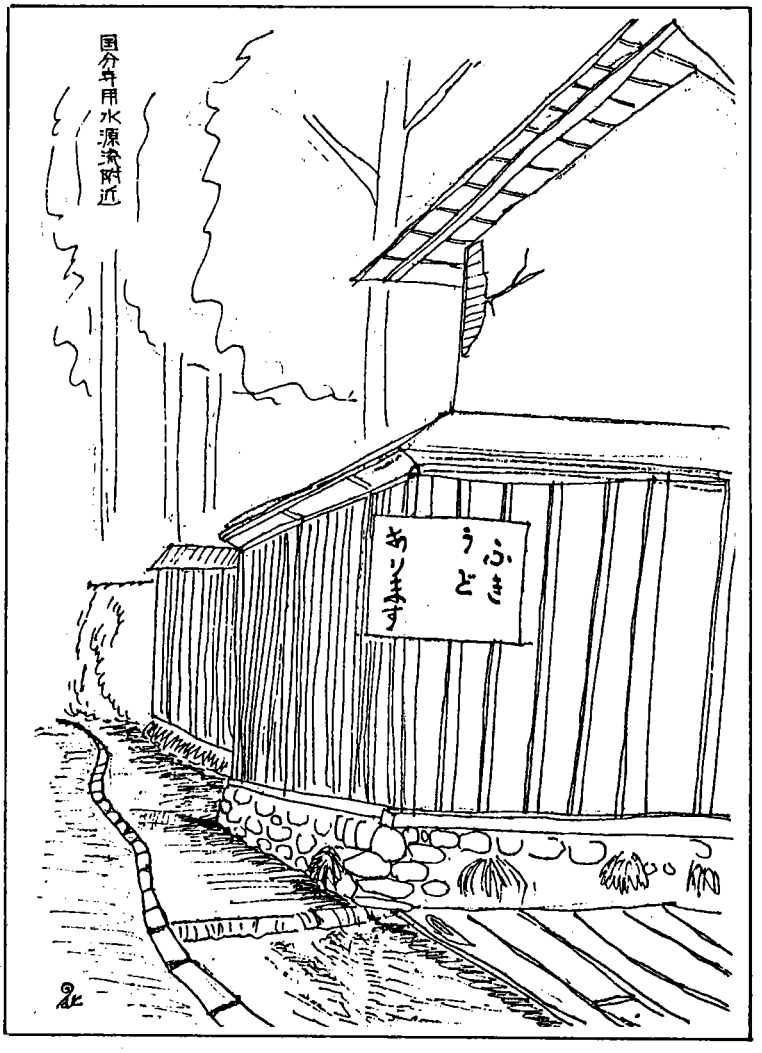
川幅を二四メートルに広げる前、田んぼがあり、春はレンゲがいっぱい咲いていたのが印象的でした。

（前原町二丁目　木島久美子さん）

昔の野川の様子を知っていたら教えて下さい。

昔の野川




国分寺用水源流附近
うどふき
あります

「昔の小金井に来たかった」など、好印象をおもちでした。

また、「できるだけ自然のまま残したい」、「大切に保護したい」など湧水を保護すべきだとおっしゃる方は一〇人でした。

前原町五丁目の斉藤友子さんは「小学校の時は、はけの道の下のわき水でよく遊びました」と、中町一丁目の三林英子さんは「昔はわき水をよく飲んだりしました。学校の行き帰りに遊んだものです」と、話していただけました。

前原町二丁目の本木泰重さんは、「昔はわさびを作っていたところもあり、農産物を洗ったりもしました。よくカニなどとって遊んだことがあり、現在の子どもにはそのような遊びができないので、非常に残念に思います」と教えていただきました。

前原町三丁目の君塚千鶴子さんは、「貫井の下弁天も以前は湧水がありました。私が新宿から小金井に移ってきた昭和三十一年ころは、庭を掘るとすぐに水がわいて出たものです」と教えていただきました。

昔の野川のこと（3）

昔は水がきれいで夏はおよげました。うなぎや魚がいましたし、川辺は色々な草木がしげり、ホタルもいました。

（貫井南町四丁目　若藤好子さん）

「戦後すぐ日立中研の中に入ったことがあり、きれいだった。冬は水鳥が来た」と、各々教えていただきました。中町一丁目の関綾二郎さんからは、「野川には昔、玉川上水が入っていたのですよ。できればそんなふうに戻すことができるとよいですね」と教えていただきました。

汚水も入っている

「悪い印象」を持った人は一一人いらっしゃいました。そのうち七人の人は、「汚水と野川の清流との合流が残念」と答えています。前原町五丁目の下川八重さんは、「幹線下水工事が始まってから、水が汚れたようです」と教えていただきました。

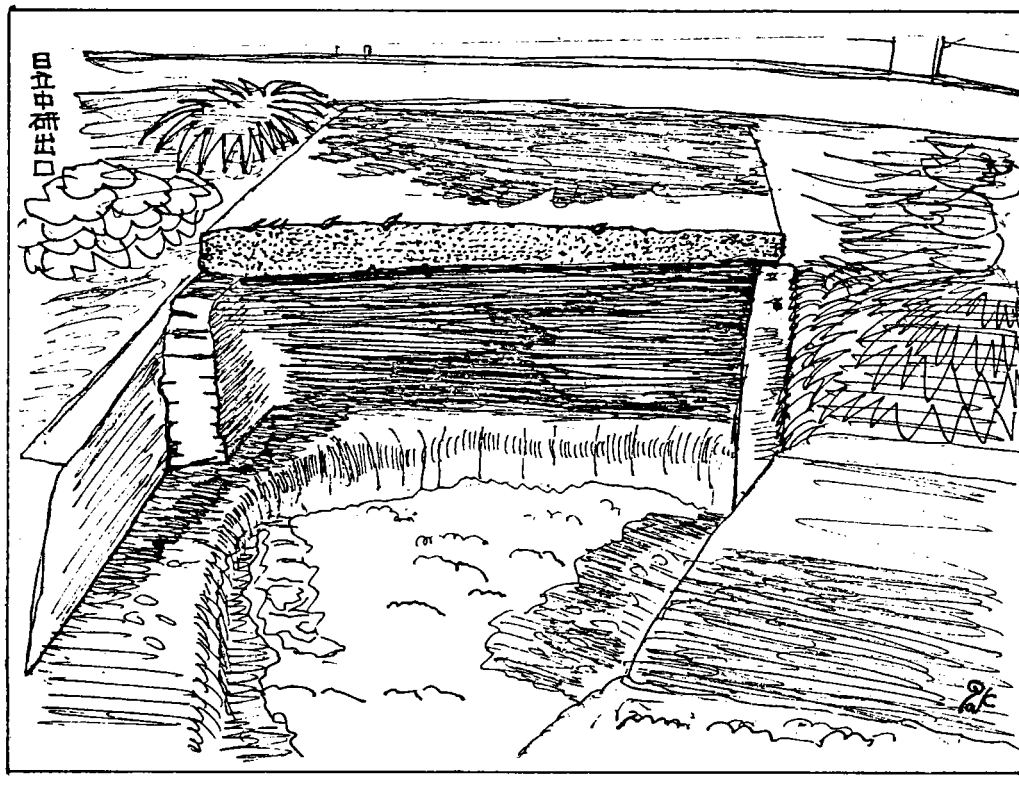
また、「その他」のお答えが六人ありました。本町五丁目の水上兆彦さんは、「植物園内の池がコンクリートで護られ奇異な感じがしました。水は清らかで冷たかったが、なんとなく不安で飲むことはできませんでした」と具体的に答えていただくことができました。

二人に一人は湧水を知らない

「湧水を知らない」と答えた方が二八名で、無回答の方を加えると七一名、なんと二人に一人の方が湧水を知らないことがわかりました。

湧水の感想

一方、「湧水を知っている」と答えたみなさんは、「きれいだ」、「水が豊か」、「冷たい」、「良い感じ」、「顔を洗いたくなる」、「自然の神秘を感じる」、



昔の野川のこと（2）

私が来た頃（昭和三十年頃）は、まだ大変きれいであった。昭和二十年頃まではホタルがいたと云うことです。

（貫井南町四丁目　君村邦雄さん）

これを割合でみてみますと、知っていると答えた人六七人を一〇〇とすると、「日立中央研究所」と答えた人は、46・3パーセントと、ほぼ半数に近く、「真姿の池・その他」を挙げた人は、29・9パーセント、知ってはいるが水源名を挙げなかった人が、23・8パーセントとなっています。

さきにも述べたように水源を知っている人は六七人でしたが、このうち水源へ「行ったことがある」と答えた人は、二三人で、六七人中34・3パーセントの割合を占めています。残りの四四人（65・7パーセント）は、水源は知っているが行ったことはないと答えた人たちです。

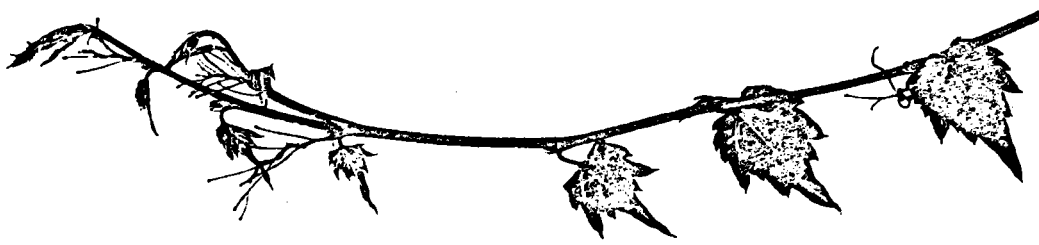
行ったことのある人

それにしても、水源を知っている人たちの三分の一強の人たちが、水源を訪ねたことがあるということは、かなり高い割合と考えてよいのではないでしょうか。

これを流域別にみてみますと、水源に行ったことがあると答えた人二三人中、上流・下流・流域外においてそれぞれ七人ずつが行っており、中流ではこれが二人となっています。

水源の感想

水源の感想をお聞きしたところ、「良い印象」をもたれた方が三二人いらっしゃいました。貫井南町二丁目の柳沢ゆきえさんは、「亡くなった主人がよく歩きました」と、また貫井南町四丁目の井藤澄雄さんは、



水源と湧水

知っている人は二人に一人

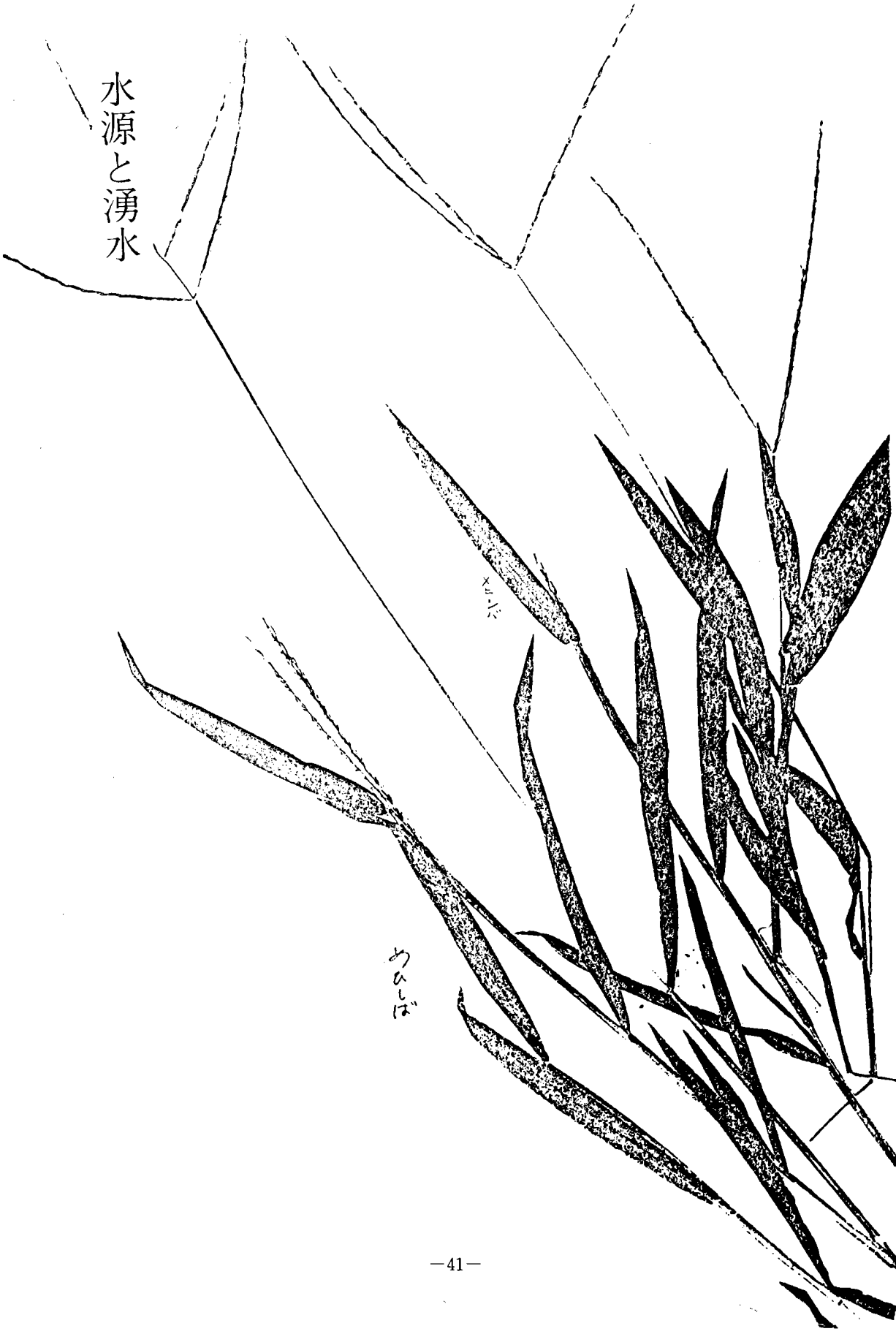
今回のアンケートで、野川の水源を知っていると答えた人は、一四三人中六七人（46・9パーセント）、知らないと答えた人も六七人で同数でした。無回答の人は九人（6・2パーセント）でした。

このうち、水源の名前や場所を挙げた人は、五一人となっています。設問が、水源の名を挙げることを要求していないので、たんに「知っている」とだけ答えた人が、一六人ほどいるわけです。水源の名を挙げた五一人の人たちの中で三一人は、「日立中央研究所」を挙げ、一人が「真姿の池」を挙げています。

その他の一九人の人たちは、たんに「国分寺」、「恋ケ窪」、「貫井神社」、「滄浪泉園」、「東京経済大学」、「多摩川上流」などと答えています。

野川の水源がどこか知っていますか。
野川の水源に行ったことがありますか。
そのときどう感じましたか。
野川近くの湧水をいくつぐらい知っていますか。
その湧水について何か感じたことがありますか。

水源と湧水



コラム

高橋 源一郎編

「武蔵野歴史地理」第三冊より

（昭和五年刊・武蔵野歴史地理学会発行）

※旧字体を新字体にあらためました。

小金井村

総説

小金井村は武蔵野町の西、多磨村の北にある。全村を分ちて、小金井、貫井、小金井新田、梶野新田、関野新田、十ヶ新田栗山、是正新田等々の各旧村里とする。村の南部に武蔵野台地の一大段丘があり、其麓を回って国分寺村恋が窪より流れ出る野川―或は堀川―沿岸の水田があり、北方台地の内にもわずかばかりの低地と一小野水とがある。前者には貫井及び小金井本村の集落があり、後者には小金井新田の部落が散在して居る。貫井、小金井、両本村は古き郷里で、他の各部落は、何れも近世享保後の新墾である。

国分寺小金井の武蔵野段丘

武蔵野は平担ではあれど、諸処に低地もあれば段丘もある。この段丘の中でも特に著しいのは、国分寺、小金井段丘である。この国分寺、小金井段丘は、武蔵野の西辺狭山箱の池より発する一小野水の作った低地が元で、今の国分寺村の西辺より起り、始めは西南走し、中部に至って東走し、次ぎに又西南走して、小金井村、神代村、調布町の方南に至って居る。其高さも始めは低けれど、漸次に高く、東部に至って又漸く低く、遂には全く段丘の形を失うに至る。中部の高き処にては勿論、東部にても其麓より盛に清水を湧出する。加うるに此中部から東は恋が窪低窪地より発する一小野水即ち野川或は堀川が其麓を回って流れ、沿岸に若干の水田をも開いている。

この段丘こそ武蔵野開拓史上誠に意義の深いもので、中部の南面した処には、上代より若干の人家村落が発達した。是即ち今の小金井村小金井、貫井及び国分寺村国分寺部落で武蔵国最大の古蹟なる奈良朝時代の寺院国分寺も、この崖下に営まれた。東部は其方向が西南に面して居り、西風を防ぐの便なく、人類の棲処としては余りに良好では無けれど、しかも尚、三鷹村大沢の孤村を生じ、其下方には更に多くの村里を生じた。ただ西方の一部だけは段丘も低く、湧出する水も少く、徒らに西風の強き為、久しく棄てて顧られなかったが、しかも尚近世慶長年中には、この段丘に続く低地を基礎として砂川村の新田が営まれ、享保前後には中藤新田等の二三新田がこの崖下に営まれた。

かくして此段丘の麓は今は一部を除くの外、鶏犬の声相聞ゆるに至った。勿論段丘としては方向悪き部分多く、理想的のものではなけれど、その武蔵人に与えたる恩恵は決して少小ではない。若夫れこの段丘が全部南或は東南に面して居ったならば、其恩恵は一層偉大で、其麓は早く人家村落を以て埋ったのであろう。

ハハコグサ

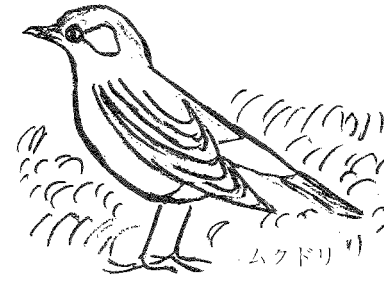
キクイモの花

った「いね科」の植物は既に枯れて、夏の草がものすごい勢いで上へ上へとのびていました。背が高くなった植物は「たけにぐさ」、「きくいも」、「おおけたで」、「あれちまつよいぐさ」、「洋種やまごぼう」、「ぶたくさ」で、さかんに花が咲いて「洋種やまごぼう」は木のように枝もはり、他の草に抜きんでています。草紅葉になっているのもあります。割合丸山橋に近い所に多いようです。川の南の斜面に「いたどり」の群落も「やぶまお」も花盛りで、中前橋の上流に「おかとらのお」の小群落がありこれも花盛りです。土が新しい「遊水池」の周囲はせい高のっぽの夏草ばかりで、「ぶたくさ」、「きくいも」、「かなむぐら」が巻きついて壁のような景観で、細い道を行くには長袖、長ズボンでないと通り抜けは傷だらけになり不可能です。二枚橋から上流へ二〇〇mの南斜面に「のかんぞう」の群落があり、花盛りでした。「小金井新橋」から下流へ白や紫の可憐な五弁花がたくさん咲いています。これは「わるなすび」で花に似ず木はするどいトゲがびっしり生えています。七月三十一日は「風草」「すすき」の穂も出てきました。中前橋と小金井新橋の間にある「島」は、「おおけたで」と、「おおいぬたで」が花盛りでした。

ワルナスビの花

カワセミ

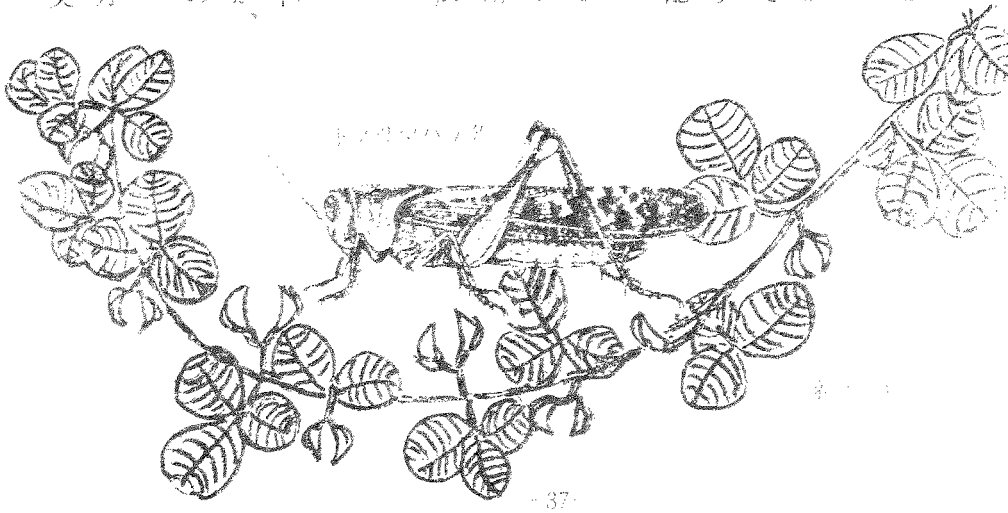
カゼクサ

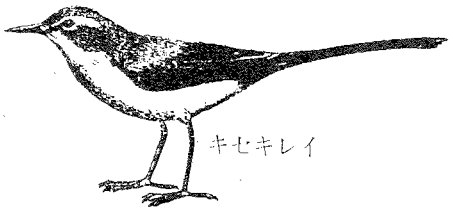

ムクドリ

・どじょう・いもり・えびがに・やまべ（おいかわ）・やつめうなぎ・あゆ・おばば・ごまめ等ひまがあれば野川にかけつけ、釣をした少年時代を過した人がいます。戦争中でしたけれど、野川の思い出は今の子どもたちに比べると最高でした。

野川も家庭排水がだんだん断ち切られて、水がきれいになってきたので、水生動物には少々期待が持てそうです。川藻等も大分生えてきました。しかし流入する排水が断ち切られると、水の減少による汚れも心配になってきます。ムラサキハナダイコンは丸山橋の下流あたりからここ数年だんだん増えていました。そして昨年の春には、川の流れの上におおいかぶさるようにして、見事な紫色を見せてくれましたが、種子が川の中にほとんど落ちてしまったのか今年はさびしい限りでした。

その後の野川の周辺のながめでは、七月三日に「白っ子のつばめ」がいました。東町から散歩に来た人が、じっと見つめているので何かしらと見たら白いつばめでした。肩のあたりが少し灰色がかっていましたが、目が赤いかどうかまでは観察できませんでした。七月二十日すぎの野川のあたりの植物のようすは、春に実

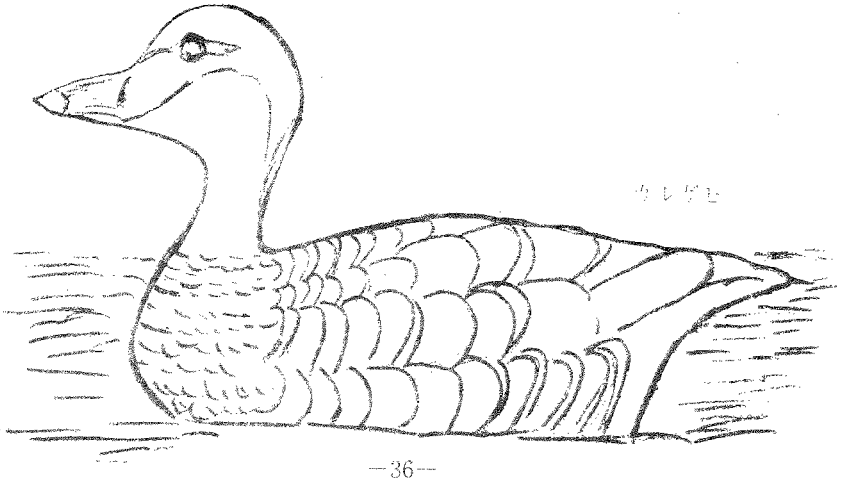




木でした。清水先生にうかがった貫井神社にあった「にょいすみれ」の名の起こりは、花の柄が仏教の如意棒のように花の下の所からくっと上向きになっているところから出たとのことです。またの名を「つぼすみれ」といいます。また貫井神社の上の林に「うわみず桜」がちょうど咲いていました。大分普通の桜より時期がずれています。目立たない花でした。

昭和四十五年に小金井から「たんぼ」が姿を消し、野川の改修が行われたり、「武蔵野公園」が整備されるまでの数年間は、旧「たんぼ」のあたりの野川の自然は、充分に市民に楽しみを与えてくれました。春には楽しい摘み草で、れんげ草、つくし、よめな、逢（ヨモギ）等を思う存分摘んだことでしょう。またアンケートにはたくさんの魚の名前が出てきて、昔の野川の楽しい川遊びのようすが思い浮かべられます。

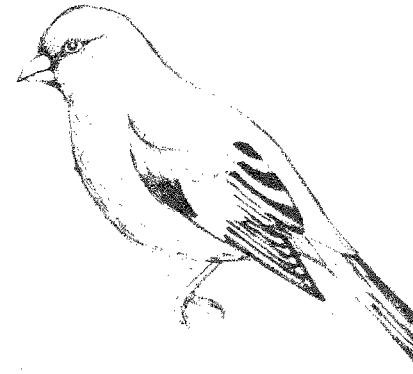
昭和三十年頃から農薬の使用量が増え、小金井の人口の急激な増加に伴う、多量の汚水の流入、河川改修により流れが急になったことなど、いくつもの原因が重なり、そのため魚がどんどん滅亡してしまいました。昭和十八年・十九年頃には、それこそ魚も豊富で、鯉・鮒・うぐい（はや）・なまず・げばち・鰻・たなご



ナンジャモンジャの木(貫井南町)

そのことが分った二、三日後に、新聞に「一つ葉たご」の記事が出ていて、明治神宮にあるとのことでした。やはりどこにでもあるという樹木ではなく、珍しい樹

ヒトツバタゴ

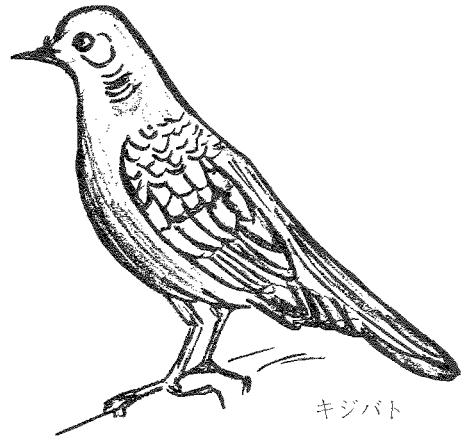


カワラヒワ

昭和五十八年三月十一日に、野川公園の二枚橋入口のすぐそばにある池には、立枯れたかや等がいっぱいありました。その中で「かわらひわ」が二〇羽位楽しそうにとびまわっていました。五月八日の観察会で、野川最源流の奥の「日立中央研究所」の池でけたたましい「かいつぶり」の声をきいた人が出ました。また池のふちに生えていると思われるミズキの大木は、空にとどくように大きく、段々になった枝には白い花が真盛りでした。順々に最源流から野川を下り、「東京経済大学」の構内では、珍しい木として「いぬざくら」を観察しました。貫井神社のすぐ西のはけの道の角の、野川より北へ坂道を登ること三五mのお宅で、珍しい木の花を見つけました。そのお宅の方に伺ったら、小金井には他になく調布の方にあるとかで、「なんじゃもんじゃの木」というそうです。その場での清水氏の説明によると、「なんじゃもんじゃ」とは、なんだか分らないということで、各地にある「なんじゃもんじゃの木」は、それぞれ違うものであるということでした。

その花は、白いちりちりとした、細い花びらで、ちょっと「まんさく」の花を思わせるような花の形でした。後で調べていただいたら「一つ葉たご」といい、

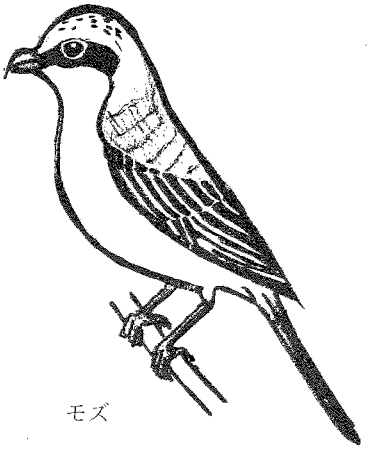
ヤハズソウ



キジバト

小金井街道にかかる「前橋」より下流は、人家の間を流れる野川を脱して、自由に観察できる野川になっていますが、ずうっと武蔵野公園まではフェンスにはばまれて、自由に川まで下りて行けない状態にあります。そのためフェンスの外側の草は一つ一つ観察できますが、フェンスの中の草は遠くから眺めて良く目立つ草に限られてしまいます。フェンス内に入り、つぶさに調べたならば、まだまだ相当数の新しい植物が登場してくることと思います。

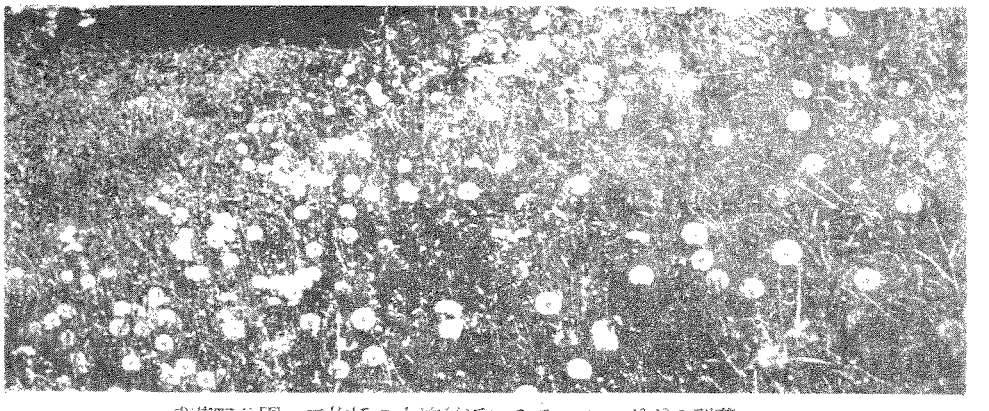
みなさまから御回答をいただいて、また我々が野川の動植物に挑戦しようというわけで、昭和五十八年五月八日に、野川の最源流から野川公園の入口まで観察して歩きましたが、一日では足りず、次の日曜も観察しました。小金井自然観察会で指導して下さっている清水徹男氏に通年の野鳥のリストをいただき、同じく植物の指導をしていただいている大熊五郎氏は、五月八日以降、何週間にもわたって調査して下さいました。また自然観察会にいつも参加なさる貫井南町の大石征男氏にもずい分助けていただきました。植物の名前は、花が咲いている時が決定的な時期になるとのことで、なかなか決定できない植物もありますが、特徴を備えているものは取り上げました。



モズ

く、見たが名前が分らない人、一、二の植物の名前を挙げて、「その他野草」、「雑草」とか「草の繁り」とか、ひっくるめて「草」という概念の人、「緑一杯」という人等、あわせて一二人でした。またその中で、昭和二十七年頃までは、野川で、鮎・たなごを釣ったという人がありました。

アンケートの結果について考えてみますと、何の前ぶれもなく、突然野川に関するアンケートをもらいに行って、急にいつか野川を歩いて見た状況が、まざまざと事こまかに思い浮かんでくるものではなく、とにかく、一番印象の深かったものがパッと浮かんでくるというものでしょう。それに、私共の反省と致しまして、見たものが、いつ頃であったかという項目がなく、大変長い期間の回答ということになり、昔はいたが今はいない、というものも沢山あると思い残念です。たびたび野川に行ったり、遊んだりすれば、四季おりおりの動植物も思い浮かべられると思いますが、やはり動植物に関心がなければ、そこにあるのに名称が分らないため、ただただ一面の緑としてしかうつらないのではないかと思われます。見えても理解できず、回答もできないと思います。



武蔵野公園、二枚橋の上流付近にみる、タンポポの群落

動植物とのであい

野川を散策した経験のある回答者のうち、動植物との出会いについて無回答の人は二〇人、また「わからなかった」「気をつけなかった」人は六人でした。

また、散策経験のない人の中で、子どもが「たにし」をとってきた人が一人、「柳を見た」人一人、「蛇」を見た人一人でした。散策経験について無回答の人で植物について答えのあった人が一人いました。

散策経験のある人で植物だけの名前をあげた人が一七人、動物だけの名前をあげた人が二二人、この他の方が動植物それぞれについて名前をあげて下さいました。

なお、動植物のリストは、巻末資料に掲載してあります。

野川の散策経験がある人でも、自然観察はむつかし

野川に沿って散策したことがありますか。
その時、どんな動植物に出あいましたか。

動植物とのであい

貫井南町のホオノキ

下流で二件、中流で「川の色」・「雨の日の臭い」と答えた方が各々一件ありました。

この他には、上流では「溢水」・「全体的に変化した」という声が、中流では「散歩のできないところ」・「全体的に」という声が、下流では「情緒なし」という声が、流域外では「野川に近い所」という声があり、それぞれ野川のここが嫌いなところ、と教えていただけました。

回答された市民のみなさんそれぞれに、公園や「はけ」などの緑や、川そのものにどれだけ親しめるかによって、野川を好きになったり嫌いになったりしていることがわかります。

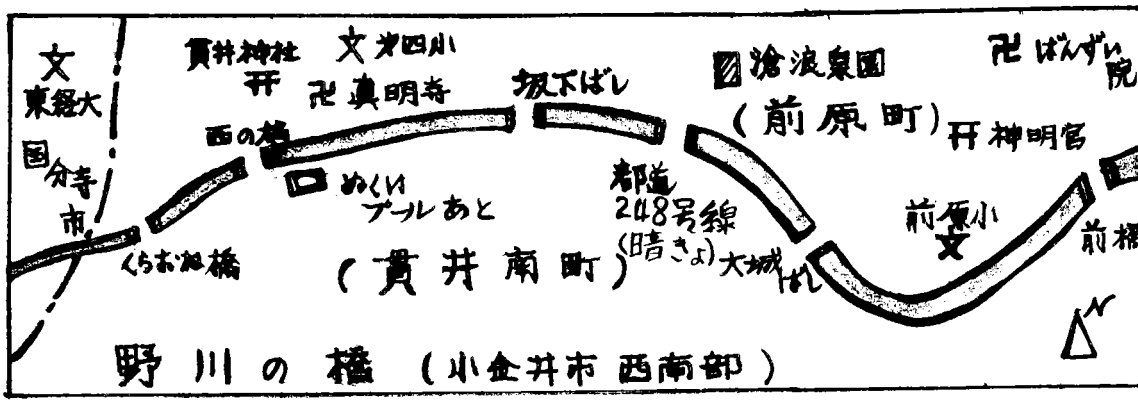
野川をとりまく町なみのあり方や、水の浄化についても、これからみんなで考えていかなくてはならない問題です。また、野川沿いに生活していらっしゃる方にとっては、臭いやユスリカの対策、ゴミの不法な投げ棄てなど、当面解決すべき問題もあります。

みんなの好ましい野川を大切にし、嫌いなところを一つでも少なくできるように、これからも考えていく必要があるようです。

表 3　私の嫌いな橋や地域

(件)

名　　称	上流	中流	下流	流域外	計
中前橋	1	0	3	1	5
小金井新橋	0	0	4	0	4
天神橋	0	0	2	0	2
くらお(ほ)ね橋	1	0	0	0	1
貫井南町	3	0	0	0	3
前原町３丁目	0	1	0	0	1
計	5	1	9	1	16



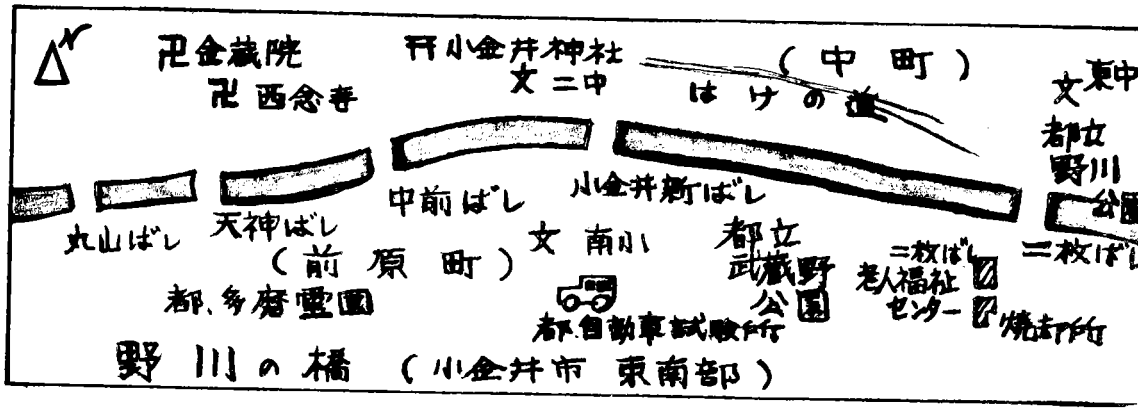
野川のどこが嫌いかという問いかけには、護岸・一四件、汚ない（水・川）・七件、ゴミすて・七件の答えがありました。内訳をみると、上流では「草のない土手」、中流では「排水口」、「今の野川沿岸」、下流では「コンクリート（護岸）」、「排水口」、「人工的」、流域外の方では「コンクリート護岸」、「排水口」が、それぞれ「嫌い」なところのリストにあがっています。

汚ない（川・水）という答えは上流で四件、流域外が三件でしたが、ゴミすてでは、中流からの答えが一件、下流が四件、流域外では二件と好対称をみせました。これは、国分寺市の下水道工事が未完成なため、生活排水が野川に流入しており、水が上流では白く濁っているのですが、流れがすすむにしたがって、自然の浄化作用と、河川が面的にひろげられたためとで、水はすんでくるからです。しかし、一方ではゴミすてが目につくようになる、という実状どおりの回答となっています。関連して、「洗剤のアワ」と答えた方が

表 2　私の好きな橋と水源・湧水

(件)

回答例	上流	中流	下流	流域外	計
二枚橋	1	1	3	5	10
小金井新橋	0	0	1	2	3
中前橋	1	1	1	1	4
昔の弁天橋	0	0	0	1	1
水源・湧水	3	1	0	0	4
計	5	3	5	9	22



件、流域外では「公園」が一件、「下流遊歩道」が一件ありました。

水源・湧水については、中流の方が「中村家の湧水」と、場所を特定して答えてくれました。

このほかに、上流では「真姿の池」（武蔵国分寺跡）、中流では「坂下・府中」・「貫井南二丁目」・「坂下・下弁天」、下流では「前原小学校上流」・「上流」、流域外の人では、「上流」・「東京経済大学下」・「滄浪泉園・貫井弁天」・「国分寺用水」と答えたかたがいらっしゃいました。

「昔」の野川については、「幅が狭い小川みたいでよく歩けた。多摩川まで歩いたことがある」（貫井南四丁目井藤澄雄さん）、「昔は全面的に良かった」、「昔は沼地だった」という回答がありました。

「その他」のなかでは、「水さえ出なければ」（貫井南町二丁目柳沢ゆきえさん）、「悪臭がなくなってきたので好きになってきた」（前原町二丁目大久保善一さん）、という意見や、児童館に集まる子どもたちなどが、野川公園の中の野川を北側と南側で、それぞれ「第一野川」・「第二野川」と呼んでいることがわかりました。

表1　私の好きな公園

(件)

回答例	上流	中流	下流	流域外	計
野川公園	9	6	8	13	36
武蔵野公園	4	8	8	6	32
くじら山	1	1	1	4	7
その他	0	0	8	2	10
計	14	15	25	25	85

私の好きなところ きらいなところ

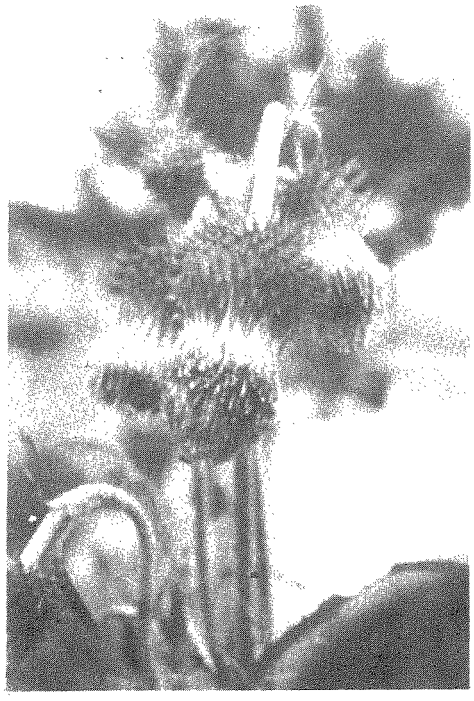
好きなところを、市民のみなさんにお聞きしたところ、「公園」という答えが八五件、「橋」が一八件、特定の地名をあげた答えが一〇件、「水源・湧水」・「全部」と答えた例がそれぞれ四件ずつ、「昔」というのが三件、その他が七件、という結果でした。

流域ごとの内訳については、表1・表2にまとめておきましたが、好きなところとしては、野川公園が三六件で第一位、武蔵野公園が三二件で第二位、二枚橋が一〇件で第三位、くじら山が七件で第四位でした。

「公園」と答えた方の「その他」の内訳をみると、上・中流域の人は一人もいませんでしたが、下流に住んでいる人では、「公園」が二件、「自然公園」が六

野川のどのあたりが好きですか、嫌いですか。

私の好きなところ
きらいなところ



タカアザミ

ており、四人に一人は悪いイメージを持っていることが調査の結果わかってきました。

川面を見わたすことのできる広いオープン・スペースのある下流に住んでいる人は、緑に親しむこともできますが、その反面、水の汚れ具合、川へのゴミの投げ棄て、ユスリカの発生や悪臭などにも敏感にならざるをえません。通勤・通学や買い物の時にわたる「橋」も、道路の一部とみるのか、川をわたるための施設としてみるのかでは、見かたも大きく変わります。

川は人それぞれの見かた、感じ方によって「清流」にも感じられ、「ドブ川」にも見えるのです。

野川と聞いて「田舎」と感じた人の内訳をみると、「小金井村民二名」（昭和十年代居住開始）、「都下市民六名」（昭和三十四～四十四年居住開始）、「小金井市民二名」（昭和五十年以降居住開始）となっています。生れ育った小金井、生活の基礎を作った小金井、選び住んだ小金井という、いろいろなかたがたにとっても、野川からは懐かしさをともなった「わがまち」のイメージがあるようです。

わたしたち市民にとって「わがまち小金井」の中で、野川はどんな川であるのかを、次に見ていきたいと思います。

昔の野川のこと（1）

主人は子供の頃から住んでいます。聞いた話ですが、小金井神社の前の橋（中前橋？）あたりで釣をしたそうです。また、その橋の前原町側に畑の間の小さな道がありますが、その辺に湧水から流れる小さな川があって、そこでザリガニをとったり、釣をしたりしたそうです。

（前原町一丁目　稲垣庸子さん）

一二人、中流七人、下流五人、流域外二人でした。この中には昔あったことや伝聞もふくまれていますが、下流以外の人はそれぞれ「氾濫」のイメージと被災経験が重なっているようにみうけられます。

「その他」の二件は、いずれも上流で、「国分寺・小金井・三鷹市南側を流れる曲りくねった汚れた川」「野川改修計画がはっきりしないので、行先が案じられる」と答えています。

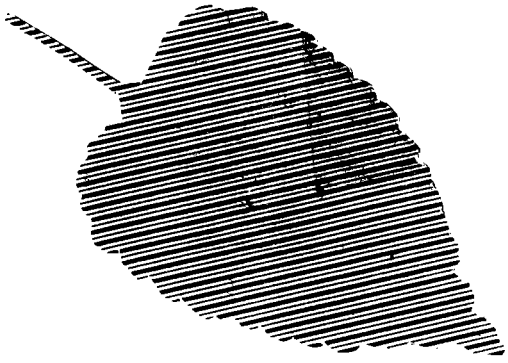
特定の場所についての回答例は表2にまとめておきました。どうしたことか、中流には特定の場所を連想された人は一人もいませんでした。

「その他」では、上流で「家の前」・「中前橋」を、流域外で「二枚橋」を連想しています。前原町二丁目在住の大久保善一さんは、昔の想い出の中で、現在の中前橋付近にあった「四割（シワリまたはヨワリ）のせき」のことを教えて下さいました。

これまでみてきたように、「野川」と聞いて流域に住んでいる人や、野川にいくらかでも関心をもっている市民の、五人に三人は何らかのよいイメージを持っ

表2　場所の連想

回答例	上流	中流	下流	流域外	計
自然公園	0	0	3	2	5
野川公園	1	0	0	4	5
は　け	1	0	1	3	5
くじら山	1	0	0	1	2
その他	2	0	1	1	4
計	5	0	5	11	21



野川から溢れた水はそこに流れこんでいました」と教えていただきました。

この他にも、「武蔵野夫人」と大岡昇平さんの作品を思い浮かべたものが三件、「縄文遺跡」と答えたものが一件、「田舎」という回答が、上流で二件、中流で一件、下流で二件、「田舎の川」が上流で二件、下流で二件、「田舎の風景」が流域外で一件ありました。また、「ドブンドブン」と音で答えた人や、「幻の川」とロマンチックな答えをした人もいました。

これに対して、野川と聞いて「ドブ川」と答えたのは一五件、「汚ない（川・水）」との回答が九件、「氾濫」が一〇件、「下水」が三件、その他が二件ありました。これらの否定的イメージを持つ回答の合計は三九件で、有効回答数の二四％を占めており、「野川」と聞いておおよそ四人に一人の市民は否定的なイメージを持っていることがわかりました。（表1を参照して下さい。）

特長がみられるのは、「氾濫」という答えで、すでに河川改修工事の終了している下流では回答例がみられませんでした。別の設問で、被災経験の有無をうかがったところ、被災経験者の有る二六人の内訳は上流

表1　野川の否定的イメージの内訳

回答例	上流	中流	下流	流域外	計
ドブ川	3	2	3	7	15
汚ない（川・水）	2	1	4	2	9
氾　濫	5	3	0	2	10
下　水	0	1	0	2	3
その他	2	0	0	0	2
計	12	7	7	13	39

多様な意見が出されました。また流域外では「自然（の川）」・「草」・「緑（の中の川）」が多かったようです。

また、「田の中の川」・「水田の灌がい用水」・「農業用水」などの農業にかかわるイメージをもった回答が上流一件、中流三件、下流三件、流域外に二件ありました。

「わんぱく夏まつり」・「子どもの友達」・「ドジョウ・フナ釣り」・「水遊び」・「子どもの遊び場所」など、遊びについてのイメージは上流・下流各一件、流域外で三件となっています。これは、流域外の児童館利用者を対象に調査をした結果と考えられます。

一方、昔の想い出としては、「大川」が一三件、「魚取り・水遊び」が一四件、「昔は清流でした」が一六件ありました。「大川」と答えた人の内訳は、上流の人はいませんが、中流では二件、下流では七件、流域外では四件ありました。「昔は清流」と答えた人は、これに対して各流域別ごとに分散しています。また貫井南町四丁目におすまいの西尾茂子さんからは、「昭和三十年頃は前の都営住宅のところがキャベツ畑で、

野川のイメージ

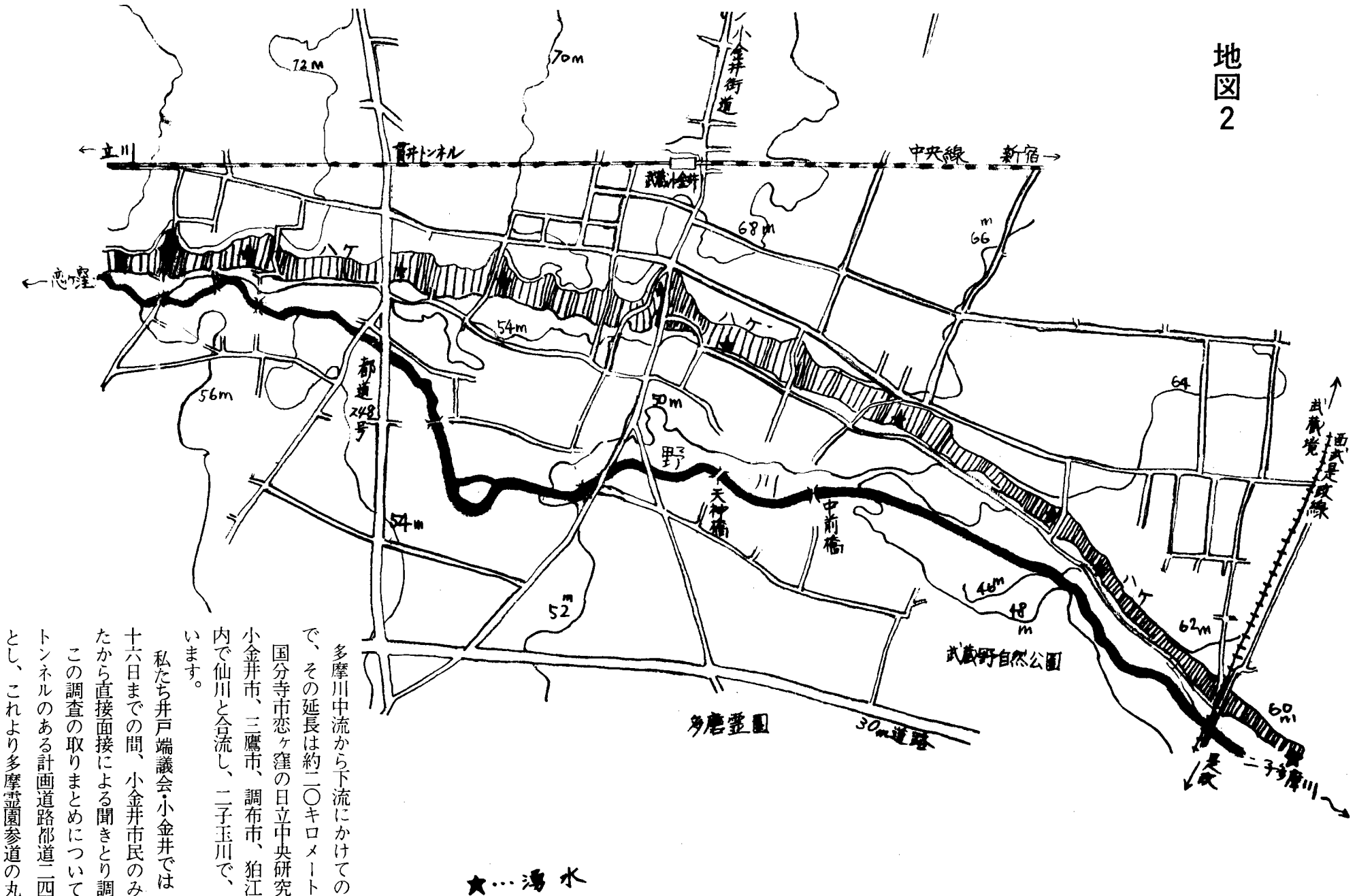
一四三人中一三七人の人が一六六項目にわたって、「私にとって野川とはこんなイメージです」と答えて下さいました。

自然環境については、「きれいな川」・「小川」や、「草」・「緑（の中の川）」、そして「湧水の小川」、「清流になってほしい」というように「野（の）川」のあり方や希望についての意見がありました。また「はけ沿いの清流」・「川の形は昔より今の方がきれい」・「散歩道」・「魚（コイ・フナ）」などと具体的な意見もありました。上流では「きれいな川」・「小川」・「緑（の中の川）」・「自然（の川）」が多く、中流では、「きれいな川」・「小川」が、下流では各々

「野川」という言葉を聞いて、あなたは何を思いうかべますか。

野川のイメージ

地図2



多摩川中流から下流にかけての最大の支流が、野川で、その延長は約二〇キロメートルあります。

国分寺市恋ヶ窪の日立中央研究所内に水源をもち、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を経て、世田谷区内で仙川と合流し、二子玉川で、多摩川へとそそいでいます。

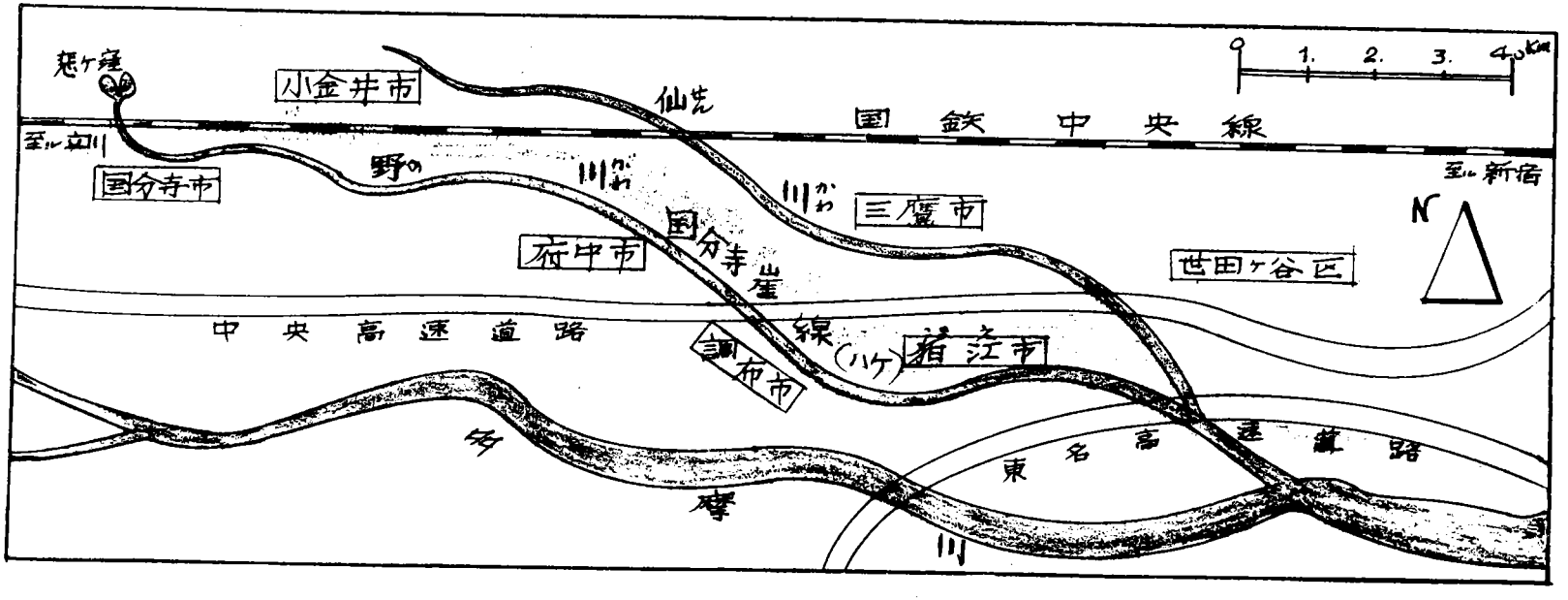
私たち井戸端議会・小金井では一昨年七月三日より二十六日までの間、小金井市民のみなさん一四三名のかたから直接面接による聞きとり調査を行いました。

この調査の取りまとめについては、便宜的に、貫井トンネルのある計画道路都道二四八号線以西を「**上流**」とし、これより多摩霊園参道の丸山橋までを「**中流**」、丸山橋より下流を「**下流**」としました。南北は、北は国分寺崖線通称「はけ」より、南側は、野川より、おむね歩いて五分くらいのところまでとしました。

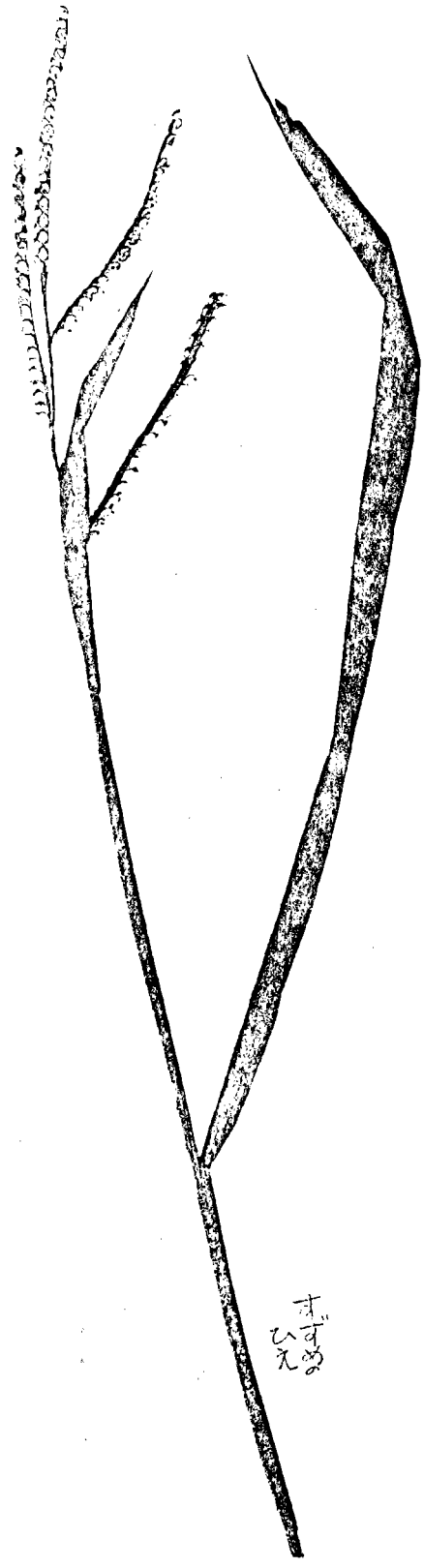
なお、これ以外の地域の在住者は「**流域外**」に分類しました。

回答者の対象分析については巻末に掲載してありますので、御参照下さい。

地図1

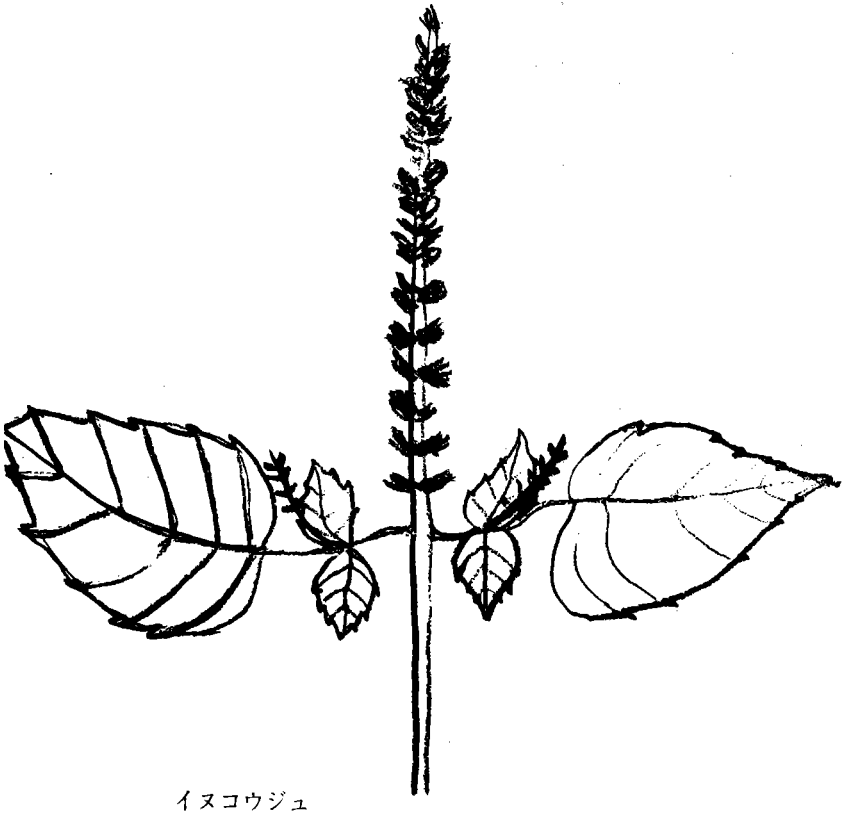

0
1.
2.
3.
4.0km
国鉄中央線
至ル新宿
至ル立川
小金井市
国分寺市
府中市
三鷹市
調布市
狛江市
世田ヶ谷区
中央高速道路
東名高速道路
仙川
野川
国分寺崖線
多摩川
N

野川とはこんな川です



ツバメ

コナギ



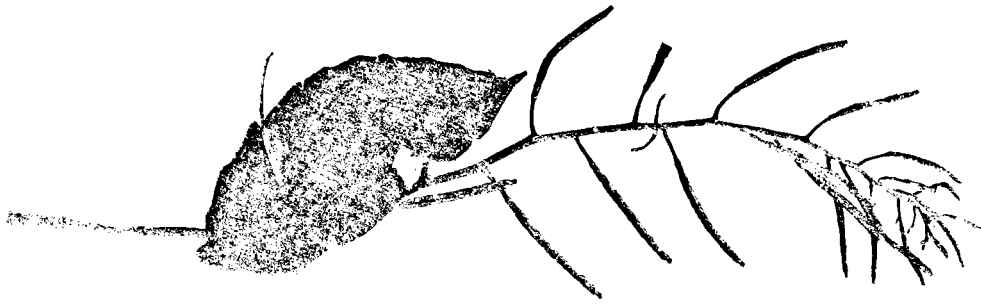
イヌコウジュ

Tak

目次

はじめに……1
目次……6
野川とはこんな川です……9
野川のイメージ……15
私の好きなところ、きらいなところ……23
動植物とのであい……29
水源と湧水……41
昔の野川……49
野川の水を考える……55
野川の水害と護岸……63
こんな川なら・わたしのアイデア……77
こうしたいな・野川……87

資料
1. 調査用紙・回答用紙 …… 98
2. 調査の方法と回答者の状況について …… 100
3. 野川周辺の植物 …… 108
4. 野川周辺の野鳥について …… 110
5. アンケートに出た他の生物 …… 109
コラム 高橋源一郎編「武蔵野歴史地理」第三冊より …… 40
班目・川合「東京の地理」より …… 76
麻畑東坪「武蔵野有情」より …… 86
聞き書き「昔の野川のこと」(1)〜(13) 21・42・47・51・53・57・61・67・73・75・81・83・93
おわりに …… 111



そこで、私たちは、82年の七月三日より二十六日までの間、主に野川沿いに在住されている市民の方々にアンケート調査を行いました。野川を身近かな話題にすることで、いろいろな生活体験を持った方から、多くのことを教えていただき、また聞きとり活動を通じて学習の輪を広げ、厚みのあるものにすることがねらいでした。

幸いなことに、一四三名のかたに御協力をいただき、市民意識の直接聞きとりを主にした調査としては一定の成果を得ることができました。この小冊子では、不充分ながらも、私たち会員自身の手で取りまとめを行いました。広く市民のみなさんの御教示を抑ぎ、市民版の「野川を考える」テキストを今後まとめあげていきたいと考えています。

取りまとめにあたっては、法政大学工学部教授河原一郎先生と、同研究室の研究者のみなさんの御指導と御協力を得ることができました。ここに慎しんで感謝いたします。

した。

市民講座が終了してからも、私たちは自主的に学習を続けようと、「井戸端議会・小金井」というグループを作りました。

自分の住んでいる町を、見知らぬ誰かに紹介するとき、みなさんはどこをどのように説明されますか。「町づくり」というよりは、手探りで「町のみなおし」が始まりました。

私たちの暮らす小金井市は、私たちの子どもたちにとっては「ふるさと」でもあるのです。私たちの毎日のくらしと、小金井の自然とのおりあいをどうすれば上手につけていくことができるでしょうか。町を歩いていて気にかかる残念なことを、一つでも改善していくことはできないでしょうか。

私たちは、こうした想いで、小金井市の南側を流れる「野川」を教材に学習を始めました。「川」を中心に町なみや自然の景観を、近りん市までふくめて地理的にも広く見なおし、かつては鮎のおよいだ清流が、なぜ今は汚染しているのか、どうすれば浄化することができるのかを考えました。

はじめに

一九八〇年秋、小金井市公民館本町分館主催で「わが町わが暮らし―町づくりを考える―」という市民講座が開かれました。東西も南北も、ほぼ四キロメートルしかないこの小さな小金井市には、法政大学工学部、農工大学工学部、学芸大学の三つの大学キャンパスがあります。私たちはこの三大学の研究者のかたから、身近かな町について自分の目で見なおす視点を学びま

はじめに

別　　冊

テキスト「私たちの野川」

THE NOGAWA MAP
PART KOGANEI

drawing by K.NAGASE

水源（日立中央研究所）すぐに排水が流入 1

A 野川と主なハケの湧水案内図

B 主な多摩川水系図

C 小金井をとおる武蔵野の南北断面図（東京の自然史より）

野川のプロフィル （多摩川 '83より）

多摩川の中下流部では、左岸（河口に向って左側）から流れ込む数少ない支川のうちでは最大である。

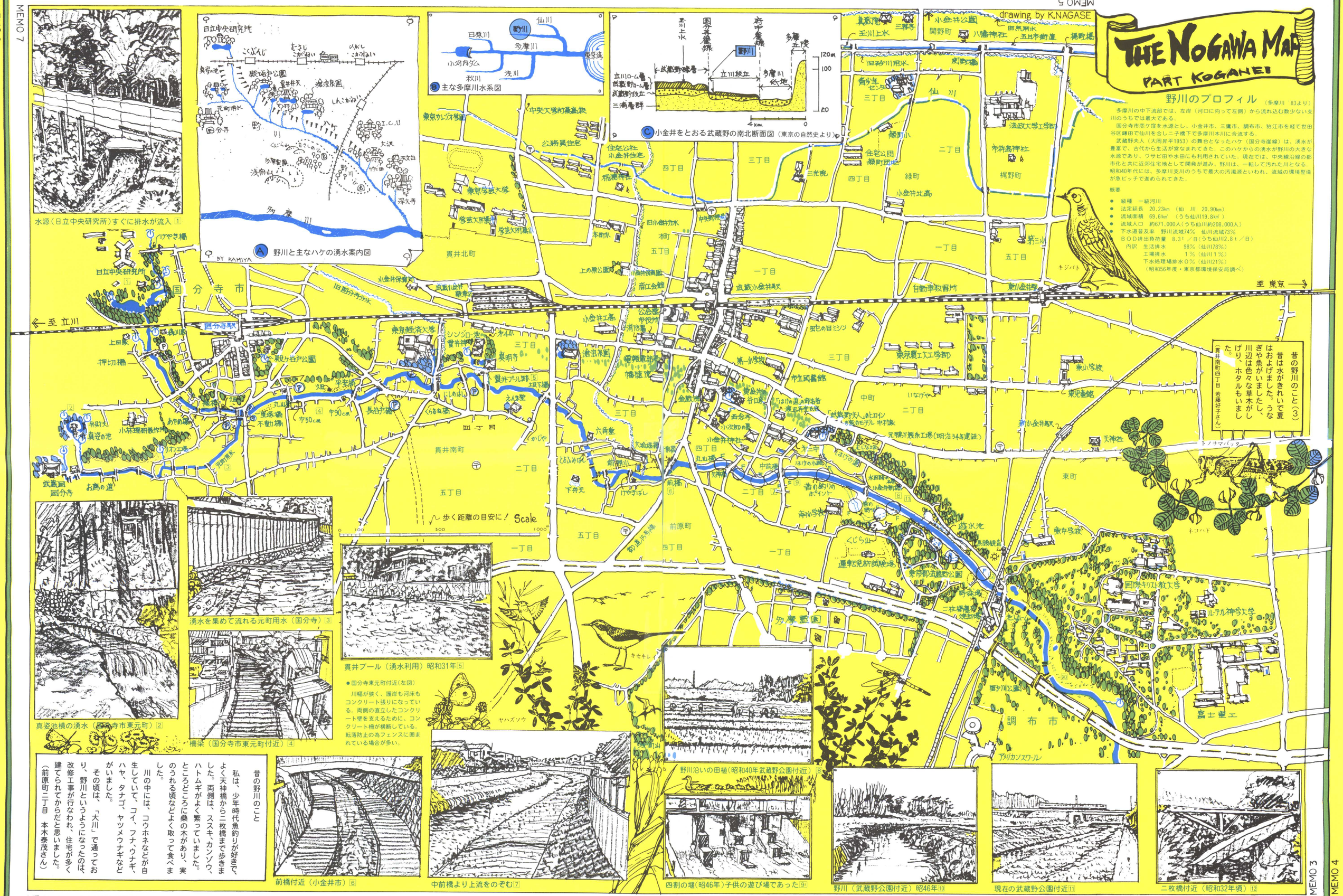
国分寺市恋ヶ窪を水源とし、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を経て世田谷区鎌田で仙川を合し二子橋下で多摩川本川に合流する。

武蔵野夫人（大岡昇平1953）の舞台となったハケ（国分寺崖線）は、湧水が豊富で、古代から生活が営なまれてきた。このハケからの湧水が野川の大きな水源であり、ワサビ田や水田にも利用されていた。現在では、中央線沿線の都市化と共に近郊住宅地として開発が進み、野川は、一転して汚れた川となる。昭和40年代には、多摩川支川のうちで最大の汚濁源といわれ、流域の環境整備が急ピッチで進められてきた。

概要

- 級種　一級河川
- 法定延長　20.23km　（仙　川　20.90km）
- 流域面積　69.6km²　（うち仙川19.8km²）
- 流域人口　約671,000人（うち仙川約208,000人）
- 下水道普及率　野川流域74%　仙川流域73%
- BOD排出負荷量　8.3t／日（うち仙川2.8t／日）

内訳　生活排水　98%（仙川78%）
工場排水　1%（仙川1%）
下水処理場排水0%（仙川21%）
（昭和56年度・東京都環境保安局調べ）



真姿池横の湧水（国分寺市東元町）2

湧水を集めて流れる元町用水（国分寺）3

柵柔（国分寺市東元町付近）4

貫井プール（湧水利用）昭和31年5

● 国分寺東元町付近（左図）

川幅が狭く、護岸も河床もコンクリート張りになっている。両側の直立したコンクリート壁を支えるために、コンクリート柵が横断している。転落防止の為フェンスに囲まれている場合が多い。

前橋付近（小金井市）6

中前橋より上流をのぞむ7

野川沿いの田植（昭和40年武蔵野公園付近）8

四割の堰（昭46年）子供の遊び場であった9

野川（武蔵野公園付近）昭46年10

現在の武蔵野公園付近11

二枚橋付近（昭和32年頃）12

昔の野川のこと（3）

昔は水がきれいで夏はおよげました。うなぎや魚がいましたし、川辺は色々な草木がしげり、ホタルもいました。

（貫井南町四丁目　若藤好子さん）

昔の野川のこと

私は、少年時代魚釣りが好きで、よく天神橋から二枚橋まで歩きました。両側は、ススキ、カンゾウ、ハトムギがよく繁っていました。ところどころに桑の木があり、実のうれる頃などよく取って食べました。

川の中には、コウホネなどが自生していて、コイ、フナ、ウナギ、ハヤ、タナゴ、ヤツメウナギなどがいました。

その頃は、「大川」で通っており、野川というようになったのは、改修工事が行なわれ、住宅が多く建てられてからだと思いました。

（前原町二丁目　本木泰茂さん）

MEMO 1　自由にメモをして下さい。

MEMO 2

MEMO 3

MEMO 4

MEMO 5

MEMO 6

MEMO 7

MEMO 8

私たちの野川

地図編

1984.3.発行

井戸端議会小金井

井戸端議会 小金井ってなに？

私たち、井戸端議会です

一九八〇年、公民館本町分館主催の「わが町わが暮し」の受講者が作った自主グループです。名前は、小金井の市民による、自由な会合の場というくらいの気持でつけました。

あなたは、今、自分の住んでいる町（中町、梶野町、貫井南町など）を、どのように他の方に説明できますか。この町をみなおしてみると、へぇ、こんなことが、ということもあるんです。

何よりも、私たちの子どもたちにとって、ここは〝ふるさと〟なのです。

私たちは『私たちの野川』という小冊子を作りました。手づくりで町を再発見するための手だてとして、この地図も作ってみました。

私たちの町をもう一度手ざわりしながら、作りなおしてみませんか。

【代表】吉田喜八郎
【連絡先】小金井市前原町三－四〇－一～三〇七
〒一八四　高橋
電話　〇四二三－八五－二〇三三

野川周辺の野鳥

野川のまわりでは80種ちかくの野鳥が見られます。その種類は季節や時間によって大きく変化します。ここにあげた鳥たちはその中でも比較的多く見られるものです。

- セグロセキレイ
- コガモ
- ハクセキレイ
- カッコウ
- キセキレイ
- ハシボソカラス
- タヒバリ
- ハシブトカラス
- モズ
- コジュケイ
- シジュウカラ
- カケス
- カルガモ
- ウグイス
- キアシシギ
- ツバメ
- アオジ
- ムクドリ
- コゲラ
- ヒヨドリ
- ツグミ
- コサギ
- ヒバリ
- キジバト
- オオヨシキリ
- スズメ
- イカル
- カワラヒワ
- ジョウビタキ
- オナガ

野川周辺の野草

何げなく歩いている野川ですが、よく見るとおどろくほどたくさんの野草が、季節ごとにその表情を変えながら、生きづいています。ここにあげたものは、その中のほんの一部です。散策の折には、参考にしてください。

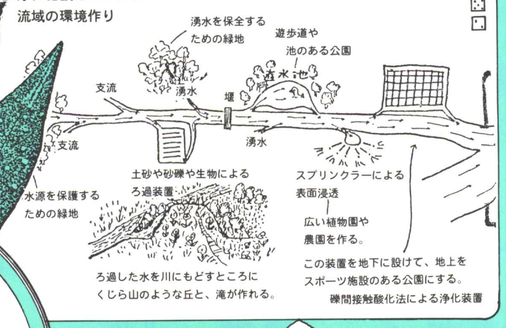
- オオイヌノフグリ
- ヨモギ
- ヒメジョン
- カナムグラ
- カラスウリ
- ワルナスビ
- ヒルガオ
- スミレ
- クズ
- シロツメクサ
- メヒシバ
- ナズナ
- イヌタデ
- アカザ
- ヤナギモ（川の中）
- エノコログサ
- ジュズダマ
- ススキ
- カラスノエンドウ
- アレチマツヨイグサ
- ブタクサ
- キクイモ
- オオブタクサ
- ヒメムカシヨモギ
- チカラシバ
- ヨウシュヤマゴボウ
- カゼクサ
- セイヨウタンポポ
- ギシギシ
- ヒメオドリコソウ

D. BY C. SATOH

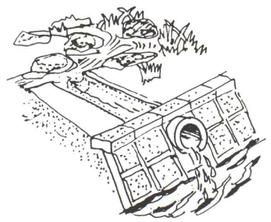
こうしたい!!

⑫湧水を利用、楽しい水辺に

⑧浄化施設を生かした流域の環境作り



⑦湧水を下水に流さず野川へ

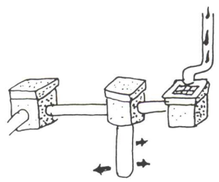


〇水源保全のために「ハケ」や「緑地」を大事に!!

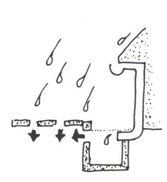
あってほしい。

宅地化のためにずいぶんた。その代りに汚れた家ます。清らかで水量の多らよいでしょう。

⑤地下水を涵養しよう



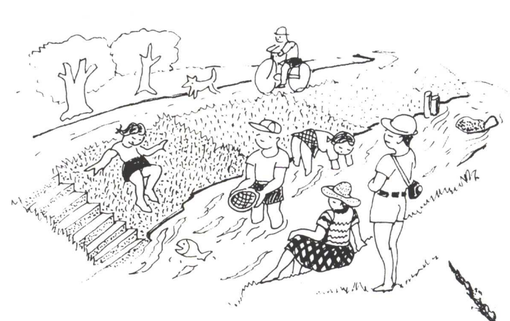
④雨水を有効に



②美化意欲をゴミをすてない

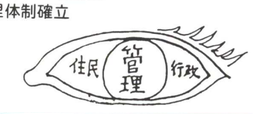
③合成洗剤、農薬を使わないで

⑪野川を親める水辺に　〇人が入れる川に



⑩生物の投入、ホタル、魚、水草

⑨管理体制確立

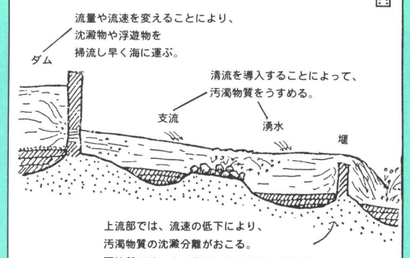


アイデアいっぱい 野川な

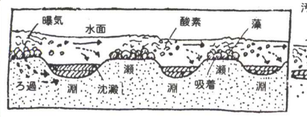
清らかな流れで

野川はわき水の川です。湧水は枯れてしまいました。庭排水が水量を補っていい川にするにはどうした

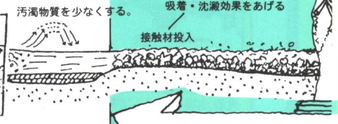
河川の中で意図的につくる浄化作用 ⑥



河川の自浄作用の概念図



伏流水と表流水を入れたり、ろ過したりして汚濁物質を少なくする。



建設省関東地方建設局京浜工業事務所発行「野川浄化施設」より

野川スゴロクサミット

⓪川の利用を考えよう

①野川を知ろう

D. BY HIKOSAKA